藤代義雄著

日本刀工辞典 新刀篇

はしがき

私が一生の中に爲し度いと思つた仕事、其がこの刀工辭典であつた。
古書のみによらず自己の見聞の範圍に於て人撰をなし、實在刀によつて解説の基礎を與へんものと、營業の余暇に拙き筆を走らせつゝ此の數歳を過し來つた。
併しかゝる綜合的な述作はこれのみに沒頭し得ない私に取つては極めて難事業であつた。
今やつと完成の喜びを以て、おもむろに省るときなほ不充分なる点も多く、又其の後入手の新資料も都合にて掲載し得なかつた憾等不滿を禁じ得ないものがある。
とは云へ私は殘されたる古刀篇の上梓に全力を傾到する爲めに一先本書を江湖に提供しやうと思ふのである。
心中竊かに讀者諸兄に稗益あらん事を念じつゝ

昭和十二年九月十八日

藤代義雄

凡　例

一、著名刀工の銘は若年から晩年に至るまで、其の變遷を知るに必要なるものゝみを撰び掲載した。但し二流工以下の押形と雖出來得る限り廣く收錄に努めた。

一、刄文圖は著名刀工の頂に之を掲げ、師弟關係、同流派乃至類似工を添記し、各自の作風解説と相俟つて一刀工の特徴を理解すると共に他の工との異同共通点を比較するに便ならしめた。

一、本新刀篇は左記の二ツよりなる。

新　刀　（慶長……寶曆）

新々刀　（明和……大正）

昭和の現代刀工は新々刀より區別した。

一、刀工の位列は古書によらず現在の角度から著者の私見に基いて之を附した、只參考迄に御覽願ひ度い。

一、本書に收められた業前は山田淺右衛門吉睦の古今鍛冶備考撰に據るものである。
「最上作」「上々作」「上作」「中上作」「中作」
「最上大業物」「大業物」「良業物」「業物」但し新々刀期作者はこの業前撰定から除外されてゐる。

一、本辭典掲載の押形は何れも正眞と認めたものゝみである、御不審の点に付いては理由を附して御教示あり度いと思ふ。

新刀篇目次

著名刀工索引

著名刀工索引

日本刀工辭典 新刀篇

◇**一峯** 佐々木初代　〔寛永―近江〕　新刀 **上作**

紀州石堂の流れにして、近江石堂と稱せらる、作品は大亂刄錵付の砂流交り大出來のものが多い。(業物)

刻銘「一峯」

◇**一峯** 佐々木貳代　〔天和―近江〕　新刀 **上作**

初代一峯子にして、江戸にても造る、その出來大亂刄初代同樣のもの又は石堂是一と殆ど變らざるものありて、丁子刄を最得意とする。(業物)

刻銘「江州住人佐々木善四郎源一峯」「江州住人佐々木入道源一峯」

◇**一秀** 池田 〔文化―羽前〕 新々刀 **中上作**

水心子正秀門、池田清内と稱し天保十二年五月他界、行年六十九、その作品は五ノ目揃ひたる足入り、又は直刄締りたるもの、地鐵無地風にして大体師正秀に似たるも、

刄文揃ふ處に彼の特徴を見る。

刻銘「池田一秀入道龍軒」「一秀入道作」「出羽國池田一秀入道龍軒」「出羽國田川郡鶴岡住一秀入道龍軒」

＊**一法**＝武藏初代常光參照

◇**家時** 宍粟 〔寛永―播磨〕 新刀 **中作**

刻銘「播州宍粟住家時」

◇**家忠** 吉兵衛尉 〔寛永―加賀〕 新刀 **中上作**

金澤住、初め吉兵衛尉と稱し後將監と號す、作品地鐵小杢强く澄み、箱亂又は逆丁子になりて加州兼若の作に似る。(業物)

刻銘「賀州住吉兵衛尉家忠」「賀州住藤原家忠」

◇**家忠** 賀州 〔寛文―加賀〕 新刀 **中作**

四郎兵衛と號し、家忠貳代目。

刻銘「賀州住藤原家忠」

◇**家重** 加州初代 〔寛永―加賀〕 新刀 **中上作**

陀羅尼派の祖、勝家子、善三郎と稱す、作風播磨大掾清光に似る。

刻銘「加州住藤原家重」

◇**家重** 加州貳代 〔寛文―加賀〕 新刀 **中上作**

家重子、伊豫大掾勝國の親と云ふ。

刻銘「加州住陀羅尼藤原家重作」

◇**家廣** 加州 〔正保―加賀〕 新刀 **中上作**

六郎左衛門と云ふ、作品中直刃多く、その作風は播磨大掾清光に似る。（良業物）

刻銘「加州住藤原家廣」

◇家平 加州初代　〔寛文―加賀〕　新刀 **中上作**

四郎兵衛尉と號す、金澤住、兼若風のものを作る。（業物）

刻銘「賀州住家平」「賀州住藤原家平」

◇家平 加州貳代　〔元祿―加賀〕　新刀 **中作**

初代家平と共に兼若に似るも華やかなる刄文が多い。

刻銘「賀州住藤原家平作」

◇市太 肥前　〔寛文―肥前〕　新刀 **中作**

俗名市太にて作品を殘す、刀工名不詳。

刻銘「肥前國住源市太」「源市太」

◇治國 北窓　〔天和―攝津〕　新刀 **上作**

井上眞改門にして、惣兵衛と云ふ、後日向に移る、作柄大亂荒錵つき華やかにして、師眞改の作風を繼承す。（業物）

刻銘「八幡北窓治國」「北窓治國造」

◇治國 鈴木八郎　〔嘉永―攝津〕　新々刀 **中作**

刻銘「浪花住治國」

◇晴吉 米澤　〔文久―羽前〕　新々刀 **中作**

刻銘「米澤住晴吉」

◇繁慶 野田　〔元和—武藏〕　新刀 最上作

小野善四郎と云ふ、初銘清堯、後繁慶と改む、生國三河、初め鐵砲鍛冶にして後駿河に來り刀劍を造り始む、暫らく武州八王寺にも住し、更に江戸鐵砲町に移る、繁慶の八王寺在住中は、二代將軍より年々炭千俵を賜はり、其際本多作左衛門より繁慶に與へし炭代の書付一通り現存すと云ふ、(新刀名作集) その師は相州綱廣なりと云へど中心の異形は島田義助に之を見るものなるを以て義助に學ぶとも想像せらる、嘗て自作の一刀、時の本阿彌之を見て正宗と鑑定せしに、正宗如きに見誤られて殘念と憤慨せしと云ふ、自負心の旺盛なりしを知るに足る、この剛放不屈の性格が後日江戸城大門邊にて闇討に遭ひ逝かしめたのではなからうか。

作刀は、地鐵弱く大板目に肌立ちて肌割など交り(相當大なる肌割有りても繁慶の刀には是非なしと迄認められる) 刄文大亂錵最深く、肌にからみて砂流おどる、是等すべて相州傳を模したる繁慶獨自の作風である。(良業物)

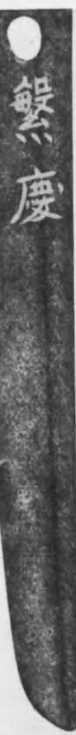
刻銘「繁慶」「小野繁慶」「野田善四郎清堯」「野田善清堯」「日本善清堯」

初期銘(鐵砲銘)

小刀區送り

壯年銘

壯年銘

壯年銘

繁慶の中心＝中心尻が丸みのある刄上り、刄區の深いもの多いこと等が注目される、鑢目は表勝手下り裏反對の勝手上り、棟は檜垣鑢、どこまでも異風のある作者である。

繁慶の銘別＝繁慶の繁の一部が壯年銘は**ロ又**に切り、晩年は**ル又**に切る、これは銘の變遷に他ならない。

地錵く大板目に大亂肌にからみて砂流おどると云ふのが繁慶特有の作風であつて、古作では則重を偲はしむ、新刀期に於ては繁慶獨自の作風である。（類似工　繁昌、水心子正秀、大慶直胤、細川正義）

晩年銘　亂刄

◇寶壽　米澤　〔文政―羽前〕　新々刀　**中上作**

國秀子、古刀寶壽の末流より出たるため命名せるものであらう、長運齋綱俊の如き作風。

刻銘「米澤住加藤寶壽」「寶壽」

◇卜傳　坂東太郎　〔延寶―常陸〕　新刀　**上作**

大村加卜門、川村市左衛門と云ふ、初め武藏守吉門と銘じ、水戸義公御抱え刀工、延寶五年坂東太郎鏌正入道卜傳と改む、作刀姿雄大なるもの多く、刄文大亂錵崩れ、業物として名高い。（良業物）

刻銘「常州水戸住坂東太郎鏌正入道卜傳」「關善定兼吉家武藏守吉門」

初期銘

◇**友常** 武藏守 〔寛文—美濃〕 新刀 **中作**

尾張、江戸にも住む、古刀奈良太郎末にして三代政常門と云ふ。（業物）

刻銘「武藏守友常」

◇**友行** 高田初代 〔寛永—豊後〕 新刀 **中上作**

古刀友行の續きなるを以て友行と銘じたるものであらう、作刀は地小杢強い、刄文直刄多く匂締る。（業物）

刻銘「豊後國高田住藤原友行」

◇**友行** 高田貳代 〔元祿—豊後〕 新刀 **中作**

刻銘「豊後高田住藤原友行」

◇**友重** 加州 〔慶長—加賀〕 新刀 **中上作**

友重名は古刀友重より繼承せるものならんと思はる。（業物）

刻銘「加州住藤原友重」

◇**友重** 金澤 〔寛文—加賀〕 新刀 **中上作**

古刀時代友重の俤更になく、作柄同時代の播摩大掾淸光に似たるものである。

刻銘「加州金澤住藤原友重」

◇友　英　舞鶴　〔安政—河内〕　新々刀　**中上作**

河内國狭山住、又江戸にても造る、一見新々刀たるの感は免れ得ない、造込み異風。

刻銘「舞鶴友英作」「東都舞鶴友英造之」

◇俊　一　長運齋　〔慶應—武藏〕　新々刀　**中上作**

刻銘「長運齋藤原俊一作」

◇俊　胤　運壽　〔嘉永—丹後〕　新々刀　**中作**

宮津住人、運壽是一門。

刻銘「運壽俊胤」

◇俊　宗　長運齋　〔嘉永—武藏〕　新々刀　**中作**

土佐壽秀弟子、後長運齋綱俊門。

刻銘「長運齋俊宗」

◇俊　秀　堀井　〔昭和—室蘭〕

堀井胤明子、明治卅八年五月兼明、大正二年四月秀明と改名秀一字にも切る、昭和八年更に俊秀と改む、現在室蘭製鋼所にて鍛刀精進、丁子刃銚付のものを最得意とする。

刻銘「瑞泉堀井俊秀」「源秀明」「近江國志賀太郎源秀明作」

◇**利　長** 外記　〔享保—武藏〕　新刀 **中作**

下原住、兵太夫と稱し歳長とも切る。

刻銘「武州住外記利長」「武州下原住山本外記利長」 裏に「十五枚甲伏作」

◇**利　英** 半三兵衛尉　〔寬永—筑前〕　新刀 **中上作**

筑前信國一派、福岡是次の父。

刻銘「半三兵衛尉利英」

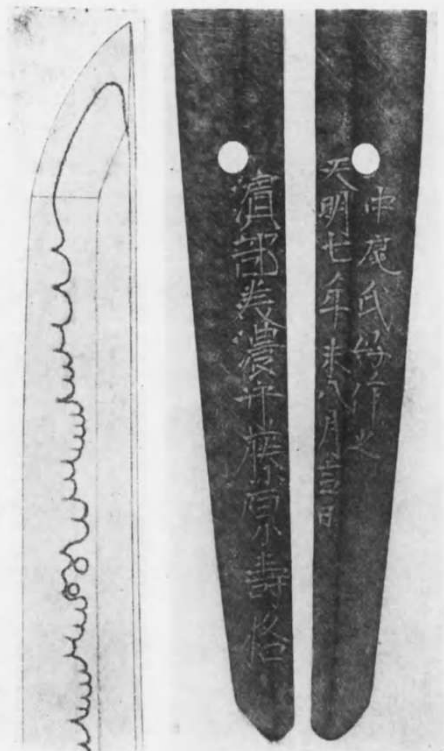
◇**壽　隆** 河村　〔文政—信濃〕　新々刀 **中上作**

濱部壽實門、生國因幡河村三郎と稱し、上田藩刀工、淸麿の師、作品壽格、壽實の如く無地鐵にて刄文匂締りたる小丁子綺麗と云ふ感じ。

刻銘「河村源壽隆」「河村三郎源壽隆」

◇**壽　格** 濱部　〔天明—因幡〕　新々刀 **上作**

通稱權左衛門、後九郎左衛門と號す、天明五年美濃守受領、文化七年六月廿四日沒、享年六十六、地鐵無地風、刄文小丁子締りて鮮明、壽格一派特有の作柄。

刻銘「因幡國鳥取工濱部壽格」「濱部美濃守藤原壽格」

菊丁子

刃文河内守國助に比し、これは細かい丁子である、よく見ると燒深き圓型が菊花になつてゐる、丹波守の菊水を丁子化したものであらう。（類似工　横山祐永）

◇壽 幸 濱部　〔文政—因幡〕　新々刀 **中上作**

壽實子にして見龍子と號し、作柄壽格、壽實に同じ。

刻銘「見龍子壽幸」「壽幸」

◇壽 實 濱部　〔文政—因幡〕　新々刀 **上作**

壽格子、濱部儀八郎と稱す、初め壽國後壽實と銘す、眠龍子と號し、弘化三年十二月十五日沒す、俗名が水心子正秀の川部儀八郎の向ふを張つた樣にて面白い、作風は父の如くであつて父より優れたりと云ふ評がある。

刻銘「眠龍子壽實」「壽實」

◇壽 秀 刈谷 〔文化―土佐〕 新々刀 **中上作**

永屋宇太夫と云ひ、初め刈谷忠國と打つ、水心子正秀門作風師に似る。

刻銘「土州住刈谷壽秀」「紫虹子壽秀」

＊**壽昌・壽長**＝山浦眞雄參照

＊**壽光**＝七兵衛祐定參照

☆**壽廣**＝宮口靖廣參照

◇歳 長 山城守 〔萬治―山城〕 新刀 **上作**

本國阿波徳島、後山城堀川に出で、二村儀左衛門と稱す、初銘廣次、後山城守歳長となる、陸奥守歳長の兄、直刃尋常なるもの、又亂れ刃もありて出雲大掾吉武に似たる作風。（良業物）

刻銘「山城守藤原歳長」「洛陽住藤原廣次」「山城守二村左近藤原歳長」

◇**歳長** 陸奥守 〔延寶―伊勢〕 新刀 **中上作**

山城守歳長弟にして洛陽及坂陽に住す、後伊勢に移り子孫此地に榮ゆ、作風山城守に似る。（業物）

刻銘「陸奥守歳長」

初銘にて歳長同人ならん

◇**朝尊** 南海太郎 〔天保―山城〕 新々刀 **上作**

生國土佐、文化年中上洛して、南海太郎と稱す、千種有功卿の鍛刀相手をなす、老後歸國、「造刀心氣法」の著ありて正秀と共にすぐれたる刀工教育家である、その作品匂縮りたる丁子、地鐵强い、彫物も見る。

刻銘「朝尊」「山城國西陣住朝尊」「南海太郎朝尊」「平安城住朝尊」「一條堀川住南海太郎朝尊」

◇**具衡** 平安城 〔寛文―美濃〕 新刀 **中上作**

山城にも住、又坂陽にても造る。（業物）

刻銘「濃州關住具衡」「平安城住具衡」

＊刻國＝信濃大掾忠國參照

◇近 則 善定 〔安政—常陸〕 新々刀 中上作

水戸住、本國美濃、地鐵無地、刄文直その他あれど總じて締りたる出來である。

刻銘「關善定家近則作」

◇千代鶴 越州 〔天和—越前〕 新刀 中作

刻銘「越州住千代鶴」

◇興 直 長曾禰 〔延寳—武藏〕 新刀 上作

虎徹門、師の風を繼承す、作品稀れである、おそらく興里父子の助手にて一生を経へたであらうと云ふ想像がなされる。

刻銘「長曾禰興直」

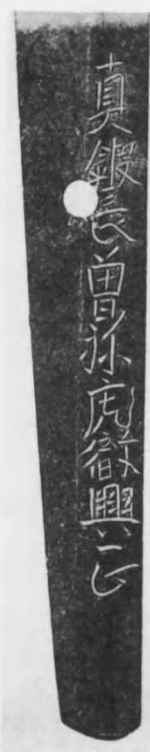
◇興 正 長曾禰 〔延寳—武藏〕 新刀 上々作

通稱庄兵衛、虎徹興里の門に入り後養子となる、銘に虎徹と添記する事がある、依而二代虎徹と稱せらる、父虎徹沒後興直、興久等の助手を得て鍛刀を續けしと思はる、江戸東叡山忍岡の邊と添銘したる刀あり父同樣其所に居住せしことが知られる、作品父の風を繼承せるも刄文概して大模樣なるものが多い。（最上大業物）

刻銘「長曾禰興正」「長曾禰虎徹興正」

壮年銘

興正の銘字は虎徹に比して非常に締りのない感じをあたへる、こんな銘で本物かと思はれる程である。

興正の若打は角張るものが多い、晩年は丸みを持つ。

興正の晩年タガネ細く、銘字が非常に弱々しい、これは老境にあるためである。

晩年銘

晩年銘

五ノ目亂

刄文五ノ目亂足太く深く入り荒錵もつく、鋩子は小丸にて掃掛、興里に比して大模樣なるものが多い、鋩子小丸もある、地小杢美しい内に心鐵が現れるのを普通とする。（類似工　長曾禰興里、大和守安定、上總介兼重、法城寺正弘、但馬守貞國）

◇興　里　長曾禰　〔寛文　武藏〕　新刀　最上作

生國江州長曾禰村、師を肥後大掾貞國と云へど、こは寧ろ彫刻を學びしならん、鍛刀師事は故杉原祥造氏の上總介兼重說がある、更に伊勢大掾綱廣說がある、綱廣及その一門が興里風の五ノ目小亂を燒てゐる点首肯すべき所がある、彫刻優れ劍卷龍、不動、達磨等あり素劍などにても彫物同作又は同作彫之と中心に必ず切る、承應明曆頃五十歲前後を以て、江戸に出で此頃より入道して本所割下水に住す、後上野池之端、湯島等に轉居、万治二年松平賴元侯に抱へられ、當時既に山野加右衛門の試銘によりてその眞價を認められしと云ふ、延寶六年六月廿四日逝く、作刀反淺く地小杢縮る、刄文小五ノ目亂匂足太く入る、元の方弱き鐵を見せるもの普通である。（最上大業物）

刻銘「住東叡山忍岡邊長曾禰虎入道」「長曾禰興里」「長曾禰虎徹入道」「長曾禰虎徹入道興里」「長曾禰興里入道虎徹」「虎徹入道興里」

長曾禰興里の興の畀字輿の如く見ゆ。

明暦三年頃

萬治四年頃

虎の字最後のタガネ、ハネ上りたり、ゆへにハネ虎と稱せらる。

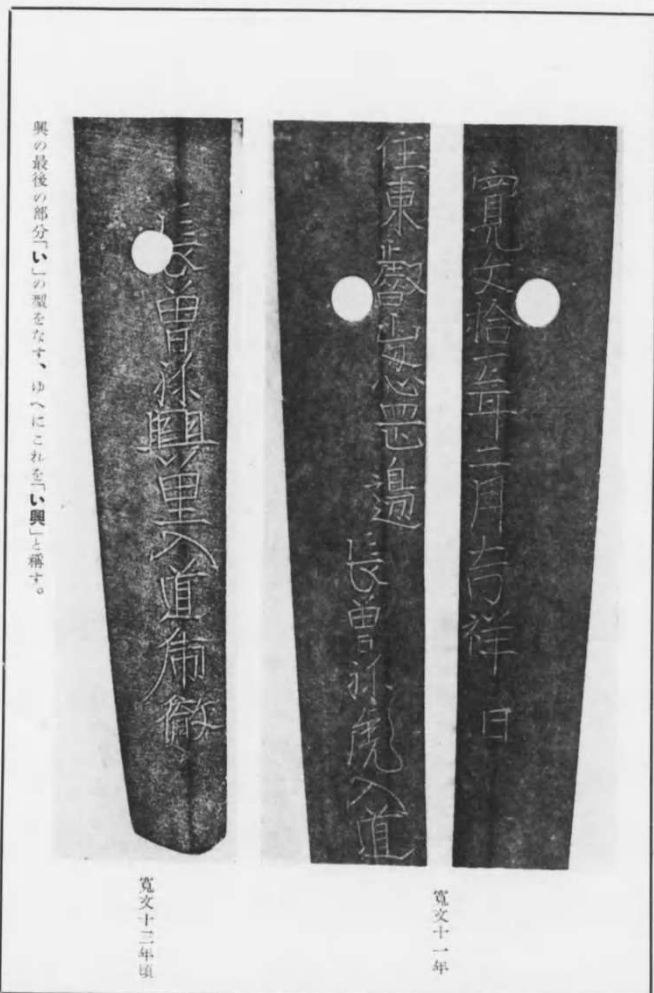
寛文三年頃

寛文四年を境としてハネ虎が角虎に改まる。

寛文四年頃

寛文六年頃

虎の字角張りて切りしものを角虎と稱す、寛文六年頃は銘字整はざる風がある。

寛文六年頃

興の最後の部分「い」の型をなす、ゆへにこれを「い興」と稱す。

寛文十一年

寛文十二年頃

興の最後の部分が「ハ」の型をなす、これを「ハ興」と稱す、既に寛文十年頃に初まりて以來「い興」と前後する。

延寶元年（寛文十三年）

延寶五年頃

五ノ目小亂

刃文五ノ目小亂、腰の淺い亂である、足が太く入る、鋩子小丸、以上が興里特有の作である、但しハネ虎時代は亂刃大なる点に進ひを見せる。（類似工　長曾禰興正、長曾禰興久、法城寺正弘三善初代長道）

彫物は龍、不動、大黒天等が有り、越前眞國の彫物に似る、「同作彫之」を中心に刻む、角虎時代には「彫物同作」と刻す。

◇興　久　長曾禰　〔延寳―武藏〕　新刀　上作

長曾禰興里門、師傳を繼承せる風尤も作品極めて稀れである、興直と同じく興里父子の助手にて終つたであらうと考へられる。

刻銘「長曾禰興久」

◇勝　家　陀羅尼　〔慶長―加賀〕　新刀　中上作

刻銘「陀羅尼勝家」

◇勝　俊　大沼　〔昭和―秋田〕

現秋田縣西馬音内町、第二回日本刀展覽會に金牌を受く、柴田果氏に學ぶ。

刻銘「大沼勝俊作」

◇勝　吉　桑名　〔寛永―伊勢〕　新刀　中上作

千子正重門、重郎左衛門と號し、播州姫路にも居住す。

刻銘「勢州桑名住藤原勝吉」

◇勝　國　伊豫大掾　〔寛文―加賀〕　新刀　上作

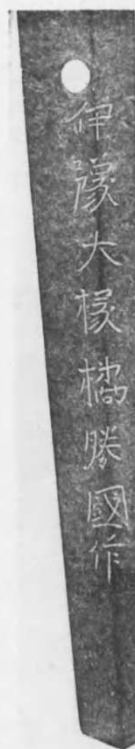
松戸善三郎と稱す、初銘家重、寛文元年伊豫大掾受領、同時に勝國と改む、寛文十二年六月八日沒、兼元の如き三本杉を焼き、その作眞に迫る、斯くして新刀初期に於て相州傳萬能は一變せられ、ここに各傳の流行を見るに至つた。（大業物）

刻銘「伊豫大椽橘勝國」「伊豫大椽橘勝國作」「伊豫大椽陀羅尼橘勝國」

壮年銘

此所には裏銘附のものを收錄してあるが實際は裏銘附は尠い。

晩年銘

晩年銘

刃文三本杉、鮮明である、古作兼元と同様であるが地鐵が進ぶ、勝國は締りたる板目である。

（類似工　新刀濃州兼元、田代兼信、備中守清宣）

三本杉

◇勝國　陀羅尼　〔享保—加賀〕　新刀　**中上作**

伊豫大掾の子又は孫と云ふ、受領名はない。

刻銘「加州住陀羅尼橋勝國作」

◇勝國　加州住　〔安政—加賀〕　新々刀　**中上作**

伊豫大掾勝國より續く、安政に至り復活せるもの。

刻銘「加州住橋勝國作」

◇**勝重** 桑名 〔延寶―伊勢〕 新刀 **中上作**

尾張にも居住す、その作風は美濃傳を引いたる新刀を想像すればよい。

刻銘「勢州桑名住藤原勝重」「尾州名古屋住藤原勝重」

◇**勝廣** 土州 〔嘉永―土佐〕 新々刀 **中作**

壽秀門、鬮田眞平と云ふ。

刻銘「土州住勝廣」

◇**包吉** 仙臺初代 〔寛永―陸前〕 新刀 **上作**

本國和州、文珠一派、阿部甚右衛門と稱し初代國包門に入る、作品初代國包風、但し柾目肌ならざるものもある。

刻銘「包吉」

◇**包吉** 仙臺貳代 〔萬治―陸前〕 新刀 **中上作**

阿部市兵衛と稱す、以下數代續くも作品を認め得ない。

刻銘「包吉」

◇**包次** 文珠 〔寛文―攝津〕 新刀 **中作**

刻銘「攝州住文珠包次」「陸奥守包次」

◇**包綱** 粟田口 〔延寶―攝津〕 新刀 **中上作**

忠三郎と云ひ、初代忠綱門、初め兼綱と打つ。（業物）

刻銘「粟田口藤原包綱」

欠

◇包　永 藤原　〔延寳―攝津〕　新刀　**中上作**

大和にも住す、大和包永の續きならんも作風は寧ろ左陸奥に似る。（業物）

刻銘「攝州住包永」「藤原包永」

◇包　則 宮本　〔明治―東京〕　新々刀　**上作**

伯耆生れ、早くより刀工を志し横山祐包の門に入る、初め能登守を稱し、慶應年間より作品を見る、後上京し帝室技藝員となる、大正十五年十月廿四日九十七歳沒、明治の癈刀令後は作品尠なきもその製作六十年間に及ぶ、身巾優しい、軍刀中身を多く作る、刄文は匂出來の五ノ目丁子又は逆丁子、時に肌ものを見る。

刻銘「菅原包則作」「帝室技藝員菅原包則」「帝室御刀工宮本包則」「宮本能登守包則」

三十八歳作

◇包國 越中守初代 〔延寶―大和〕 新刀 **中上作**

大坂初代丹波守門、師の如き簾刄尠く錵付五ノ目刄などにて單に延寶時代中新刀と見ゆる作が多い。（業物）

刻銘「越中守藤原包國」「筒井越中守藤原包國」

◇包國 越中守貳代 〔延享―大和〕 新刀 **中作**

刻銘「越中守包國」

◇包藏 仙臺初代 〔寛永―陸前〕 新刀 **中上作**

南部文珠一派、助右衛門と云ひ初代國包門、その風を繼承するも作品は尠い。

刻銘「奥州仙臺住藤原包藏」

欠

◇包 藏 仙臺貳代 〔寛文―陸前〕 新刀 **中作**

刻銘「奥州仙臺住包藏」

◇包 藏 後代 〔嘉永―陸前〕 新々刀 **中作**

包藏七代目に相當し作品を見る、この以前の包藏が余りないのは、刀工としてでなく諸刄物鍛冶に從事せる故ならんか。

刻銘「奥州仙臺住包藏」「藤原包藏作」

◇包 保 左陸奥 〔正保―攝津〕 新刀 **上作**

此の刀工の特徴とする点は銘が左文字即ち逆である事從つて鑢目も勝手上りにて逆なる事等である、是は包保が左利なる爲めの創作であり此の一派に往々左文字を見る事もあるが其は單に師の模倣に過ぎない、その作亂刄崩れ心にて異風に燒く、即ち濤亂刄の未完成といへる感がある、是此の工の時代古きを示すものといへよう。

刻銘「和州住包保於大坂作」「陸奥守包保」「陸奥大掾包保」「陸奥守藤原包保」と左文字に切る

左向文字、更に鑢目が勝手上りである、以上は左利なるためであり、自巳の左利を利用した奇抜な所業である。

砂流交りの亂刄、銚崩れ刄は包保の特徴であるが、この類似の作風は越前大掾岡次、大村加卜、鈴木宗榮等にも見られる。

亂刄

◇**包保** 右陸奥　〔寛文―攝津〕　新刀　**上作**

本國丹後、左陸奥弟子、初め包重後養子となりて包保と改む、父子共に水野侯に抱へられその城下信州松本に移る、作品左陸奥傳系のものと直刃尋常の單に中新刀と見ゆる作がある、銘も父の左文字を眞似たるものを見る。（業物）

刻銘「陸奥守包重」と左文字「陸奥守包保」と右文字に切る

初期銘　後期銘

◇**包貞** 越後守　〔寛文―攝津〕　新刀　**上作**

山田平太夫と稱し、伊賀守包道門、作品反淺く（反淺きは寛文頃中新刀全般の特徴である）刄文鑢深く五ノ目揃ひたる丁子、貳代助廣若打の如くである。（良業物）

刻銘「攝州藤原包貞」「越後守包貞」「包貞」

この初代包貞の銘が骨っぽいのに對して、貳代包貞（照包）は丸味を持つ。

初期銘　後期銘　後期銘

◇**包定** 河内守　〔元祿―大和〕　新刀　**中上作**

和州手掻包永末葉と云ふ、文珠又三郎と號し、京江戸にても作る。（業物）

刻銘「和州手掻包永末葉河内守包定」

◇包　道　伊賀守　〔寛文—攝津〕　新刀　**中作**

左陸奥包保門、作風師よりも右陸奥に似たるものが多い、左に揭げた押形は薙刀にて「伊賀守源包道寛文七丁未暦二月十七日」とある。（業物）

刻銘「伊賀守源包道」

***包貞**＝坂倉言之進照包參照

***包重**＝右陸奥包保參照

◇兼　虎　松代　〔安政—信濃〕　新々刀　**中上作**

眞雄子、隼太之助と稱し淸麿門、作風は眞雄に近い。

刻銘「信州松代士兼虎」「源兼虎」「一貫齋兼虎」

◇兼　辰　三河　〔寛永—三河〕　新刀　**中上作**

本國美濃、常陸守受領と云ふ。

刻銘「三河國兼辰」「兼辰」

◇兼　友　會津　〔寛文—岩代〕　新刀　**中作**

濃州兼永の孫と云ふ、鈴木淸右衛門友則男にして同半兵衛と號す、近江大掾兼定門、兼信又は兼常とも打つ。（業物）

刻銘「奥州會津住兼友」

◇兼　友　運壽　〔安政—岩代〕　新々刀　**中上作**

會津兼友の末、運壽の號より見て運壽是一等と關係あるもの丶樣である。

刻銘「陸奥會津運壽兼友」

◇兼友 龍眼齋 〔文久―上野〕 新々刀 中作

刻銘「龍眼齋兼友」

◇兼壽 關 〔明治―美濃〕 新々刀 中作

日置兼次弟子、因州兼先の傳流。

刻銘「美濃關住兼壽」

◇兼若 甚六 〔元和―加賀〕 新刀 上作

四方助子、初め甚六、後四郎右衛門と稱す、慶長十四年の加州打に始まり、元和五年の秋越中守高平受領、寛永四年裏銘付を見る故作品既にこの頃に及ぶ、往年金澤藩に於て兼若を持つて居る者には祿低くとも娘をやると云はれた程當時から既に有名であつた、作風始め志津の如く次に稍變化して箱亂兼若獨特の刄文に移る。（良業物）

刻銘「賀州住兼若作」「賀州住兼若造」「兼若作」「越中守藤原高平」

初期銘

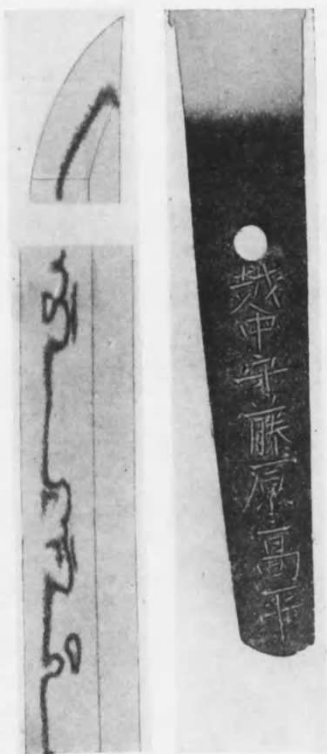
初代兼若銘を鑑別する便法は兼若の「若」五劃が上へ突抜けてゐるのを注意することである。

△氏主の添銘は後世のもの

中期銘

晩年銘（寛永四年裏銘入）

箱亂

角張りたる刄文の中に糀崩れ等が交る、これが初代兼若の特徴であつて、二代三代になるとこの糀崩れると云ふ働がなくハツキりした箱亂となる。（類似工　加州家忠、家平その他加州新刀）

◇兼若　又助　〔明暦—加賀〕　新刀　上作

年少にして兼若を名乘り、兄景平の辻本家相續をなす、延寶五年六十六歳にて沒する迄前後四十八年の長きに亘りて多くの作品を殘す、その作箱亂又は匂出來の逆丁子、勿論これも兼若否加州新刀獨特のものである。（業物）

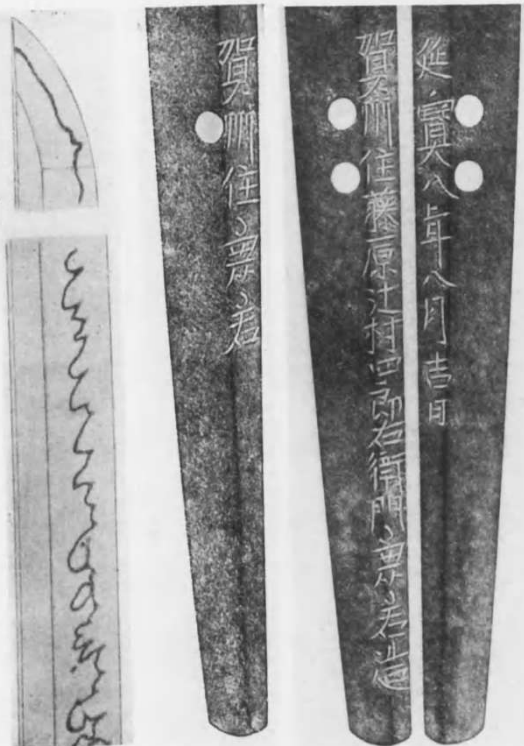
刻銘「賀州住兼若」「賀州金澤住人辻村又助藤原兼若年五十三歳造之」「越中守高平三男兼若」

◇兼若　四郎右衛門尉　〔延寶—加賀〕　新刀　上作

父又助兼若の晩年に代作をもなす、延寶五年父兼若沒後襲名す、作柄父同様なるも出來優る、刄文逆丁子が多い。

刻銘「賀州住兼若」「賀州住藤原辻村四郎右衛門兼若造」

四十六歳作

逆丁子

刄文逆丁子、烈しい感じを明瞭に現はす。（類似工　又助兼若、甚太夫兼若、賀州家忠、大慶直胤、次郎太郎直勝）

◇兼　若　甚太夫　〔享保—加賀〕　新刀　**中上作**

甚太夫と稱し、四郎右衛門兼若子、刀工不用とも云ふべき時代なるため作品尠い、子の助太夫兼若は他業に轉向せりと云ふ。

刻銘「賀州金澤住藤原兼若」「加賀國石川郡辻村甚太夫兼若」

◇兼　若　犬山　〔元祿—尾張〕　新刀　**中上作**

加州兼若とは別系、或は加州兼若の末が第二の故郷なる犬山へ移りたるものか、（不詳）元祿頃中新刀と見るべき以外更に特徴を摑み得ない。

刻銘「尾州犬山住兼若」「兼若」

◇兼景 津山
〔延寶―美作〕 新刀 **中作**

美濃新刀系、作品中直刄の單調なるものが多い。(業物)

刻銘「作州津山住藤原兼景」

◇兼武 犬山
〔萬治―尾張〕 新刀 **中上作**

美濃關の流れ、同國飛彈守氏房の感化を受けたるもの丶如くその作柄相似る、作品極めて尠い。

刻銘「尾州犬山住兼武」

◇兼常 神田
〔貞享―武藏〕 新刀 **中作**

上總介兼重子、辻助九郎と號す、泰平の時世に抗し難く、數打師に轉向したるものか。(往々に本銘の數打作を見る)(業物)

刻銘「武州神田住兼常」

◇兼次 仙臺
〔元治―陸前〕 新々刀 **中作**

仙臺治工、熊谷姓、青龍子と號す。

刻銘「仙府住青龍子兼次」

◇兼次 日置
〔明治―因幡〕 新々刀 **中上作**

因州兼先末流にして東京に出づ、その作刄文直、地光り強く一見して新々刀と見ゆるに止まる。

刻銘「兼先十二代孫因州住日置兼次作之」

◇**兼中** 武藏守 〔天和―越前〕 新刀 **中上作**

武藏にても造る、作風播磨大掾重高と似たる越前關。（業物）

刻銘「武藏守藤原兼中」 裏に「越前住」と添銘

◇**兼永** 渡邊 〔昭和―岐阜〕

現岐阜縣關町、昭和十一年第二回日本刀展覧會に海軍大臣賞を受く、洋鐵作品もある。

刻銘「美濃關住人渡邊兼永作」

◇**兼氏** 志津三郎 〔弘化―美濃〕 新刀 **中作**

兼氏十九代の孫、作刀を見ず、小カタナ（小柄身）を造る。

刻銘「志津三郎源兼氏」

◇**兼植** 越前國住 〔元和―越前〕 新刀 **中上作**

武州にても造る、作品平造小脇差あり刄文灣尖刄交り、末關の俤がある。（良業物）

刻銘「越前國住兼植」「越前國兼植」

◇**兼植** 越之前州 〔萬治―越前〕 新刀 **中上作**

作品大和大掾正則などに似て地鐵杢目肌粒立つ。

刻銘「越之前州住兼植」

◇**兼則** 炭宮 〔元祿―加賀〕 新刀 **中上作**

炭宮と二字に切りたるもあり、隠れたる大業物。（大業物）

刻銘「加州住炭宮藤原兼則」

◇**兼則** 越前 〔寛永―越前〕 新刀 **中作**

美濃兼則より續きたるものならむ、作品越前兼法に似る。

刻銘「越前國住兼則」

◇**兼 法** 肥後大掾　〔元和―越前〕　新刀 **上作**

美濃兼法の子、後肥後大掾を受領す、他に越前に於て肥後大掾を受領するもの初代康継、貞國の二人あり、而も同時代である、何等かの關係あるもの丶如く、作柄本關の遺風があり、二本樋を好みて掻く、大体貞國に似たる作風。

刻銘「越前國住兼法」「越前住肥後大掾藤原兼法」

◇**兼 信** 角兵衛　〔承應―美濃〕　新刀 **中上作**

美濃神戸住、田代角兵衛と稱す、作品刄文三本杉は勝國程兼元に迫らざるも燒巾深く健やかなる作が多い。

刻銘「田代角兵衛兼信」　裏に「濃州神戸住」と添銘

◇**兼 信** 源一郎　〔正保―美濃〕　新刀 **中上作**

田代とも田城とも銘する樣である、源一郎と云ひ大和守受領、世に源一大和と云ふ。

刻銘「濃州神戸住田城源一良兼信」「大和守兼信」

◇兼信 陸奥守　〔延寶—美濃〕　新刀 **中作**

兼元の如き三本杉を焼く、陸奥守受領。

刻銘「陸奥守藤原兼信」

◇兼安 相模守　〔寛文—美濃〕　新刀 **中作**

後藤七郎兵衛と號し、大村加卜門に入る。（業物）

刻銘「相模守兼安」「濃州關源一兼安」

◇兼正 下總大掾　〔寛文—越前〕　新刀 **中作**

服部吉兵衛と號し、關兼法五代之孫と云ふ、近江彦根にも住す。（業物）

刻銘「下總大掾藤原兼正」

◇兼正 豫州　〔寛文—伊豫〕　新刀 **中上作**

東武にも住せしか、作柄大和守安定に似たものが有る。

刻銘「豫州住西本藤原兼正」

◇兼巻 小松　〔慶安—加賀〕　新刀 **中上作**

此工は加州初代五郎右衛門の子清蔵と稱す、作品播磨大掾清光に似る、以下數人ありと云へど作品を見ない。

刻銘「賀州小松住兼巻作」

◇**兼　定** 會津初代　〔慶長―岩代〕　新刀 **中上作**

美濃關系、古川孫四郎と號し、岩代蒲生家の刀匠となりて綱房と改む。（業物）

刻銘「奥州會津住兼定」

◇**兼　定** 奥州住　〔寛永―岩代〕　新刀 **中上作**

會津兼定貳代目に相當す、古川孫一郎、濃州兼定の傳系を引き末關風の處がある。

刻銘「奥州住兼定」

◇**兼　定** 近江大掾　〔元祿―岩代〕　新刀 **中上作**

古川孫右衛門、元祿中受領、作品直刄尋常、延寶元祿頃の中新刀と鑑る以外さしたる特徴は見えない。

刻銘「近江大掾藤原兼定」

◇**兼　定** 會津　〔慶應―岩代〕　新々刀 **上作**

奥州十代目兼定、初め兼元、作品姿形よく柾目、板目肌綺麗、刄文直刄は亂、柾目なるは仙臺國包を思はしむるも地鐵光り強い。

刻銘「會津住兼元」「和泉守藤原兼定」「陸奥會府臣古川兼定」

初期銘

◇兼　定　上野守　〔延寶—越前〕　新刀　**中上作**

越前福井に住す、會津兼定と直接の關係はない様である。（業物）

刻銘「上野守藤原兼定」

◇兼　先　下坂　〔元和—越前〕　新刀　**上作**

初代康繼の父廣長が江州西阪本に住せし頃に弟子入りをなす、その作柄は初代康繼の如くなれど時代はむしろ先輩である、喜内作と覺しき彫物もある。

刻銘「越前國住下坂」「越前國下坂兼先」

◇兼　先　因州　〔寛永—因幡〕　新刀　**中上作**

日置惣右衛門兼先子にして同宗十郎と稱す、美濃古刀兼先より續き、本作は因州兼先の貳代に相當する。

刻銘「因州住藤原兼先」「因州鳥取住兼先」

◇兼　先　因州　〔寛文—因幡〕　新刀　**中上作**

宗十郎兼先子、日置兵右衛門と稱す、初め兼次と切る、この代より家督前は兼次と名乘る、作品五ノ目揃ふ、尋常なる直刄もある、かゝる調子の新味を加へたる鬪傳とも云ふべきであらう。

刻銘「因州住藤原兼先」「因幡國藤原兼先」

この他兼先銘種々あれどその多くは寛文頃の兼先ならん。

◇**兼先** 四代 〔貞享—因幡〕 新刀 **中作**

日置兵助と稱す、此の時代刀劍需要尠く從つて作品稀れ。

刻銘「因州住藤原兼先」

◇**兼先** 五代 〔延享—因幡〕 新刀 **中作**

日置兵助と稱す、延享三年藤掛姓となり甚六と稱せり、藤掛姓は當工一代限りなりと。

刻銘「因州住兼先」「因州住藤掛甚六尉藤原兼先」

◇**兼先** 妙一 〔文政—因幡〕 新々刀 **中上作**

濱部壽實門、日置矢三郎後妙一峯雪入道と云ふ、因州兼先子孫、作風師壽實に似る。

刻銘「妙一峯雪入道」「妙一因幡藤原兼先」

◇**兼先** 石州 〔寛文—石見〕 新刀 **中作**

刻銘「石州住兼先作」

◇**兼道** 丹後守初代 〔寛文—攝津〕 新刀 **上作**

京二代吉道二男吉兵衛と號し、直道とも銘す、寛文十二年七十歳にて沒す、その作刄文丁子揃ひて綺麗、又丹波守吉道の如き菊水刄、簾刄をも燒く、元に大坂新刀獨特の直燒出しがある、中心裏に菊の紋と一を刻したものが多い。(良業物)

刻銘「丹後守直道」「三品丹後守藤原兼道」「丹後守藤原兼道」菊紋を切る。

◇兼　道　丹後守武代　〔天和―攝津〕

三品喜平次と稱す、元祿年間東武へ下る、作風初代兼道傳承。（業物）

刻銘「丹後守兼道」「稻荷丸兼道」

新刀　**中上作**

◇兼　光　三品　〔寶永―攝津〕

三品紋太夫と云ひ、貮代兼道養子、享保十七年沒す。

刻銘「三品但馬守源兼光」

新刀　**中上作**

◇兼　光　淺井　〔昭和―愛知〕

作品刄文大模樣にて匂出來なれど焔の樣にして取止なく、地鐵梨地の如くにて、よく見ると荒い、洋鐵にて作る故である、昭和刀の名がある。

刻銘「尾州淺井住兼光作」

◇兼　重　上總介　〔正保―武藏〕

初め和泉守受領、勢州津藩主藤堂和泉守に仕へるに及び和泉守を憚りて上總守に改む、更に上總介に轉任す、虎徹の師なりとの說がある、その作品反淺く地小杢、刄文五ノ目足揃ひて入る、興里の所謂ハネ虎時代の作に似る。（良業物）

刻銘「和泉守藤原兼重」「和泉大掾藤原兼重」「上總介藤原兼重」「上總守兼重」

新刀　**上作**

若年銘

延寶頃
貞享頃（晩年銘）
五ノ目

刃文五ノ目刃、揃った五ノ目が本工の特徴であって興里にもこの作風を見受ける、地小杢目美しく興里程心鐵を見ない。（類似工　長曾禰興里、法城寺正弘、但馬守貞國、伊勢大掾綱廣、津田助直、坂倉照包）

◇ **兼重** 加州　〔文久―加賀〕　新々刀 **中上作**

甚太郎兼久子、前田家御抱工である、作品鎬高目の刀、地鐵無地風光り强い。

刻銘「木下伊勢大掾藤原兼重作」

◇ **兼廣** 大和大掾　〔寛文―肥前〕　新刀 **中上作**

肥前國廣子、初め大和大掾後大和守、作品その姿よく地小杢、刄文中直、この姿のよい点が兼廣並びに一般肥前刀の特徴である。（業物）

刻銘「肥前國大和大掾藤原兼廣」

◇**兼 廣** 遠江守 〔享保―肥前〕 新刀 **中上作**

大和大掾兼廣子、貳代目兼廣、瓢簞鐵造と添銘せるものは、南蠻鐵の型を稱したもの。

刻銘「肥前國藤原兼廣」「肥前國住遠江守藤原兼廣」

◇**兼 平** 濃州 〔元祿―美濃〕 新刀 **中作**

刻銘「兼平」

◇**兼 元** 濃州 〔寛永―美濃〕 新刀 **中上作**

孫六兼元末と云ふ、兼元風の三本杉を燒く、新刀關一派、田代源一郎とも稱せしか。

刻銘「濃州住藤原兼元」

◇**兼 助** 濃州 〔寛永―美濃〕 新刀 **中上作**

關に住す、彌右エ門と稱す、所謂新刀關の代表工、彫物をも見る。

刻銘「濃州關住兼助」「兼助」

***兼 常**＝相模守政常參照

***兼 之**＝會津兼定參照

◇**金 藏** 大和守 〔天和―美濃〕 新刀 **中作**

新刀關一派、東武にても造る。

刻銘「大和守藤原金藏」

◇**金 高** 豊後守 〔寛永―美濃〕 新刀 **中上作**

濃州岐阜に住す、作刀身巾有り刄文亂刄銚崩れ交る。

刻銘「豊後守金高」

◇**金 高** 播磨守 〔寛永―美濃〕 新刀 **中上作**

作刀身巾有り地板目、刄文小亂相模守政常に似たる作風。

刻銘「播磨守金高」

◇**金 行** 高田 〔寛文―豊後〕 新刀 **中作**

銘字高田もの一門獨特とも云ふべき風、作柄一見肥前刀に似る。

刻銘「豊後住藤原金行」

◇景平 賀州

〔寛文—加賀〕　新刀 **中上作**

初代兼若即ち越中守高平の長男に生れ辻村家を継ぐ、寛永五年既にその作初まる、作風又助兼若の如くである。（良業物）

刻銘「賀州住藤原景平」

◇加卜 大村

〔正保—武藏〕　新刀 **上作**

大森治部左衛門と稱し、越前侯松平光長に仕へ後水戸へ來り義公に仕ふ、本來は外科醫にして刀銘に大村加卜と刻す、正保元年より貞享まで作る、但し作品余り多くない。

刻銘「越後幕下士大村加卜慰作」「作武士大森治部左衛門號大村加卜慰」

◇髪繊

〔寛文—阿波〕　新刀 **中上作**

本國讃岐、播磨にも住す、近江守受領と云ふ、髪繊、髪次同人。

刻銘「髪繊」「髪次」「髪」

◇一 直 庄内 〔元治―羽前〕 新々刀 **中上作**

莊内に住し、佐藤兵四郎と號す、作柄水心子正秀風に似る。

刻銘「出羽國莊内住人佐藤一直作之」

◇岩 捲 清水 〔寛文―美濃〕 新刀 **中上作**

古刀岩捲より續き、業物の聞え高い、作刀身巾有り、刄文中直、地杢目、他にも數人あれど不詳。

刻銘「濃州清水住岩捲」

◇吉 家 陀羅尼 〔延寶―加賀〕 新刀 **中作**

松戸吉右衛門尉と稱す、陀羅尼一派。(業物)

刻銘「加州陀羅尼藤原吉家」

◇吉 家 佐賀住 〔寛永―肥前〕 新刀 **上作**

橋本家の一族にして相右衛門と稱す、初代忠吉の弟子、初め廣貞と切り後吉家と銘す、作風伊豫掾宗次の如くである。

刻銘「肥前國吉家」「肥前國住人廣貞」

◇吉 春 米子住 〔安政―伯耆〕 新々刀 **中作**

森田善六と稱す、米子の刀工。

刻銘「伯耆米子住吉春」

◇吉時 善定 〔寛文—美濃〕 新刀 **中作**

同名數人あり、後江戸に來る、濃州善定家末孫。

刻銘「濃州關住坂尾善定源吉時」

◇吉門 越前守 〔承應—常陸〕 新刀 **中上作**

阪東太郎卜傳子、濃州關善定家末孫、作刀鎬少し高、地板目、刄文濤亂れ。（業物）

刻銘「濃州關善良家越前守吉門」

◇吉包 信國 〔元祿—筑前〕 新刀 **上作**

祖先は豐前宇佐住、信國吉次子、信國重包の父である、助左衛門と稱し元祿六年八月廿二日沒す、作品五ノ目亂砂流交り。

刻銘「筑前住源信國吉包」

◇吉胤 〔安政—武藏〕 新々刀 **中上作**

直胤弟子、名彫刻家本莊義胤同人と云ふも實際に直面し彫刻家らしい鑽使ひを窺ふことが出來なかつた、多分これは同音異人であらう。

刻銘「吉胤」

◇**吉 武** 法哲入道　〔天和―武藏〕　新刀 **上作**

堀川國武子、川手市太夫と云ひ京より江戸へ移る、初め出雲大掾後出雲守、元祿七年五月沒す、作品尋常なる直刃が多い、又法城寺正弘の如き五ノ目小亂もある。（業物）

刻銘「出雲大掾藤原吉武」「平安城住吉武」「出雲守藤原吉武」「出雲守藤原法哲入道吉武」

初期銘

晩年銘

◇**吉 武** 出雲守　〔享保―武藏〕　新刀 **中上作**

越前三代國次の三男、吉武養子となりて川手吉左衛門と云ふ、江戸芝土器町に住す、初代吉武の法哲入道銘に正德元年の作がある、從つて貳代の作品はそれ以降と見るべきである、猶世上二代と稱せられる吉武の多くは初代の晩年作である。（業物）

刻銘「出雲守藤原吉武」

◇**吉 次** 法城寺　〔元祿―薩摩〕　新刀 **中上作**

東武住人にて根本吉兵衛と號す、法城寺國正門、寛文頃肥後守を受領す、元祿中薩州鹿兒島に移住す、作品直刃に太き五ノ目足入り、虎徹、兼重の如くである。

刻銘「肥後守法城寺橘吉次」「肥後守橘吉次作」

◇**吉 次** 信國　〔寛文―筑前〕　新刀 **中上作**

兄吉政は父吉貞の敎へに背くによつて弟吉次これを繼ぐ、左に揭げる押形を見るに寛永十一年の年號がある、ときに兄吉政が十三歲、故に弟である本工の作とは信じられない、思ふに押形の證する如くに父も吉次と名乘つたのであらう。

刻銘「筑前住信國吉次」

父吉貞の作ならん

◇吉成 播磨守　〔承應―攝津〕　新刀 中上作

本國奥州、大和守吉道門。(業物)

刻銘「播磨守橘吉成入道」

◇吉直 堀川　〔寛永―山城〕　新刀 中上作

刻銘「堀川住吉直」

◇吉長 肥前　〔寛永―肥前〕　新刀 中上作

宗長子、五左衛門と稱し初代忠吉門、彫刻家として知られ作刀は稀である。

刻銘「肥前國吉長」

◇吉信 埋忠　〔寛永―山城〕　新刀 上作

埋忠重義次男、彫刻巧なるを以て知られる、作刀は稀れである。

刻銘「山城國住埋忠吉信」

◇吉信 大和大掾　〔元祿―山城〕　新刀 中上作

埋忠吉信子、弐代目、彫刻有り、作刀稀れ、小カタナを見る。

刻銘「大和大掾源吉信」

◇吉信 肥前　〔元和―肥前〕　新刀 上作

彌七兵衛と稱し、初代忠吉婿、寛永十年四月廿九日永眠享年四十六、その作品身巾頃合にして反高からず姿よい、刄文直又は肥前特有の亂刄。

刻銘「肥前國住人吉信」「肥前國住藤原吉信」

◇吉國 上野守　〔延寶―土佐〕　新刀 中上作

本國奥州森下孫兵衛と稱す、大和守吉道門、陸奥守吉行の兄、土州の刀工となる、作風師傳繼承。

刻銘「上野守吉國」「攝州住吉國」「上野大掾吉國」

◇吉 國 鬼塚　〔慶安―筑後〕　新刀 **上作**

慶安三年の年號入りたる作に七十七歳と添記した一刀がある、更に寛文二年の作品がある、同人なれば八十九歳に相當する、作品肥前刀の如き直刄又は直湾刄を燒く。

刻銘「筑州住鬼塚吉國」「鬼塚吉國」

◇吉 正 上野介　〔寛文―武藏〕　新刀 **中上作**

もと濃州關善定家、田中源左衛門尉と稱し土佐にても造る、作風安定に似る。（業物）

刻銘「上野介源吉正造」「武州住吉正」

◇吉 正 讃州　〔寛文―讃岐〕　新刀 **中作**

刻銘「讃岐國高松住吉正」

◇吉 政 信國　〔寛文―筑前〕　新刀 **上作**

吉貞長男、通稱平四郎、貞享五年八月永眠六十歳、備前傳を修めて父の意に添はず故に次男吉次家をつぐ、併し新刀上期に於て衰へし備前傳がこゝに勃興せる氣運を覗ふことが出來る、作品小丁子刄が細かく揃ひて揃心になるが特徴又尋常なる直刄もある。

刻銘「筑前住源信國吉政」「筑前住源信國平四郎吉政」

◇吉房 佐賀初代 〔寛永―肥前〕 新刀 上作

茂左衛門と云ひ、初銘忠房と云ひ後吉房と銘ず、一説に弐代目土佐守忠吉同人と稱せらるゝも信を置き難い、作柄近江大掾忠廣の如くにして中直刄銚深きもの有り、地小杢目、冠落しがある。

刻銘「肥前國住吉房」「肥前國佐賀住吉房」「源吉房」「肥前國忠房」

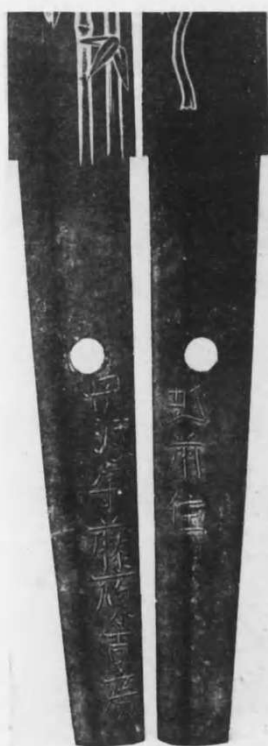
◇吉房 佐賀弐代 〔貞享―肥前〕 新刀 中上作

吉右衛門と稱す、作品稀れである。

刻銘「肥前佐賀住吉房」

◇吉房 丹波守 〔延寶―越前〕 新刀 中上作

福井の住人、押形の松竹の彫物は同人作に非ず月山貞一の後作になる。（業物）

刻銘「丹波守藤原吉房」「越前住丹波守藤原吉房」

◇吉英 武藏丸 〔寳暦―武藏〕 新刀 中上作

武州川越住、武藏太郎安國門、宮川清藏と稱す、水心子正秀の師、作柄安國に似る、中心の裏に「貳十五枚甲伏作」と切るものが多い。

刻銘「武藏丸吉英」

◇**吉明** 草野　〔嘉永—攝津〕　新々刀 **中上作**

本國因州草野晢三郎と稱し、月山貞吉門下。

刻銘「草野吉明」

◇**吉貞** 肥前　〔寛永—肥前〕　新刀 **上作**

初代忠吉門、橋本兵部左衛門と稱し忠吉の一族である。（業物）

刻銘「肥前國住人吉貞」「肥前佐賀住藤原吉貞」

◇**吉貞** 信國　〔寛永—筑前〕　新刀 **上作**

相州傳を以て家風とす、嫡子これに背くによつて次男（吉次）をして家を繼しむ、實際から見て吉貞が晩年既に吉次と名乘り次男にこの名を繼しめたと見る。（吉次參照）

刻銘「九州筑前住信國源吉貞」

◇**吉行** 陸奥守　〔寛文—土佐〕　新刀 **中作**

本國奥州上野守吉國弟、山岡家養子となり平助と號す、大和守吉道門に入る。（業物）

刻銘「陸奥守吉行」「吉行」

◇**吉幸** 伯州　〔慶應―伯耆〕　新々刀 **中上作**

米子住人清水藤四郎と稱し、曙峯軒と號す。

刻銘「伯州住吉幸」「伯州米子住曙峯軒吉行」

◇**吉道** 丹波守初代　〔元和―山城〕　新刀 **上作**

美濃兼道三男、父と共に上京寛永十一年頃まで造る、文祿四年丹波守受領、作品亂、大亂あれど何れもその砂流は簾刄の如き風情がある、晩年に至り簾刄菊水刄を案出せりと云ふ。（良業物）

刻銘「丹波守吉道」「丹波守藤原吉道」

初代は一名帆掛丹波と稱せらる、これは「丹」の字が帆の如き型をなしてゐるためである。

◇**吉道** 丹波守貳代　〔正保―山城〕　新刀 **上作**

三品藤七郎と稱す、寛永十六年丹波守受領、同時に十六葉の菊紋を許さる、以後代々之を切る、作品萬治の頃迄有る、刄文簾刄鮮明なるは此の貳代吉道以下である、菊水刄は簾刄の進化せるものであり、鋩子は小丸にてたるみ心がある、是吉道一門の特徴なる爲め三品鋩子と云ふ。（業物）

刻銘「丹波守吉道」「丹波守吉道」菊紋を切る

初期銘　後期銘　菊水刃

簾刃と菊水刃は親類の様なもので菊の花の型をなしたものがあればこれを菊水刃と稱し、なければ簾刃と云つてゐる、菊水と云つてもその菊の花が明瞭に燒けてゐないことを普通とする、ここに掲げたものは菊水刃の部類である、下の方に僅に菊の花を想像する圓型がある、鋩子の小丸が中たるみになつてゐるのも特徴の一つである。（類似工　他の京吉道、大阪丹波守吉道一門）

◇吉道　丹波守參代　〔寛文　山城〕　新刀　**中上作**

三品德左衛門、寛文二年丹波守受領、武代作風繼承、併し短命の爲め作品稀と云ふ。

刻銘「丹波守吉道」菊紋を切る

◇吉道　丹波守四代　〔延寳―山城〕　新刀　**中上作**

吉之亟と號し延寳元年丹波守受領、老後「前丹波守入道宗鐵」と打つと云ふ、元祿頃迄作品を見る、簾刃、菊水刃、初期時代の吉道に比してその現れが鮮明である、それだけ燒刃が錬磨された結果であらう、又代々この刄文に終始したと云ふことは父傳繼承の最著しき現れと見られる。（業物）

刻銘「丹波守吉道」菊紋を切る

◇吉 道 丹波守五代 〔正德―山城〕 新刀 **中上作**

三品藤七郎と稱す、正德元年丹波守受領。

刻銘「丹波守吉道」菊紋を切る

◇吉 道 丹波守六代 〔寳暦―山城〕 新刀 **中上作**

三品藤吉と稱し寳暦三年丹波守受領、良工なりと云ふ、寛政の初めに歿す、刀業久しく廢れし内にも吉道家は辛くも父祖の業を續けたるものゝ如く、併し晩年に及び刀劍の需要俄に興るに至つた。

刻銘「丹波守吉道」菊紋を切る

◇吉 道 京後代 〔天明―山城〕 新々刀 **中上作**

三品藤三と稱す、京吉道七代目に相當、因州壽格門となりて吉格とも云ふ、江戸に住み後日向延岡の刀匠となる。（良業物）

刻銘「三品吉格造」「丹波守吉道」菊紋を切る

◇吉 道 大阪丹波初代 〔承應―攝津〕 新刀 **上作**

京初代吉道二男、三品金右衛門と稱し、正保頃丹波守受領、寛文七年は七十歳に相當、菊紋を切らない、簾刄菊水刄を作る。（良業物）

刻銘「丹波守吉道」「丹波守吉道造」

◇吉道 大阪丹波弐代 〔寛文—攝津〕 新刀 **中上作**

三品五郎兵衛と稱す、この一門を大阪丹波と云ふ、菊水刄簾刄を作る。（良業物）

刻銘「丹波守吉道」「三品丹波守吉道」

◇吉道 大阪丹波參代 〔元祿—攝津〕 新刀 **中上作**

弐代吉道子、作柄父の如くである。（業物）

刻銘「丹波守吉道」

◇吉道 伏見丹波 〔寛永—山城〕 新刀 **上作**

伏見住、銘振りの變りたるものを斯く稱してゐる樣である、實際は京初代吉道の最初期銘に非ざるや、猶類似押形蒐集の上研究の必要がある。

刻銘「丹波守吉道」

◇吉道 大和守初代 〔寛文—攝津〕 新刀 **上作**

大阪初代吉道次男、三品宇左衛門、作品河内守國助の如き拳形丁子刄、勿論元直の燒出しがある。（業物）

刻銘「大和守吉道」

◇**吉道** 大和守貳代　〔延寶—攝津〕　新刀 **中上作**

三品四郎兵衛後に傳右衛門と稱す、播州姫路にも住む、世に姫路大和の稱がある、作風初代大和守繼承、參代ありと云へど刀を見ない。（業物）

刻銘「大和守吉道」

古來の說、初代は銘細く、二代は銘太しと稱せられてゐる。

◇**吉廣** 伊勢大掾初代　〔承應—肥前〕　新刀 **上作**

初代忠吉門、吉左衛門と號す、作刀姿良く地小杢、刃文中直又は細直ありて近江大掾忠廣に似たるものが多い。（良業物）

刻銘「肥前國住伊勢大掾藤原吉廣」

◇**吉廣** 伊勢大掾貳代　〔元祿—肥前〕　新刀 **中上作**

吉右衛門、吉定とも銘す、初代吉廣の如き作風。

刻銘「肥前國住伊勢大掾藤原吉廣」「肥前住源吉廣」

＊**吉門**＝坂東太郎ト傳參照

***吉　次**＝不動義胄參照

☆吉　格＝山城七代吉道參照

◇義　隆 逸見　〔明治―備前〕　新々刀 **上作**

岡山住人、自ら甲斐源氏の末裔と稱し、逸見義隆と名乗る、彫刻巧みにして月山貞一に劣らざる作者たるも、廢刀令を契機とし刀匠をやめ刀劍商となる、僞作にも長ず、大正九年十二月、七十九歳生國岡山にて沒す。

刻銘「備前岡山住竹貫齋義隆」

◇義　忠 和州　〔元祿―大和〕　新刀 **中作**

手搔住、包保の一派、銘を左文字に切るもこれは包保を模倣にて作風左陸奥に似る。

刻銘「和州住義忠」「義忠」

◇義　忠 鷲谷　〔明治―下野〕　新々刀 **中作**

宇都宮住人、一龍子永吉短刀に彫刻せしものを見る、晩年は宇都宮の研師となり通稱鷲谷と呼ばれ栃木縣下にて著名であつた。

刻銘「宇都宮住神龍子義忠」

◇義　次 島田　〔元祿―駿河〕　新刀 **中作**

新刀島田義助の一族、作品直刄尋常なるものが多い。

刻銘「島田住源義次」

◇義　胄 不動　〔寛永―土佐〕　新刀 **中上作**

青江貞次の末孫、生國備中青江より土州石立村に来る、後神田村へ轉ず、堀内次郎右衛門と稱し老後入道して堀内宗敬と改む、又大とも切ると云ふ、或は試代ならんか。

刻銘「不動義胄作」「不動義胄入道作」

◇義　宗 富士　〔嘉永―近江〕　新々刀 **中作**

富士碧之助と云ふ、細川正義門、生國駿河。

刻銘「富士源義宗」

◇義　宗 高橋　〔昭和―大阪〕

高橋義宗と稱し月山貞勝門、刀劍商として立つ、日本刀匠協會主催の昭和十一年第一回新作日本刀展覽會に於て總理大臣賞を受く、これを動機となして鍛刀に精進す、現住所大阪市住吉公園高燈籠東、作刀は造込形良く刄文丁子亂に焼き多々良長幸を偲ばしむ。

刻銘「源義宗造」「大阪住源義宗造」

◇義　植 越前　〔寛永―越前〕　新刀 **中上作**

作柄初代重高の如くであるも作品が尠い、鶴龜等の彫物がある。（業物）

刻銘「河内大掾藤原義植」「越前住河内守藤原義植」

◇義　規 細川　〔文久―下野〕　新々刀 **中上作**

細川正平子、作品刄文小丁子匂締りで足入り重花となる。

刻銘「野州住細川義規造之」「宇陽藩細川義規作」

合作（銘全部義規切る）

◇義則 細川　〔慶應―下總〕　新々刀 中作

細川忠義の子ならんか、忠義と合作がある。

刻銘「總州佐倉臣細川義則」

◇義國 豊後守　〔寛永―山城〕　新刀 中上作

三條堀川に住す、初代京丹波に近い作風のものがある。（業物）

刻銘「豊後守義國作」「三條堀川義國」

◇義國 新藤次郎　〔寛保―陸中〕　新刀 中作

筑前信國の續き、國義男次郎兵衛と號し明和五年九十五歳にて沒すと云ふ。

刻銘「新藤次郎義國」「奥州盛岡住源義國」

◇義國 加藤　〔元治―羽前〕　新々刀 中上作

加藤綱俊一門ならん、作品直刄又は直針崩れ。

刻銘「出羽住加藤義國鍛之」「義國作」

義國作との三字銘の上に豊後守と追銘し豊後守義國に改變したものがある、世の中にこんな風な悪戯銘のあることを忘れてはならない。

◇義正 加藤　〔慶應―羽前〕　新々刀 中作

前記義國の一族であることは確い、作柄綱俊の傳を得たものであらう。

刻銘「出羽住加藤義正精鍛」

◇義昌 信國 〔天保—筑前〕 新々刀 中上作

信國光昌の孫に當る、光昌に似て彫物上手。

刻銘「筑前國義昌」

◇義通 一貫齊 〔弘化—武藏〕 新々刀 中作

一貫齊義弘の孫、作柄祖父同様。

刻銘「一貫齊義通」

◇義重 長谷部 〔安政—上野〕 新々刀 中上作

細川正義門にして長谷部松之助と稱す、安政六年八月三十五歳にて沒す、作品刄文丁子足入り長く重花になる、師正義に似る。

刻銘「上野國長谷部義重」

長谷部國重の孫であると云ふ。

◇義弘 一貫齊 〔文政—武藏〕 新々刀 中上作

中山藏人と云ふ、義弘と稱し、越中義弘を追慕す、その作品大板目肌綺麗に現はる。

刻銘「一貫齊義弘」

◇義助 源 〔慶安 駿河〕 新刀 中上作

五條七左衛門と云ひ、古刀期より續く、寛文四年四月沒す。

刻銘「嶋田住源義助」

◇義助 清兵衛 〔元祿—駿河〕 新刀 中作

五條七郎右衛門後清兵衛と稱す、東武にても造る、正徳二年沒す。

刻銘「嶋田住源義助」

◇義 純 谷山 〔慶應—國不明〕 新々刀 中作

反淺き豪刀を造る、國不明。

刻銘「谷山義純入道龍純」

*義 清＝一平安在參照

*義 山＝源賴貞參照

◇良 近 源 〔大正—東京〕 新々刀 中作

本名森久助と云ひ、自から三條宗近末孫と稱す、芝三島町に住す、洋鐵延鍛のものを主として作る。

刻銘「源良近鍛之」

◇良 忠 井上 〔延寶—攝津〕 新刀 上作

井上眞改の子と云ふ、門兵衛と云ひ奇峰と號す。

刻銘「井上良忠」「井上奇峰」

◇喜 照 儘田 〔慶應—上野〕 新々刀 中作

刻銘「上毛鄕原住儘田喜照作」

◇美 平 東山 〔天和—山城〕 新刀 上々作

梅忠傳三郎と云ふ、從來美平師に付いては種々の說がある、埋忠家が宗之の代に至つて梅忠と改め……或は宗之の門下にては非ざりし歟（新刀名作集）の說、七左重義說より確かと思はれる、天和の初め私に越前大掾を冒して破門せられしと云ふが左樣な銘の刀を見ない、梅忠家と絕緣して大江姓を名乘り、東山菊水の井に移る、宗雪、美平、晚年には慶隆の刀銘ある、孝滿と切つたものもあると云ふ、世上に見えない、作品地板目ザングリとして、刄文は直に尖りたる刄が逆になる。（業物）

刻銘「東山住美平」「平安城住美平作」「大江慶隆」「東山宗雪」「大江孝滿」

中心の鑢目がぐつと下つて目釘穴近くからかけ初めてあること、更に幾分勝手上り（逆目鑢）なることは美平獨特である。

壯年銘

銘字に一種の特徴を持つ、僞銘は「東」の文字が極端に「東」の如き文字に見ゆ。

以上鑢目、銘字等に因つて美平は左利であつたと思はれる。

晩年銘

梅忠傳三郎美平又は山城國愛宕山の刻銘に僞物多く正作を見ない。

逆五ノ目

この刄文直に逆五ノ目と稱すべきであらう、鋩子が深く中には一枚鋩子もある。（類似工　出羽大椽國路、丹波守吉道、賀州兼若）

◇克一　震鱗子　〔文化―上野〕　新々刀　中上作

上州高崎住、手柄山正繁門、義一とも銘ず。

刻銘「震鱗子克一」

◇慶任　駒井　〔天保―山城〕　新々刀　中上作

森岡朝尊門、一説東寺の寺官と云ふ。

刻銘「平安駒井法橋慶任」

◇頼 貞 源　〔享保—武藏〕　新刀 **上作**

奥州守山藩主、石堂是一、對馬守常光等を相手として趣味の鍛刀をなす、延享元年八十一歳にて沒す、作品は尠ない。

刻銘「源頼貞武門服日眞鍛作之」「義山作」

◇自 助 犬山　〔寛永—尾張〕　新刀 **中上作**

刻銘「尾州犬山住自助」

◇大 道 陸奥守　〔慶長—美濃〕　新刀 **上作**

濃州室屋關大知の孫と云ふ、作刀巾有り豪壯に匂締りたる大亂若狹守氏房の如き作風。

刻銘「源陸奥守大道作」「陸奥守大道」

◇大道 陸奥守　〔寛文—伊勢〕　新刀 中上作

二代目とあれど銘字初代同様である、なほ研究至らざる点がある様に思はれる。

刻銘「陸奥守大道」

◇大道 信濃守　〔慶安—美濃〕　新刀 中上作

室屋關大知の孫、武蔵守盛道との合作がある、盛道延寶、大道寛永は時代的に不合理であるから改めさせて戴く。

刻銘「信濃守藤原大道」

◇大道 法橋　〔寛文—山城〕　新刀 中作

刻銘「法橋大道作」

◇大道 相模守　〔寛文—美濃〕　新刀 中作

刻銘「相摸守大道」

◇大明京　〔寛文—出雲〕　新刀 中上作

高麗彌九郎と號す、實名國重、松江白潟天神町に住す、二代ありと云ふ。

刻銘「雲州住大明京」「大明京」

◇忠義 細川　〔元治—下總〕　新々刀 中上作

佐倉住、細川正義次男細川近造忠義と云ふ、源正行とも切り、山浦正行を偲しむるも銘字小さい、作風は正義傳を繼承す。

刻銘「總州佐倉藩臣細川忠義造」

合作

忠義、義則の合作、義則は子ならんか、刻銘全部を忠義が切る。

◇忠 吉 肥前國初代 〔慶長―肥前〕 新刀 最上作

橋本新左衛門尉忠吉と稱し、肥前長瀨(今の高瀨村)に住す、慶長元年上京し埋忠明壽門に入る、同三年歸國し佐賀城下へ轉住、元和十年(寛永元年)武藏大掾受領と共に銘を忠廣と改む、初め氏を源としたるも後藤原と改む、寛永九年八月十五日年六十一歳を以て沒す、作品慶長五年頃より沒年迄三十年に亘る、作品姿良く地小杢、刄文中直に喰違刄又は銑崩刄を交へる、亂刄もあり匂銑足入太く止る、劒卷龍は宗長作にして多く彫物宗長の添銘を見る、又明壽の彫も有り更に後年に於ては吉長の彫物がある。

(最上大業物)

刻銘「肥前國忠吉」「肥前國住源忠吉」「肥前國住人忠吉作」「肥州住忠吉」「肥前國藤原忠廣」「肥前國武藏大掾藤原忠廣」「肥忠吉」「忠吉」

慶長六年頃　慶長十年頃

慶長十七八年　慶長十八年頃　四十四歳作

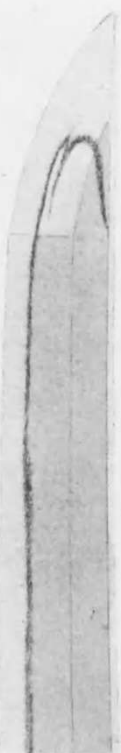
銘字が次第に變つて行く、特に注目せられるのは「忠」の字である。

元和七年頃　五十五歳作　寛永八九年

六十一歳作

宗長彫

忠吉の刀身には宗長の彫物多く、又埋忠明壽の彫も有る、晩年には吉長の彫物が有る、宗長の彫物の特徴は龍面するどい点である。

中直

中直に浅き亂心を持つ喰違も交る、眞の直刃はない、この作風は初期肥前刀の特徴であつて代が下る程この亂心がなく眞の直刃となる。（類似工　近江大掾忠廣、その他寛永頃の肥前刀工）

◇忠 吉 土佐守　〔寛永—肥前〕　新刀 上作

忠吉弟とも云ふが擬くも一族とは思はれる、寛永元年忠吉名を譲られ、晩年に至りて土佐守受領と見るが至當の様である、作風大体師傳を繼承するも異風なる處がある。

刻銘「肥前國住人忠吉」「肥前國藤原忠吉」「肥前國住人土佐守藤原忠吉」

晩年銘

（土佐守の想像）土佐守忠吉は謎の存在である、作柄が他の同時代肥前工と比して違つた感じを與ふ、この点伊豫掾宗次の作柄と同様に考へられる、銘字も兩者接近してゐる、……以下想像を逞しうするならば土佐守は初代忠吉に一番近い一族であるために忠吉の名が譲られた、土佐守二代目が本家へ忠吉の名を返濟し、肥前刀工初祖の宗次名を復活させたのではなかうか。

◇忠 吉 陸奥守　〔萬治—肥前〕　新刀 上々作

貳代忠廣嫡子、忠吉三代目にして新三郎と云ふ、萬治三年十月陸奥大掾受領、寛文元年八月陸奥守に轉じ、貞享三年正月二日沒す、この忠吉名乗りの動機は土佐守忠吉の「忠吉名返還」に因るものに非ざるか、作品中直刃尋常なるもの、喰違刃を余り見ず、鋩子小丸は初貳代より深い、又匂締りたる丁子足入りもあり燒巾が廣い、父との合作もある。（最上大業物）

刻銘「肥前國忠吉」「陸奥大掾藤原忠吉」「肥前國住陸奥守忠吉」「陸奥守藤原忠吉」

初期銘

肥前國忠吉と五字銘に切るもの有りて初代忠吉と見間違へられる場合が多い、その文字を比較せられたい。

初期銘

父近江大掾に先立ちて歿す、ゆへに作品尠く誠實厚い。

◇忠　吉　近江大掾　〔元祿　肥前〕　新刀　上作

陸奥守子、忠吉四代目、橋本源助と云ひ後新三郎、元祿十三年三月近江大掾受領、延享五年九月九日八十歳にて逝く、父沒後は祖父忠廣に因つて業を修め後には祖父の代作をもなすと、作品中直刄小丸鋩子三代の如く、又丁子刄もある。（良業物）

刻銘「近江大掾藤原忠吉」「肥前國住近江大掾藤原忠吉」

初期銘

近江守忠吉代銘ならん

◇忠　吉　近江守　〔寛暦—肥前〕　新刀　上作

橋本新左衛門と稱し忠吉五代目、父存命中は忠廣と打つ、安永四年六月十五日八十歳にて沒す、作風四代目同様。（業物）

刻銘「近江守忠吉」「肥前國近江守忠吉」「肥前國忠吉」「肥前國忠廣」

和期銘

小丁子

匂締りたる小丁子、足長く入りたるもの、焼巾深きものがある、鋩子焼付深いもの又締りたるものもある、姿が良い。（類似工　三代忠吉、四代忠吉、六代忠吉）

◇忠　吉　六代　〔天明—肥前〕　新々刀　上作

橋本新左衛門と號し、父存命中は忠廣と銘す、寛政二年六月近江守受領忠吉襲名、作風は五代の如くである。

刻銘「肥前國近江守忠吉」「肥前國忠廣」

◇忠　吉 八代　〔安政—肥前〕　新々刀 上作

七代忠吉の養子、橋本新左衛門と號し、晩年内藏允、受領を勸められたるも頑として應ぜざりしと云ふ、安政六年五月廿六日沒、享年五十九歳、作品身巾あり匂締りたる中直刃地小杢强い。

刻銘「肥前國忠吉」「肥前國橋本新左衛門藤原忠吉」

銘字小さく離れて整ふ、後代五字忠吉の多くはこの八代忠吉銘である。

◇忠　綱 近江守　〔萬治—攝津〕　新刀 上作

本國播州姫路、遠祖粟田口國綱と云ふ、洛陽に移住後大阪に來る、姓淺井、作品五ノ目丁子揃ふ、彫物もあるが彫同作とは切らない、是等或はすべて子の一竿子の手に成るとも考へられる、尙本作には後彫の多いことも注目すべきである、銘「近江守」に初武代を混合する傾向があるも本押形に因つてその判別は自ら明瞭となる。（業物）

刻銘「粟田口近江守忠綱」「粟田口藤原忠綱」

◇忠綱 一竿子　〔元祿　攝津〕　新刀 上作

近江守忠綱子、貳代目忠綱となる、通稱万太夫と云ひ號一竿子、初め近江大掾忠綱と銘じ後近江守を受領す、作品揃ひたる丁子足長く入る、元に直燒出ありて鋩子は小丸深い、又濤亂刄もある、彫物を以て著れ刀身に遺龍、上下龍、劍卷龍、梅木卷龍等の彫刻あり「彫同作」「彫物同作」と必添銘す、享保六年忠綱作の彫銘（タガネに非ず）を見る、晩年の作であらうか。（良業物）

刻銘「粟田口近江守忠綱」「粟田口一竿子忠綱」「一竿子忠綱」「粟田口一竿子忠綱入道」

晩年銘

元祿以降忠綱の綱のツクリ改まる。

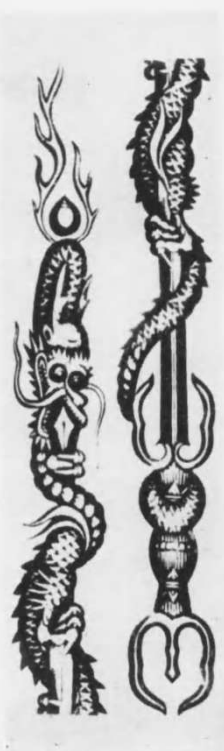
初期銘（天和貞享）

初期銘（天和貞享）

元祿以降

元祿以降、近江守とも一竿子とも兩様に銘ず。

鑓深く大振りの彫を得意とする、彫面おだやかである。

自身彫

一見五ノ目風のものであるが足入長く刄中に働き華やかにして普通足長丁子と稱せられる、忠綱の最も得意とするもの。（類似工　河内守武代國助、大和守吉道）

足長丁子

◇忠　次　大和守　〔寛文―越前〕　新刀　中作

下坂一派、山城にも住す。（業物）

刻銘「大和守忠次」

◇忠　次　佐賀住　〔延寶―肥前〕　新刀　中作

刻銘「肥前國佐賀住源忠次」

◇忠　宗　肥前　〔寛文―肥前〕　新刀　中上作

下總大掾忠清子、寛文五年相模掾を受領す。（業物）

刻銘「肥前國相摸掾忠宗」

◇忠　國　信濃大掾初代　〔寛永―因幡〕　新刀　上作

山本八郎太夫と云ひ出羽大掾國路門、初め國勝と打ち更に刻國、寛永の初め因州に移りて忠國と改む、寛永十一年八月信濃大掾受領と云ふ、寛文六年沒す、作品大体國路に似たれども後年匂締りたる直刄、亂刄を見る。（業物）

刻銘「信濃大掾藤原忠國」「平安城住藤原刻國」

初期銘

忠國の初め頃京に在りしとき打ちし作、銘を裏表に振り別けて切つてゐる、一ツの新趣向にて同じ京にある山城守識長にもこれがある。

古來の説、忠國の初貳代の見分は、初代忠國は國の字の中を玉に切り、貳代は普通に國と切るとなす。

◇忠國 信濃大掾貳代 〔貞享―因幡〕 新刀 **中上作**

刻銘「信濃大掾藤原忠國」

山本八郎太夫と稱す、享保五年十一月沒、行年七十歳、作品中直刃尋常。（業物）

◇忠國 信濃大掾參代 〔享保―因幡〕 新刀 **中上作**

刻銘「信濃大掾藤原忠國」

山本姓、初め忠次郎後八郎太夫と云ふ、父沒するの年三十三歳に相當。

◇忠國 四代 〔安永―因幡〕 新々刀 **中作**

刻銘「信濃大掾藤原忠國」「忠國」

忠國後代である、八郎太夫と稱す、安永頃より二字銘に打つ。

◇忠國 播磨大掾 〔寛文―肥前〕 新刀 上作

肥前相右衛門廣貞子、橋本姓、初め播磨大掾を受領、後播磨守に轉任せる様である、その作品天和年間に及ぶ、老後播磨入道休鐵と云ふ、作品姿よく地小杢、刃文中直又亂刃華やかなるもの見受ける。（業物）

刻銘「肥前住播磨大掾藤原忠國」「播磨大掾藤原忠國」「肥前住播磨守藤原忠國」

菊紋幷に蟹牡丹を切るものがある

初期銘

◇忠國 播磨守 〔貞享―肥前〕 新刀 中上作

忠國貳代目、世上在刀の多くは初代忠國にして、この貳代の時代より次第に需要衰へたる爲めその作品は尠しと見る、作風初代同様。（業物）

刻銘「肥前住播磨守藤原忠國」「播磨守藤原忠國」菊紋又は蟹牡丹を切る。

◇忠國 參代 〔享保―肥前〕 新刀 中上作

享保五年四十八歳に相當せりと、播磨大掾の磨を摩と切る、鑢目大筋違。

刻銘「播摩大掾藤原忠國」

◇忠政 佐賀 〔寛永―肥前〕 新刀 中上作

初代忠吉門、織部亟と稱す、忠正と打つは二代目なりと云ふ。

刻銘「肥前國佐賀住人忠政作」

◇**忠　清** 佐賀住　〔寛永―肥前〕　新刀 **上作**

新兵衛と號し、初代忠吉門、作品師風を繼承し身巾廣く豪壯にして、刄文は亂刄が多い。

刻銘「肥州佐賀住藤原忠清作」

◇**忠　清** 下總大掾　〔寛文―肥前〕　新刀 **中上作**

忠清貳代目寛文五年十二月受領す。（業物）

刻銘「肥前下總大掾藤原忠清」「忠清」

◇**忠　清** 薩州　〔正保―薩摩〕　新刀 **中上作**

奥次郎兵衛と號す。

刻銘「薩州住忠清」

◇**忠　行** 攝州初代　〔寛文―攝津〕　新刀 **中作**

初代忠綱門、作品中直刄その他作柄一竿子の如くである。（良業物）

刻銘「攝州住藤原忠行」

◇**忠　行** 攝州貳代　〔貞享―攝津〕　新刀 **中作**

新右衛門と號す、同銘三代もあれど作品を見ない。（業物）

刻銘「攝津守源忠行」

◇**忠　行** 大和守　〔天和―豐後〕　新刀 **中作**

刻銘「豐後高田住大和守藤原忠行」

◇**忠　道** 越後守　〔延寳―攝津〕　新刀 **中作**

本國越前、後攝津大阪へ移る。

刻銘「越後守藤原忠道」

◇忠重 生玉莊　〔寛文―攝津〕　新刀 中作

初代忠行弟子、江戸にても造る。

刻銘「攝州生玉莊井上藤原忠重」

◇忠重 和泉守　〔寶永―薩摩〕　新刀 上作

奥忠清三男、津田助廣門に入る、初銘秀興、初め和泉掾を受領後和泉守、作品刀の外鎗矢の根も造る、津田助廣風の濤亂刄と薩摩特有の大亂荒錵付のものがある(良業物)

刻銘「奥和泉守忠重作」「奥和泉守秀興作」

◇忠秀 出羽　〔天保―羽前〕　新々刀 中作

水心子正秀弟子、正秀の如く刀茎に刻印を打つ。

刻銘「出羽住忠秀」

◇忠廣 近江大掾　〔慶安―肥前〕　新刀 上々作

新左衛門尉と稱す、寛永九年父沒後忠廣を襲名、時に十九歲、寛永十八年近江大掾を受領、元祿六年五月廿七日八十歲の高齡を以て沒する迄六十年の長きに渉りて作品を殘す、その作品姿よき刀、脇差、刄文中直變化なきもの、中直喰違刄がある、又亂刄濤刄あり肥前獨特の燒谷の錵匂の深いものである、劍巻龍の彫物も稀にあり古長作になる。(大業物)

刻銘「肥前國住藤原忠廣」「近江大掾藤原忠廣」「肥前國住近江大掾藤原忠廣」「肥前國忠廣」「忠廣」

二十歲作

父沒の翌年にこの作品あり銘字大きく初代銘に接近した書風で、これは學ぶ、まれるの現はれにて年を經るに從ひ次第に貳代の個性がにじみ出てくる、初代の廣の第一割は菱形のタガネを打つも貳代にはこれを見ない。

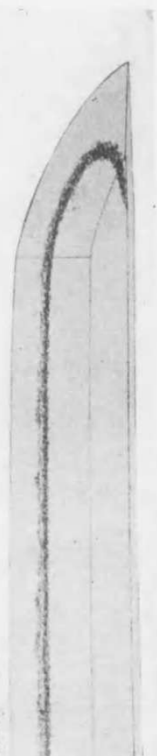
寛永十六七年

三十八歳作

寛文初め

從來中心尻尖り急なるを(例、慶安四年々號入り押形)自身打となし、中心尻尖りゆるやかなるを代作代銘となせるも、これは忠廣作柄の變遷に依るもので前者は若打、後者は晩年打である。

寛文以降 晩年銘

中直刃

中直刃に足入り繊き揃ひて二重刃の如くなるは貳代忠廣に多い、喰違刃又淺き亂心を交へたる直は初期作に多く、二重刃の如き足の現はれないものは後期に多い。(類似工 肥前正廣初貳代、播磨大掾忠國)

◇**忠 廣** 薩州 〔享保 薩摩〕 新刀 **中作**

刻銘「薩州住藤原忠廣」

☆**忠廣**＝肥前初五六七代忠吉參照

◇爲 家 理兵衛尉　〔寛永―備中〕　新刀 上作

三郎兵衛國重弟、河野理兵衛尉と稱し、世に晉部水田と唱ふ、その作品大五ノ目尖り刄文は五ノ目亂にして何れも皆棟燒がある。

刻銘「備中國晉部住爲家」「備中國晉部住河野理兵衛尉爲家」

合作 水田住山城大掾源國重の十字はその本人銘

◇爲 家 與太郎　〔寛文―備中〕　新刀 中上作

河野與太郎と云ふ、爲家貳代目に相當、作風初代繼承。

刻銘「備中國晉部住河野與太郎爲家」「備中國晉部住河野與太爲家」

◇爲 利 下坂　〔明暦―岩代〕　新刀 中作

會津住爲勝子。

刻銘「奥州會津住下坂爲利」

◇爲 康 初代　〔寛永―紀伊〕　新刀 中上作

紀伊石堂の祖である、古作一文字丁子もここに復活を見るに至つた。（業物）

刻銘「紀州住土佐將監橘爲康」「土佐將監爲康」

◇**爲康** 陸奥守 〔寛文―攝津〕 新刀 **中上作**

備中守康廣兄、富田六郎右衛門と云ひ、爲康貳代目、陸奥守受領、刄文丁子石堂一門の特徴たる所謂石堂丁子である。（業物）

刻銘「陸奥守橘爲康」

◇**高平** 傳右衛門尉 〔延寶―加賀〕 新刀 **中上作**

又助兼若次男、貳代目高平となる。（業物）

刻銘「加州住辻村傳右衛門尉藤原高平」「辻村出羽守高平」

＊**高平**＝四郎右衛門尉兼若参照

◇**鷹諶** 黒田 〔文化―攝津〕 新々刀 **中上作**

備後三原末、播磨にも住す。

刻銘「播州住黒田鷹諶造」

◇**貴道** 阿波守 〔寛永―尾張〕 新刀 **中上作**

刻銘「阿波守貴道」

◇**胤吉** 堀井 〔明治―東京〕 新々刀 **中上作**

本國近江、月山貞吉、大慶直胤等の弟子、明治二十八年宮内省御用刀匠を拝し、同三十六年四月八十三歳歿す、作品姿優しい刀、短刀多く刄文は概ね逆丁子である。

刻銘「胤吉」「近江國胤吉作」

◇胤　明　近江　〔明治—東京〕　新々刀　**中上作**

胤吉甥、胤吉同様の作風、堀井俊秀の父。

刻銘「於東都近江國胤明作」「近江介源胤明造之」

◇胤　光　心慶　〔文久—武藏〕　新々刀　**中上作**

直胤門、従つて作風も師傳繼承、銘字隸書体のものが多い。

刻銘「心慶胤光造」「土浦臣長尾心慶藤原胤光」

◇種　廣　肥後大掾　〔寛文—肥前〕　新刀　**中上作**

佐賀住、市太とばかりも打つ、「イ」の部掲出の市太と同人か。

刻銘「肥後大掾源種廣」

◇玉　秀　雙龍子　〔天保—陸中〕　新々刀　**中作**

直胤門、雙龍子玉英子と云ふ。

刻銘「雙龍子玉秀」

◇烈　公　水戸　〔文久—常陸〕

徳川齊昭公慰作、勝村德勝等を相手に造刀せるも燒刄渡のみなりしと云ふ。

刻銘　押形にしめす如く特殊の菊紋を刻するに止まる。

◇宗　寛　泰龍齋　〔慶應—武藏〕　新々刀　**上作**

江戸深川箱崎住、固山宗次門、生國古河阿武隈川畔、その作品身巾廣く、鎬高豪壯なる造込、地鐵小杢無地風、刄文小五ノ目足入り揃ふ地映りつく、初期作は宗次に似る。

刻銘「宗寛」「泰龍齋宗寛造之」「於江都阿武隈川宗寛精鍛」

初期銘

初期銘

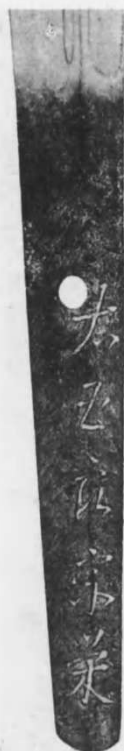
◇宗 榮 右作

新刀 上作　〔元祿―播磨〕

通稱五郎右衛門、初め姫路の藩工後岡山藩に替る、藩主池田侯の命により左文字の摸作をなしたるにすぐれたる出來榮なりしかば、侯右の一字を賜ひしと云ふ、爾後右五郎とも云ふ、作風横山祐定の如くなるも變化多く亂など崩れ、暴れたりとの感が深い。

（業物）

刻銘「藤原右作」「播磨國鈴木五郎右衛門尉宗榮」「右五郎宗榮」「右」

「吉祥如意」＝幸ひを得る事思ひの儘、「改劔尺」＝劔の寸法を改む、當時刀の寸尺に依つて品を分ち、吉凶を論じた、依つて劔相上よりして本作が「吉祥如意」の寸尺に造られたと云ふのであらう。

◇綱俊 長運齋初代 〔天保 武藏〕 新々刀 上作

本國羽州米澤、加藤八郎長運齋と號し後長壽齋と改む、加藤綱英弟、文久二年十二月五日永眠、行年六十六、その作品濤亂刄は津田助廣の如くであるが地鐵弱い、丁子刄は弟子筋の固山宗次と同様なるも、元直の焼出あるものが多い。

刻銘「於東都加藤綱俊造」「長運齋綱俊造之」「羽州米澤住加藤綱俊」「於東都長壽齋綱俊」

二十七歳作

三十五歳作

六十五歳作

この刀は子長運齋是俊と共に造る、銘は全部初代綱俊が切る。

◇**綱 俊** 貳代　〔慶應―武藏〕　新々刀 **中上作**

初銘是俊、後長運齋襲名、父子合作になるもの多く、又初代綱俊の晩年にはその代作をなすものを見る、文久二年父沒後貳代目綱俊となる、運壽是一に似たる作風。

刻銘「長運齋是俊」「長運齋綱俊造之」

◇**綱 倫** 米澤　〔嘉永―羽前〕　新々刀 **中上作**

加藤綱俊の一派、作品綱俊の如き濤亂刄を燒く。

刻銘「羽州米澤住綱倫」

◇**綱 宗** 仙臺　〔寛文―武藏〕

万治三年隱居して江戸品川の邸へ移り、仙臺安倫相手にて鍛刀せられたりとと云ふが、併し世にあるものは僞作ばかりにして、正作と信ずるものを見ない。

刻銘「奥州國主陸奥守綱宗」と切ると云ふが隱居の身、かく銘ずるは不合理

◇**綱 信** 赤間　〔嘉永―羽前〕　新々刀 **中上作**

米澤で一番聞えのよい作者である。

刻銘「羽州米澤住赤間綱信」

◇**綱 房** 奥州　〔寛文―陸奥〕　新刀 **中作**

刻銘「奥州住綱房」

◇**綱 重** 陸奥守　〔寛文―陸前〕　新刀 **中上作**

伊勢大掾綱廣門、作品師風を繼承、又一見虎徹の如き處がある、而して一說虎徹は伊勢大掾綱廣門と云ふ、この說にして眞なれば綱重と興里は同門である。

刻銘「陸奥守藤原綱重」

◇**綱英** 加藤　〔文化―武藏〕　新々刀 **中上作**

出羽國秀子、加藤綱俊の兄、作品濤亂刄。

刻銘「加藤綱英造」「於東都加藤綱英造之」

◇**綱廣** 相州參代　〔寛永―相模〕　新刀 **中上作**

勘兵衛尉と云ふ。

刻銘「相州住綱廣」

◇**綱廣** 伊勢大掾　〔萬治―相模〕　新刀 **上作**

綱廣四代目、萬治年間伊勢大掾受領、一説に云ふ、長曾禰興里はこの綱廣の弟子たりしと、作品直足入り、五ノ目小亂、地小杢にして相州傳の俤は更に見られない、時代の影響と云ふべきであらう、鑚深き不動尊等の彫物がある。（業物）

刻銘「相州住綱廣」「相州伊勢大掾源綱廣」

初期銘

◇綱廣 相州六代　〔元祿—相模〕　新刀 中上作

右衛門尉と云ふ。

刻銘「相州住綱廣」

◇綱廣 宇兵衛　〔天明—相模〕　新々刀 中上作

綱廣十代目、山村宇兵衛と稱し、寛政三年七月廿九日沒す、水心子正秀門と記す書あれど反對に正秀の師とすべきであらう。

刻銘「相州住綱廣」

◇綱廣 十一代　〔享和—相模〕　新々刀 中上作

宇兵衛と稱す、享和元年七月廿九日沒す、短命なりしゆへ作品確たるもの見受けられない。

刻銘「相州住綱廣」

◇綱廣 勘左衛門　〔文化—相模〕　新々刀 中上作

綱廣十二代目、本工が水心子正秀門ならん、復古の機運ありて往時相州傳の如く皆燒刄、亂刄を燒き、地大板目肌なれども、地刄共新々刀の感が強い、天保元年十月十七日沒す、往々自作彫を見る。

刻銘「相摸國綱廣」「綱廣造」「正宗末孫相摸國綱廣」

自作彫

◇綱廣 十三代　〔文久—相模〕　新々刀 中上作

山村宗三郎と稱す、明治十九年三月廿九日沒す、本工も正秀に弟子入りせしか。

刻銘「相州住綱廣」「正宗十九代孫綱廣」

◇ **綱廣** 十四代　〔明治—相模〕　新々刀 **中作**

作品勘い、山村繁之亟と稱す、大正元年十二月十五日沒す。

刻銘 「正宗廿代孫綱廣」

◇ **綱廣** 近江守　〔延寶—山城〕　新刀 **中上作**

伊勢にも住す、相州綱廣の流れならんか。

刻銘 「山城國住源綱廣」「近江守藤原綱廣」「綱廣」「近江守源綱廣」

◇ **常光** 對馬守　〔慶安—武藏〕　新刀 **上作**

江州蒲生郡產、後東武へ移る、日置市之亟と云ひ後三郎左衛門、法名一法、その丁子刄は古作一文字を思はしむ、後入道し元祿十一年七十三歲添銘の刀がある、從つて初代の作品旣に元祿に及ぶを知る、ゆへに銘振よりしても知休(智休)と添銘あるは初代の晚年作であらうと思はれる。(良業物)

刻銘 「對馬守橘常光」「對馬守橘一法」「對馬守橘入道常光」

老年銘

◇**常　光** 對馬掾　〔寛永―武藏〕　新刀　**中上作**

貳代常光、八左衛門と云ひ入道して智休と稱すと云へど初代晩年が智休に相當せるもの如くである、作風初代同樣、初代長命の後を受繼ぎしため本作品は尠い。（業物）

刻銘「對馬掾入道常光」「對馬掾橘常光」

◇**次　包** 攝州　〔元祿―攝津〕　新刀　**中上作**

銘字陸奥守包保に似る、故にこの一門と思はれる。

刻銘「攝州住藤原次包」

◇**継　利** 下坂　〔元祿―越前〕　新刀　**中上作**

江戸にも住む、作柄同派の継廣等と似る。

刻銘「越前國下坂継利」

◇**継　貞** 下坂　〔天和―越前〕　新刀　**中作**

後江戸に居住す、肥後にても造る。

刻銘「越前國下坂継貞」

◇**継　光** 下坂　〔延寳―越前〕　新刀　**中作**

江戸にても造る、「於武州江戸作之」の添銘あるものが多い。

刻銘「越前國下坂継光」

◇**継　平** 近江守初代　〔貞享―武藏〕　新刀　**上作**

本國越前、三代康継門、或は子か、四代目康継と共に榮ゆ、されど子貳代継平の代に至りて泰平の爲め需要尠かつた樣である、作品地杢目立ち刄文直又は直小亂刄。（業物）

刻銘「近江守藤原継平」「下坂近江守藤原継平」

初代繼平は三代目康繼の門（或は子か）である、ゆへに三代繼平は康繼から通算して六代目と稱したのであらう。

◇繼平 近江守貳代 〔延享―武藏〕 新刀 中上作

藤田青龍子と號す、作風初代繼承、本作は尠く、世上貳代と稱せらるゝものは初代の作である事が多い。（業物）

刻銘「近江守繼平」

三代目繼平の摺上折返し

◇繼平 近江守參代 〔安永―武藏〕 新々刀 中上作

銘字草書に切りたるもの多く、此工が六代目を稱せしは康繼の上三代をも含み數へしものならんと思はれる。

刻銘「近江守藤原繼平」「藤田近江守藤原繼平造」

初期銘

◇**繼平** 近江守四代　〔天保―武藏〕　新々刀　**中上作**

本作は尠い、草書銘の多くは三代目の作なるためである。

刻銘「東都藤原繼平造」「東都近江守藤原繼平」

◇**繼廣** 近江守　〔寛文―越前〕　新刀　**中上作**

江戸又は近江にも住す、作刀地杢目立ち刄文尋常なる直刄又は五ノ目亂。（業物）

刻銘「越前國下坂繼廣」「近江守下坂繼廣」

◇**繼秀** 萬歳　〔寛政―武藏〕　新々刀　**中作**

三代繼平門、作風師傳繼承。

刻銘「萬歳繼秀」

◇**長俊** 會津　〔寛文―岩代〕　新刀　**中上作**

本國伊豫、長國子にして初銘長門、會津に移りて三好政長門となり長道後見をなすと云ふ、作品は尠い。（業物）

刻銘「奥州會津住長俊」

◇**長利** 中津　〔萬治―豊前〕　新刀　**中上作**

二字銘に打もの多く、その作品丁子は筑前信國等の感化を受けしものならんか。

刻銘「長利」

◇**長勝** 勝村　〔明治―常陸〕　新々刀　**中上作**

刻銘「勝村長勝」

◇**長綱** 聾　〔寛文―攝津〕　新刀　**上作**

北村市右衛門と云ひ初代近江守忠綱門、聾なりしを卒直に添銘せし作もある、身巾廣き丈夫なる刀多く、刄文丁子燒深く足長く入りて忠綱の足長丁子と同樣である。（業物）

刻銘「攝州住藤原聾長綱」「攝州住藤原長綱」

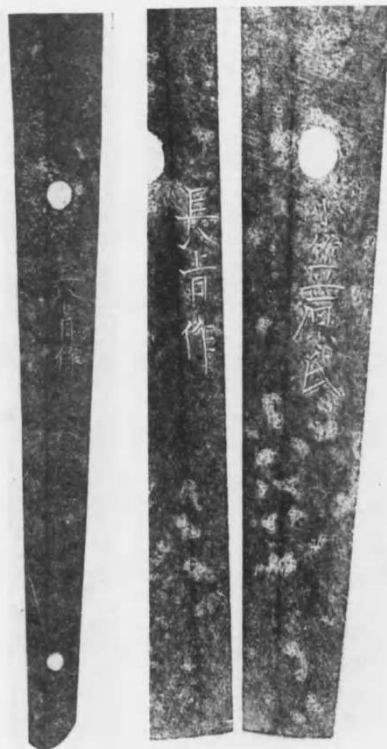
◇長旨 小笠原

〔延寶―武藏〕 新刀 上々作

東武下谷池の端住、左京と稱した、本體鍛冶也好んで刀劍を造る、時代寛永頃と古今鍛冶備考にある、長旨は昌齋或は庄齋と稱したと云ふ、作品に延寶元祿等の年號入りの長旨があるからこの頃が中心時代と思はれる、然るに後鍛冶を嫌むとも云ふ、これは鍛刀界の衰微のためであらう、その作刀姿優しきもの多く刃文細直、地板目柾交り。

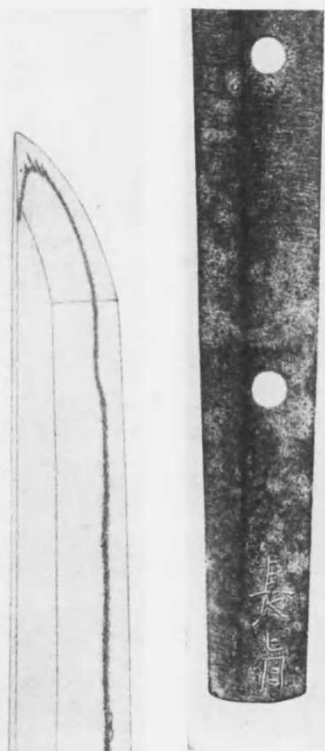
刻銘 「長旨作」「小笠原庄齋長旨作」「小笠原氏長旨作」

直刃

刃文直なれど眞の直に非ず、鋩子掃掛心、刃文のみを以ては長旨と決し難い、地鐵は板に柾目つみて強い、大和傳を加味せし如く見ゆ。（類似工　小笠原長宗、仙臺包吉、南紀重國）

◇長宗 小笠原

〔享保―武藏〕 新刀 上作

長旨子にて左兵衛と云ふ、二代は長宗と切ると云ふが初代同人と思はれる、即ち初代が庄齋或は昌齋と云へる如く銘も長旨又は長宗と切つたものと判斷される、斯く同音當字に切る場合を他にも往々見受ける、因みに享保四年刀鍛冶復興に際し幕府へ推薦されたのが長旨であつたと云ふ。

刻銘 「長宗作」「小笠原庄齋長宗」

◇長信 會津住 〔貞享―陸前〕 新刀 中作

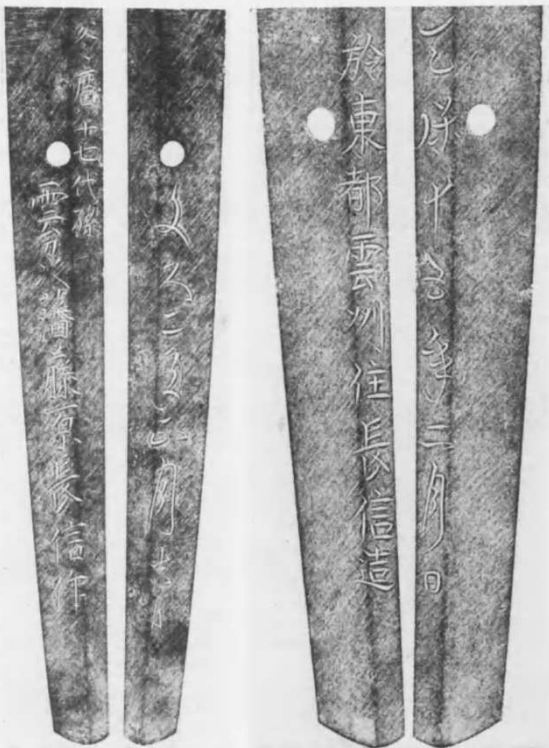
三善長道弟子とも云ふが作品見られない、長道の下職として終りたるならんか。

刻銘「奥州會津住長信」

◇長信 高橋 〔天保―武藏〕 新々刀 上作

若州冬廣十七代孫、高橋理兵衛と稱す、長運齋綱俊門にして松江藩刀工となる、江戸麹町平河町に住み初め冬廣とも銘を切る、明治八九年の頃六十歳位にて松江に沒す、丁子揃ひたる刄匂銚深く足入るもの多く、大体綱俊に似たる作風。

刻銘「於東都雲州住長信造」「長信造」「長信齋冬廣」「雲州藩藤原長信作」

初期銘

鑢目勝手上りにて、普通鑢目の反對、かくの如き異風の鑢は左利のみ容易になし得られるものにして長信は左利と思はれる。

◇長　國　會津　〔寛永―岩代〕　新刀　**上作**

安藝常慶子、三好藤四郎と稱し、初銘安廣、豫州松山に移りて加藤家臣となる、文祿の役朝鮮に渡りて刀劍を造ると云ふ、後主家の會津に轉封せらるゝに及び此の地に來る、寛永八年沒す。（業物）

刻銘「奥州會津住長國」「豫州松山住長國」「長國」

晩年銘

◇長　國　中津　〔寛文―豊前〕　新刀　**中上作**

作品稀である、著者の見たものは鎬の低い、地杢中直刄のものである。（業物）

刻銘「於豊前長國」

◇長　幸　多々良　〔天和―攝津〕　新刀　**上々作**

本國紀州、河内守康永門に入る、通稱四郎兵衛、大阪石堂の名がある、時代裏銘より見るに天和、貞享間、貞享は最も圓熟せる頃と思はる、作品初期は五ノ目丁子横山祐定の如く、晩年は主として丁子刄を作り備中守康廣に似る、よく備前傳に終始して新刀備前傳中第一の作者、又業物として聞え高い。（最上大業物）

刻銘「攝州大阪住長幸」「多々良氏長幸」「長幸於攝津國作之」「長幸作」

初期銘

丁子

丁子刃鮮やか、古作一文字を模寫せしもの。（類似工　初代助廣、備中守康廣、佐々木一峯、日置光平、石堂是一、對馬守常光、福岡是次）

◇長之 松山　〔嘉永―伊豫〕　新々刀 **中作**

因州壽幸弟子、豫州松山に住す。

刻銘「豫州松山住長之」

◇長道 三善初代　〔寛文―岩代〕　新刀 **上作**

三好政長嫡子、通稱藤四郎、叔父長俊に師事す、初め道長と切り、万治二年陸奥大掾受領と共に三善長道と改む、又津田助廣弟子との説がある、貞享二年五十五歳にて沒す、作刀反淺く地小杢強い、刄文五ノ目亂匂鮮締りたる風直刄も見る。（最上大業物）

刻銘「陸奥大掾三善長道」「陸奥大掾三善長道藤四郎」「長道」「三善陸奥守藤原長道藤四郎」「陸奥會津住道長」

初期銘

四十歳作

長道銘初期作の寛文年間作品は「藤四郎」と添記せるものが多い。

五ノ目小亂

五ノ目小亂燒巾深く反淺きが特徴、虎徹の所謂ハネ虎時代の作に近い。（類似工　河内守康永、備前守祐國、和泉守國貞、長曾禰興里）

◇長道　貳代　〔貞享—岩代〕　新刀　**中上作**

三善庄右衛門、受領名なく、初代沒後間もなき貞享五年逝去す、作品見當らない。

刻銘「奥州會津住長道」

◇長道　參代　〔元祿—岩代〕　新刀　**中上作**

三善傳四郎後藤四郎、元祿十年沒す、是より家絕ゆ。

刻銘「奥州會津住三善長道」

◇長道　棟梁　〔安政—岩代〕　新々刀　**中上作**

幕末刀劍需要昂り刀匠又復興す、この長道も亦其等の一人ならん、三善藤四郎と稱し、六代目長道に相當す、會津刀鍛冶棟梁に任ぜらる。

刻銘「三善長道」「奥州會津住三善長道」「陸奥三戸住三善藤四郎長道作」

◇直勝　莊司　〔安政—武藏〕　新々刀　**上々作**

上州館林の秋元家に仕ふ、江戸下谷住、直胤の養子となる、安政五年七月二十二日五十四歳にて沒す、直胤沒して翌年に直勝の死を見る、作品五ノ目逆足になりたるもの多く、又相傳銚深きものもある、直胤に優るの評がある。

刻銘「次郎太郎直勝」「莊司次郎太郎藤原直勝造之」「莊司次郎藤直勝」

三十六歳作

四十歳作

◇**直勝** 彌門 〔慶應—武藏〕 新々刀 **中上作**

次郎太郎直勝子、始め直好、文久二年直勝と改む、明治十七年三月卅一日五十歳にて歿す、作品五ノ目逆丁子砂流交る、大切先をも造る。

刻銘「莊司彌門直勝」「直勝」

五十四歳作 晩年銘

◇直胤 大慶

〔天保─武藏〕　新々刀 最上作

羽前山形に生る、莊司箕兵衛と稱し、大慶と號す、水心子正秀門に入り後師と同じく秋元侯に仕ふ、文政四、五年頃筑前大掾受領嘉永元年美濃介に轉ず、安政四年五月七日沒す、享年七十九、その作品は享和より沒年安政迄五十年に渉る、作品若年の頃濤亂刄あり、壯年の頃は逆五ノ目逆丁子又は丁子、姿豪壯なるものに大亂相州傳のものがある、地板目の裡に渦卷肌を現はす直胤特有のもの、又刀身に本莊義胤の彫物がある額彫にして緻密なるものが多い。

刻銘「大慶直胤造」「莊司箕兵衛大慶直胤」「出羽國住人大慶莊司直胤」「直胤」「莊司筑前大掾大慶藤直胤」「造大慶直胤」「莊司美濃介藤直胤」「美濃介直胤」

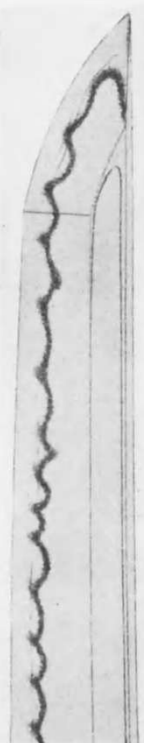
〔直胤の彫物に就て〕享和三年の頃既に自身彫がある、新々刀時代の努力家は彫刻の余技位は心得てゐたらしい、タガネの豪直なるは、刀匠彫なるためである、文政、天保にかけて本莊義胤の作を見るが緻密、精巧である、これは彫金家なるためである、又後月山貞一が彫つたものもある。

二十五歳作

四十歳頃（文政元年頃）

四十五歳作

五十六歳作

七十歳作
都は京都打

逆五ノ目

この逆五ノ目は古作兼光の作風をとつたものである。（類似工　荘司直勝、水心子正秀、月山貞一）

◇直宗 松崎　〔弘化―羽前〕　新々刀 **中上作**

松崎隼太と稱す、大慶直胤弟子、作柄直胤の如き逆丁子が多い。

刻銘「松崎隼太直宗」

◇直信 赤間　〔嘉永―羽前〕　新々刀 **中作**

月山貞吉門、赤間翁吉と云ふ、赤間綱信と同族ならんか。

刻銘「直信作」

◇直安 柳河　〔天保―筑後〕　新々刀 **中上作**

直胤門ならんと考へらる、筑後柳河の刀工となる。

刻銘「柳河住人藤原直安造」

◇直房 大道　〔寛永―美濃〕　新刀 **中上作**

彫物もある、後丹波に住す、大道安輝等と同族ならん。

刻銘「但馬大掾大道直房」

◇直道 三品 〔享保—攝津〕 新刀 中上作

丹後守兼道門、初め貞右衛門直次とも云ふ、師兼道の初銘直道を継ぎて弐代目直道となる、作品吉道の如く簾刃、菊水刃、又兼道の如き丁子刃をも見る。

刻銘「三品丹後守直道」

◇直道 左兵衛介 〔文化—攝津〕 新々刀 中上作

六代目の孫と云ふ、因州濤格門、直格とも銘す、寛政三年直道と改む。

刻銘「三品左兵衛介直道三拾五鍛之」「三品直格」

◇直廣 小林 〔元治—羽前〕 新々刀 中作

刻銘「米澤住小林孫六直廣作」

◇直秀 莊司 〔文久—武藏〕 新々刀 中上作

次郎太郎直勝子、莊司勝彌と稱し、江戸下谷住、明治卅八年九月六日七十三歳にて歿す。

刻銘「莊司勝彌直秀」「藤直秀」

☆直次＝三品直道參照

＊直格＝左兵衛介直道參照

☆直道＝丹後守兼道參照

◇尚定 紀州 〔元文—紀伊〕 新刀 中作

紀州直茂子、父の代攝津より紀州に移る。

刻銘「紀州住藤原尚定」

◇尚行 高田 〔元文―豊後〕 新刀 **中作**

紀行平末流と云ふ、延寶中肥前唐津に移る。

刻銘「豊州住藤原尚行」

◇永俊 奥州 〔元祿―陸前〕 新刀 **中作**

長俊五代の孫、田代彌四郎と云ひ三代安倫門、初銘重淸。（業物）

刻銘「奥州住永俊」

◇永吉 一龍齋 〔明治―下野〕 新々刀 **中作**

刻銘「一龍齋藤原永吉」

◇永國 河内守 〔寛文―肥後〕 新刀 **中上作**

出羽にも住す、法城寺國正弟子、宮本武蔵推奬する處の刀工と云ふ。

刻銘「河内守源永國」

◇永貞 御勝山 〔慶應―美濃〕 新々刀 **中上作**

濃州御勝山に住し、新々刀時代に於ける美濃鍛冶、後江戸に出る。

刻銘「藤原永貞」「濃州御勝山麓永貞」

◇永道 武蔵守 〔寛文―攝津〕 新刀 **中上作**

土井六兵衛と云ふ、永路とも銘じ江戸にても造る。

刻銘「武蔵守永道」

◇永重 攝津守初代 〔承應―陸前〕 新刀 **中上作**

仙臺長俊三代目、田代卯太郎と稱す、承應中菊一文字を受領す。（業物）

刻銘「攝津守藤原永重」 菊紋と一を切る

◇永 重 貳代　〔寳暦—陸前〕　新刀 **中上作**

永俊門、初銘清俊、貳代目永重となり、後永茂とも銘ず、菊一文字を切る事もある。

刻銘「奥州住田代久右衛門永重作」「永茂」

◇永 弘 長州　〔慶應—長門〕　新々刀 **中上作**

山口の治工、加賀介祐永門、彫刻巧にして龍の彫物等有り鑚深い。

刻銘「長州萩住永弘」「周防國住永弘謹鍛」

＊**永茂**＝貳代永重參照

◇成 宗　〔寛文—國不明〕　新刀 **中作**

自ら一文字成宗と五字に切る、丁子刄を焼き石堂是一に似る。

刻銘「一文字成宗」

◇宗 入 日置　〔寛文—武藏〕　新刀 **中作**

刻銘「日置法橋宗入」

◇宗 俊 固山　〔文久—磐城〕　新々刀 **中上作**

磐城白川に住し、固山宗次門、作品宗次の如くなるも大振りのものが多い。

刻銘「白川住固山宗俊」

◇宗 吉 下總守　〔慶長—越前〕　新刀 **中上作**

古刀期より新刀期に及ぶ。（業物）

刻銘「越前敦賀住下總守藤原宗吉」

◇宗 義 理忠

〔萬治―山城〕　新刀 **上作**

埋忠明壽孫、彫刻家にして鍛刀は極く稀れである。

刻銘「埋忠明壽孫數馬助橘宗義作」

◇宗 綱 粟田口

〔元祿―攝津〕　新刀 **中上作**

一竿子忠綱子、後忠綱と改むと云ふも確なる作品を見ない。

刻銘「粟田口正之進宗綱」

◇宗 次 固山

〔安政―武藏〕　新々刀 **上々作**

奥州白川産、固山宗平弟、加藤綱英門下、固山宗兵衛と稱し、又一專齋或は精良齋と號す、江戸に出で桑名藩の刀工となり、麻布永坂及四谷左門町に住む、山田淺右衛門、伊賀兎毛等に刄味利鈍の指導を受く、弘化二年備前介受領、明治の初まで作品を殘す、源淸麿が四谷伊賀町に鍛冶開業せし時、當時左門町に居住せる宗次に挨拶しなかつたと云ふので宗次は怒つて彼に果狀をつけたと云ふ話がある、刀工氣質の現はれと覺えて興味ある事柄である、作品は地小杢强きものと大板目肌あるもの、刄文匂締りたる五ノ目丁子、又自作彫と思はれる、龍、劍卷龍の彫刻を見る事がある。

刻銘「固山宗次作」「固山惣兵衛宗次作之」「江都麻布住固山宗兵衛宗次」「固山備前介宗次」「備前介藤原宗次」

天保の初め伊賀兎毛の試銘あり、天保九年以降弘化年間には山田五三郎の試銘を見る。

天保三四年

四十五歳作

四十九歳作

安政七年に鏨目を切鏨に改む、斯くの如き例は初期時代にはあるが晩年には珍らしいことである。

切鏨の宗次を武代目となせるは明らかに間違ひである、即ち左圖に掲げた宗次に六十六歳鍛とあるのが何よりの證據である、ゆへに切鏨は初代晩年作に屬するわけである。

五ノ目丁子

五ノ目丁子鮮かなる刄、足入り地鐵小杢又は大杢の肌現れゐるものありて、末備前の如くである。
（類似工　固山宗平、固山宗俊、大慶直胤、月山貞一）

◇宗　次 見龍子 〔元治―武藏〕 新々刀 **中作**

固山宗次武代と稱せられるは此工ならん。

刻銘「桑名臣固山見龍子宗次作」

◇宗　次 肥前國 〔慶長―肥前〕 新刀 **上作**

從來伊豫掾宗次と混合せるも、此の宗次は初代忠吉と同時代、むしろ先輩格にて肥前鍛冶の初祖とも云ふべき刀工であらう。

刻銘「肥前國宗次」

◇宗　次　伊豫掾初代　〔慶安―肥前〕　新刀　上作

諫早住、佐賀にても作る、初銘正次、前掲宗次とは何等かの關係があるかも知れない、從來この伊豫掾と混合してゐる樣である、作品五ノ目足入りにして土佐守に似る。

刻銘「肥前國住人伊豫掾源宗次」「肥前國住人源宗次」「伊豫掾源正次」

初期銘

◇宗　次　伊豫掾貳代　〔貞享―肥前〕　新刀　中上作

左馬丞とも云ひ、初銘宗正と唱ふ、銘字に依つては初貳代の判別が容易でない。

刻銘「肥前國住左馬丞源宗次」「伊豫掾源宗次」

◇宗　繼　信濃　〔文久―信濃〕　新々刀　中上作

山浦眞雄門、宗次とも切る、銘字草書達者である。

刻銘「宮川筑前守源宗繼造之」「信濃國宗次」

◇宗 長 肥前　〔寛永―肥前〕　新刀 上作

埋忠明壽門、初代忠吉に從ひ肥前に來り多く彫物の作品を殘す、初代忠吉等に見事なる劍卷龍其他を彫り「切物藤原宗長」又は「彫物宗長」と添銘す。

刻銘 鍛刀には「藤原宗長」とある

◇宗 則 源　〔慶應―陸中〕　新々刀 中作

刻銘「源宗則」

◇宗 安 肥前　〔寛文―肥前〕　新刀 中上作

初代伊豫掾宗次門と云ふが、銘字中心共に極めてよく似る、同人に非るやと思はれる。

刻銘「肥前國源宗安」

◇宗 明 久保田　〔文久―陸中〕　新々刀 中上作

固山宗次の作風と銘字を加味す、特に切れ味に意を注げりと云ふ。

刻銘「陸中一關住久保田宗明」「一關士宗明」

◇宗 有 精壯齋　〔元治―陸奥〕　新々刀 中上作

精壯齋と號し、作風固山宗次に似る、同一派たること確か、奥州八戸住、又江戸にても造る。

刻銘「於江府宗有」「於青山宗有」「宗有」

◇宗 貞 播州　〔延寶―播磨〕　新刀 中作

津田助廣弟子。

刻銘「播州住藤原宗貞」

◇宗 道 上總大掾　〔寛文＝越前〕　新刀 中上作

萱谷九郎右衛門と云ひ上總守とも打つ、初銘宗次、越前下坂に住す、作柄は武蔵守兼中等に似たるも華やかなるものが多い。

刻銘「越前國住上總大掾藤原宗道」「越前住上總守藤原宗道」

◇**宗道** 下坂 〔元文―越前〕 新刀 **中作**

宗道弐代目、菅谷勝三郎と號す、作品見えない。

刻銘「越前住下坂藤原宗道」

◇**宗重** 常陸守 〔寛文―攝津〕 新刀 **中上作**

本國播磨、多田宇兵衛と稱し津田助廣門となる、初め常陸大掾を受領す、南蠻鐵にても造る。

刻銘「多田常陸守宗重」「常陸守宗重」

◇**宗重** 常陸守 〔元祿―播磨〕 新刀 **中作**

多田三郎右衛門と云ひ後東武移住。（業物）

刻銘「常陸守宗重」

◇**宗平** 固山 〔文政―岩代〕 新々刀 **中上作**

宗兵衛と稱し固山宗次の兄、桑名にも住す、作風弟宗次の如く五ノ目丁子鮮やかなるものが多い。

刻銘「宗平作」「固山宗平作」「於東都固山宗平作」

◇**宗平** 佐渡大掾 〔延寶―肥前〕 新刀 **中上作**

肥前廣貞子三男と云ふ、作品稀れ。

刻銘「肥前佐賀住佐渡大掾藤原宗平」

◇**宗弘** 越前守 〔寛文―武藏〕 新刀 **中上作**

日置光平の弟、京にも住む。（良業物）

刻銘「日置越前守源宗弘」菊紋を切る

◇統 景 高田　〔正保―豊後〕　新刀 中作

同銘古刀期より續く、豊前にも住す。

刻銘「豊後高田住藤原統景」

◇統 行 高田　〔慶長―豊後〕　新刀 中上作

中磨新五郎と稱し古刀期からの作品がある、新刀高田の祖をなす。（業物）

刻銘「豊州高田住藤原統行」「藤原統行」

◇氏 吉 海部　〔文久―阿波〕　新々刀 中上作

新々刀期に至りて氏吉の名復活せるものと考へられる。

刻銘「阿州海部住氏吉」

◇氏 房 飛彈守　〔慶長―美濃〕　新刀 上作

若狭守氏房門と云へど、子にして氏房名を襲名せしもの丶如くである、本國美濃、後尾張に住す、慶長九年々號入り一刀あり、是より寛永頃に渉つて作品が見られる様である、作刀身巾廣く、刄文濤亂、伊勢村正を思はしむる烈しき作風を備ふ。（業物）

刻銘「氏房」「飛彈守藤原氏房作」「飛彈守氏房」

同國の伯耆守信高に代々が有りし如く、氏房にも初代、二代、三代があつた、二代は備前守氏房、三代は初代同樣飛彈守である、そこで初代三代の相違点を記せば前者銘字太く、後者は細くタガネキザミ顯著なる事である。

大亂濤

刃文大亂濤、烈しき感、地板目肌潤ひありて現る、刃強きため刃境に「シナヘ」を交へたるあり氏房の特徴の一ツと見て差支へない。（類似工 若狭守氏房、初代康継、肥後大掾貞國）

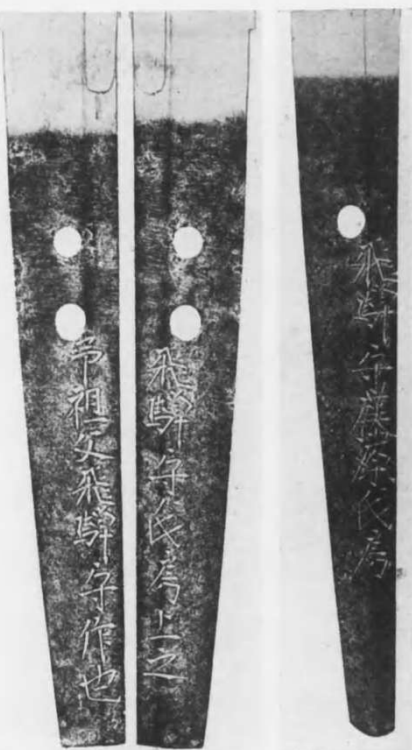
◇氏　房　備前守　〔寛永―尾張〕　新刀　**中上作**

飛彈守氏房の子と云ふ、銘字よく似る、作風初め飛彈守氏房の如き烈しき濤亂なるも晩年は中直など尋常なるものが多い。（業物）

刻銘「備前守氏房」「備前守藤原氏房」

◇氏　房　參代　〔寛文―美濃〕　新刀　**中上作**

初代飛彈守氏房の孫、従来初代と同視せられた、作風相似たる上、作位も劣らない。

刻銘「飛彈守藤原氏房」

初代氏房の作を三代氏房が摺上げて銘を切つたもの。

◇氏　房　備後守　〔慶長―薩摩〕　新刀　**上作**

闘氏房門、或は子ならんか、薩摩へ移住の後入道して道與と稱すとも云ふも、作品が一本も見られないのは不思議である。（業物）

刻銘「丸田備後守氏房」

◇**氏 詮** 中島 〔文久―土佐〕 新々刀 **中作**

刻銘「氏詮」

◇**氏 重** 大和大掾初代 〔寛文―播磨〕 新刀 **中作**

姫路住、三木新兵衛と云ひ、元祿四年四月十八日逝く。（業物）

刻銘「大和大掾藤原氏重」

◇**氏 重** 大和大掾貳代 〔享保―武藏〕 新刀 **中作**

本國播磨、後江戸に來る、三木新兵衛と稱す、享保三年十一月十日沒す、數打ものをも造り江戸紺屋町の刀屋へ卸すと云ふはこの氏重であらう。

刻銘「大和大掾氏重」

◇**氏 重** 參代 〔延享―播磨〕 新刀 **中作**

三木新兵衛、氏繁とも銘す、寶暦十年四月廿六日沒す。

刻銘「大和大掾氏重」「於播州手柄山麓藤原氏繁」

◇**氏 繁** 手柄山 〔明和―播磨〕 新々刀 **中上作**

參代氏重子、三木新兵衛と云ひ隠居して入道丹霞と打つ、天明三年十二月廿五日沒す。

刻銘「播州手柄山麓藤原氏繁精鍛作」「播州手柄山藤原氏繁」裏に「丹霞」とも切る

＊**氏 房**＝薩州正房參照

＊**氏 繁**＝播磨三代氏重及手柄山正繁參照

◇**信 屋** 尾州 〔明暦―尾張〕 新刀 **中上作**

二代信高弟子、初め信家、後和泉守受領、信屋と改む、銘字氏房に似る。

刻銘「和泉守信屋」「尾州住藤原信屋」

◇信友 加州 〔寛永—加賀〕 新刀 中上作

古刀期より續く。

刻銘「信友」

◇信友 賀州 〔承應—加賀〕 新刀 中上作

世上作品の多くは此の工に相當せる如く思はれる、作風加州家平に似る。

刻銘「賀州住藤原信友造」「信友」

◇信利 山城守 〔天和—播磨〕 新刀 中作

黒田清右衛門大和守とも打つと云ふ。

刻銘「山城守藤原信利」菊紋を切る

◇信一 運壽 〔元治—武藏〕 新々刀 中上作

運壽是一の一派にしてその作柄も亦相似る。

刻銘「運壽藤原信一作」「丹波綾部臣加藤信一」

◇信吉 信濃守初代 〔正保—山城〕 新刀 中上作

平安城に住し、菊紋を切りたるも見る、寛永、寛文年間の作者である。（業物）

刻銘「信濃守藤原信吉」

◇信 吉 信濃守弐代 〔延寶―山城〕 新刀 中上作

高井金三郎とも云ひ、大阪にも住す、初め藤原を稱し、後源と改む。

刻銘「洛陽住信濃守源信吉」「信濃守藤原信吉」

◇信 吉 越前守 〔延寶―攝津〕 新刀 中上作

山城初代信濃守信吉三男、入道して倫信と稱す、作品延寶、元祿の間、直刃多く銚深きは井上眞改を偲ばしむ、信吉各代に於て最も優れる。（業物）

刻銘「越前守源來信吉」「高井越前守源信吉」

◇信 仍 石見守 〔寛文―越前〕 新刀 中上作

重高との合作が有る。

刻銘「石見守藤原信仍」

◇信 高 伯耆守初代 〔慶長―尾張〕 新刀 上作

生國濃州上有知、三阿彌兼則の末、河村左衛門、天正十九年伯耆守受領、慶長の初め尾州清洲に移り同十五年名古屋へ轉ず、寛永十年隠居して慶遊と改む、同十三年享年七十六にて逝く、作品巾有りて濤亂刃、飛彈守氏房に似る。（業物）

刻銘「伯耆守藤原信高」「伯耆守藤原朝臣信高」

◇信高 伯耆守貳代　〔慶安―尾張〕　新刀 上作

河村伯耆と稱す、寛永十年伯耆守受領、寛文二年六十歳にて入道す、寛文年間需要多く子の信高と協力して造る、故に世上見られる信高作品の多くはこの二代三代の作である、元祿二年沒、刄文五ノ目揃ひたる亂、湾心を交へる又は直刄尋常なるもの。

刻銘「伯耆守藤原信高」「前伯州山月信高居士」「伯耆守藤原信高閑遊入道」「前伯州信高入道」

右の裏「山内八郎左衛門尉帶之」と添銘がある。

晩年銘

二代信高は「前伯州信高入道」銘多く「伯耆守藤原信高」銘が尠い。

◇信高 伯耆守參代　〔延寶―尾張〕　新刀 中上作

河村三之亟と稱す、寛文五年伯耆守受領、寶永四年沒す、寛文年間刀劍需要著しき爲めか、父閑遊入道と協力製作せるものが多い、ゆへに貳代との合作銘ありて作風亦相似る。

刻銘「伯耆守藤原信高」

二代三代合作（各自銘）

◇信 高 伯耆守四代　〔正徳―尾張〕　新刀 **中上作**

三之亟と稱し、信照と銘す、正徳元年信高と改め、享保十四年沒す。

刻銘「伯耆守藤原信高」「伯耆守信照」

◇信 高 伯耆守五代　〔享保―尾張〕　新刀 **中上作**

初め三之亟信照と銘す、享保十五年伯耆守信高と改銘、天明三年沒す。

刻銘「伯耆守藤原信高」

◇信 高 藤原　〔元文―尾張〕　新刀 **中作**

信高六代目、三之助信照と銘す、天明三年父の沒後三之亟信高と改む、同年冬沒す、作品僅かに父子合作を見るのみ。（右圖參照）

刻銘「藤原信高」

五代六代の合作（全部五代銘）

◇信 連 橘　〔慶應―攝津〕　新々刀 **中上作**

栗原信秀同人ならんか、作柄五ノ目丁子砂流交り等殆ど信秀同様。

刻銘「橘信連」

◇信 國 筑前　〔寛文―筑前〕　新刀 **中作**

古刀筑前信國の流れ、單に刀銘信國と云ふ。

刻銘「筑前福岡住信國」

◇信 貞 防州　〔寛文―周防〕　新刀 **中作**

刻銘「防州住源信貞作」

◇信 重 源　〔元治―武藏〕　新々刀 **中上作**

總州古河にても造る、作品刄文中直、地鐵無地のものが多い。

刻銘「於總州古河城内江府住源信重造之」

◇信　秀　高橋　〔明治―攝津〕

雲州長信弟子、後月山貞一弟子となる。

刻銘「晴雲子越智信秀鍛之」

新々刀　中作

◇信　秀　栗原　〔元治―武藏〕

本國越後、山浦清麿門、通稱栗原謙司、慶應元年頃筑前守受領、其頃一時信孝と名乗つたこともある、又信連とも名乗りしか、大阪にても造る、作刀身巾廣く切先延び、先反の氣味、地板目、刄文五ノ目亂砂流金筋交る、刀身に遣龍、不動、梅枝その他種々の彫物がある、彫同作と添記する事も或はないこともある、明治四年癈刀令後歸鄕越後に引籠りしと思はる。

刻銘「栗原謙司信秀」「栗原信秀」「栗原筑前守信秀」「栗原筑前守平朝臣信秀」「平信秀」「栗原平信孝」「栗原信孝」

新々刀　上々作

初期安政頃は文字更に縦長である。

初期銘

鐔淺く密なる彫物、初期作は彫同作を必ず切るも晩年はないものがある。

晩年銘

信秀自彫

＊**信家**＝尾州信屋參照

＊**信孝**＝栗原信秀參照

☆**信照**＝四代、五代、六代信高參照

◇**宣繁** 延壽　〔昭和―熊本〕

現熊本市淨行寺町、昭和十一年第二回日本刀展覽會に於て推薦せらる、時七十三歲。

刻銘「東都住延壽太郎宣繁」

◇**陳直** 三河守　〔慶長―美濃〕　新刀 **上作**

陳直には天正十四年、慶長十九年、それにこの元和六年等の作品がある、勿論同一人の作と見る、古今鍛冶備考には寬文の一人が記錄してあるが貳代であらうか。

刻銘「三河守大道陳直作」

◇則利 呉服山 〔天和—越中〕 新刀 中上作

越中呉服山に住し、則重十六代孫と稱す、藤太郎と云ひ、常州水戸にても造る、作品梯分肌ものを打ち則重の風を慕ふものが見える。

刻銘「呉服山富士太郎則利」

◇則之 赤穂 〔天保—播磨〕 新々刀 中上作

刻銘「播州赤穂住則之」

◇法道 城州 〔寛文—山城〕 新刀 中作

和泉守金道一派、攝津にても造る。

刻銘「城州住來法道」

◇德友 雲寺 〔萬治—山城〕 新刀 中作

刻銘「山城國晋郡住雲寺德友」

◇德鄰 市毛 〔文政—常陸〕 新々刀 上々作

水戸士、白旗山に住す、初め久保長矩門にして後尾崎助隆に師事す、近江介受領、その作文化文政天保に在りて德隣と切りたるは貳代なりと云へども此の作は見えない、作品師助隆の如き濤亂刄又は直刄にして銚深く、地鐵小杢目つむ、其の出來師に優れ水戸隨一の作者である。

刻銘「水戸市毛德鄰作」「市毛近江介藤原朝臣德鄰」「常陸國市毛近江守藤原德鄰」「市毛德鄰作」

◇徳　兼　水戸　〔文久―常陸〕　新々刀　**中作**

徳宗子、固山宗次門に入る、明治三十六年七十五歳にて没す。

刻銘「徳兼」

◇徳　勝　勝村初代　〔元治―常陸〕　新々刀　**上作**

勝村彦六と稱し、水戸藩士、徳宗弟子、江戸に出で細川正義、固山宗次、運壽是一等に交ると云ふ、作品長刀多く必らず柾目肌、刃文は直砂流がある。

刻銘「水府住勝村徳勝作之」「水府住徳勝作」「水府住人源徳勝作之」

初期銘

晩年銘

◇徳　勝　勝村貳代　〔明治―常陸〕　新々刀　**中上作**

初代徳勝子、彥太郎と稱す、作品明治二年頃より始まるも明治四年癈刀令以後の作品は現れない、作風初代同樣。

刻銘「常陸國水戸住勝村徳勝造」「水戸住勝村徳勝作」

◇徳　宗　水戸　〔安政―常陸〕　新々刀　**中上作**

關内幸右衛門、徳勝等水戸鍛冶の師、作品徳勝等同樣。

刻銘「常陸國水戸住徳宗作」「水戸住徳宗作之」

◇國　富　佐渡守　〔正保―長門〕　新刀　**中作**

江戸、奥州、出雲にも住す、佐渡大掾にも任ぜらると云ふ。

刻銘「佐渡守國富元嘉作」「佐渡守藤原國富」

◇**國富** 日州 〔天和―攝津〕 新刀 **中上作**

井上眞改門、本國日向にして師と同じ、作品に日向國住人とあれど攝津にて造りしものならんと思はる。(業物)

刻銘「日向國住人國富」

◇**國虎** 和泉守 〔貞享―磐城〕 新刀 **上作**

堀川國安の一派より出、井上眞改弟子となる、本國磐城に住し、內藤家に仕ふ、享保三年八月四日六十一歳にて歿す、作柄眞改の如くにして華やか、二代同銘ありと云ふも作品を見ない。(業物)

刻銘「和泉守國虎」「根本和泉守藤原國虎」菊紋又枝菊を切りたるものがある

◇**國時** 日州住 〔萬治―日向〕 新刀 **中上作**

刻銘「日州住國時」

◇**國俊** 延壽 〔文化―肥後〕 新々刀 **中上作**

延壽國日出子、彫物もある。

刻銘「延壽國俊」「國俊造」

◇**國儔** 越後守 〔元和―山城〕 新刀 **上々作**

生國日向飫肥、國廣の甥とも門人とも云ふ、この点甥にして弟子と見ても差支あるまい、後國廣に隨ひて京堀川に住む、作品刀、脇差、平造脇差多く、地鐵小杢目、刄文は匂締りたる五ノ目、尖り心にて刄沈む、これは切味を良くさせるためであらうか。(良業物)

刻銘「越後守藤原國儔」

新刀辨疑に「二字銘に切るもの多し」と云へるは實見してゐない推定のためであらう。

◇國　勝　紀州　〔元文―紀伊〕　新刀　**中上作**

四代重國子、九郎三郎と稱す、初銘重勝。

刻銘「紀州住文珠國勝」

◇國　勝　豫州　〔嘉永―伊豫〕　新々刀　**中作**

刻銘「豫大州住國勝造之」

◇國　包　仙臺初代　〔寛永―陸前〕　新刀　**最上作**

國分若林(仙臺城下)に住し、保昌貞宗の末流と云ふ、初め源藏後本郷吉之允と改む、伊達政宗の命に依つて上京越中守正俊の門に入る、翌元和元年四月大阪陣起り、國包歸國鍛刀に從事す、同二年再び正俊の門に入り同五年修業を終へて歸ると云ふ、寛永四年山城大掾を受領したと云ふが、その作品寛永三年既に之を見る、故に受領は作品に從ふべきであらう、寛永十五年入道して用恵と云ふ、正保二年業を嫡子吉左衛門に讓り隱居した、寛文四年十二月年七十三にして逝く、作品鎬高く柾目肌、刄文直肌にからみて砂流、鋩子燒詰風。(最上大業物)

刻銘「奥州仙臺住藤原國包」「山城大掾藤原國包」「奥州仙臺住山城大掾藤原國包」「用恵國包」

寛永三年既に山城大掾添記の銘を見る、記録には寛永四年受領とあるも、この事實に因り寛永三年には最早山城大掾を受領して居たと思はれる。

國包は自巳の大和傳に終始して師越中守正俊の影響を余り見ない、是は國包既に鍛法に熟達してゐたが更に一層技を練り巳れを磨く爲め正俊門に入つたとすべきであらう。

寛永五…七年頃

寛永中頃

寛永終り頃

銘の上に九曜の星を刻せるものが殊に喜ばれる樣であるが、これは寛永中期頃までの前作に時折見るのであつて、むしろ優れた作は九曜星のない寛永中期以降のものに多い。

正保二年業を嫡子吉左衛門に讓り隱居したと云ふも、こゝに正保三年十月の作あり、又「山城大掾藤原用恵國包」裏「慶安元年八月吉日」と切るものを見る、ゆへに正保二年隱居の說に從つてこれ等を判斷するならば隱居後も求めに應じて造つたと見るべきであらう。

晩年銘

五十五歲作

直刄

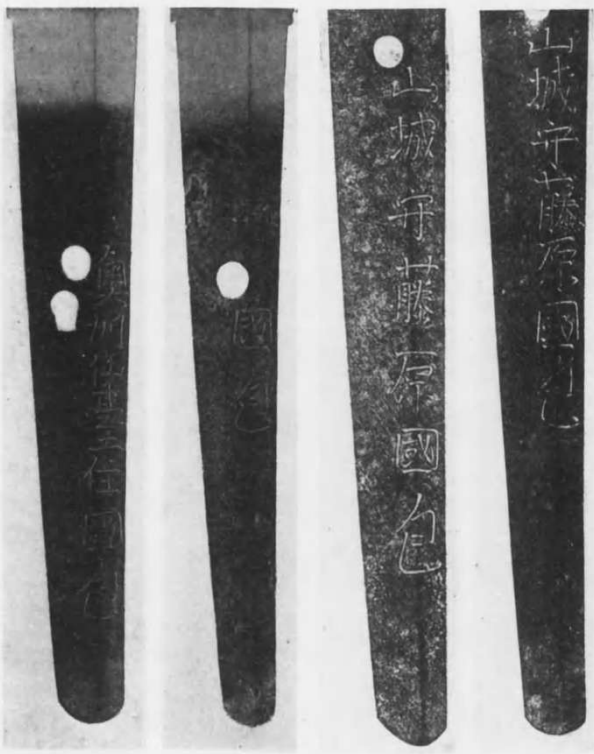
地鐵は柾目である、直刄幾分の砂流、鋩子は返り淺い又は燒詰。（類似工　仙臺國包一門、駿河包國）

◇國　包　貮代　〔寛文―陸前〕　新刀　上々作

本鄕吉左衛門と稱す、正保二年父の業を繼ぐと云ふ、寛文七年十一月十二日山城守受領、寛文十二年七月二日行年六十一歳にて沒す、古來奧州仙臺住國包の臺の字は「臺」に限る如く說くも然らず「壵」にも切る、作品柾目肌にて刄文淺き亂心、又は直刄が多い。（良業物）

刻銘「奧州仙臺住藤原國包」「山城守藤原國包」「國包」

「奧州仙臺住藤原國包」銘はその仙臺の臺の字に依つて代々が定められてゐたが、あてはまらないものが有る、一局部のみに拘はれて銘字全体の感じを沒却してはならない、むしろ貮代を定める便法は國包の包の中央部「ヨ」を記憶することであらう。

受領前

受領直後

晩年銘

◇國　包　源次郎　〔貞享―陸前〕　新刀　上作

三代目國包、通稱源次郎、寛文十二年相續、元祿十年隱居、寶永二年十一月七日七十三歳にて沒す、山城守受領と云ふが疑はしい、作風貳代國包の如くである。

刻銘「源次郎國包」「奥州仙臺住源次郎國包」「奥州仙臺住國包」

◇國　包　源十郎　〔元祿―陸前〕　新刀　中上作

四代目國包、源次郎實弟にして養子となる、元祿十年相續、同十五年八月十九日四十六歳にて沒す、三代國包に先じて死すために三代と混同される場合がある、作品は殆ど見受けない。

刻銘「奥州住國包」

◇國　包　六代　〔享保―陸前〕　新刀　中上作

刻銘「奥州住國包」

◇國　包　源之助　〔天明―陸前〕　新々刀　中上作

國包拾代、天明三年水心子正秀の門に入り同五年に修業終る、天明六年六月廿九歳にて沒す、早逝の爲め作品殆んど殘らない。

刻銘「奥州國分若林住國包」

◇國　包　源兵衛　〔弘化―陸前〕　新々刀　中上作

本郷源兵衛と云ひ、國包十二代目、父の沒後再び江戸に出て直胤門に入る、文化十二年相續、弘化五年二月廿二日四十九歳にて逝く、作品柾目肌直刄の祖先の傳を繼承す。

刻銘「仙臺住國包作」「奥州仙臺住藤原國包」

◇國包 榮助　〔元治—陸前〕　新々刀 中上作

本郷榮助と稱す、十三代目、嘉永元年相續、明治十三年六月六十一歳歿、刀屋等に頼まれて裏年號を入れない、暗に初代を思はしむるものを造つたと云ふのは廢刀令後の本工であらう。

刻銘「仙臺住藤原國包」「國包」

◇國吉 法城寺　〔貞享—武藏〕　新刀 中作

法城寺正次門、彌兵衛後宅太夫と號す。(業物)

刻銘「武州住近江守法城寺橘國吉」

◇國吉 延壽　〔享和—肥後〕　新々刀 中作

肥後國信子、田中右七郎と云ふ。

刻銘「延壽次郎國吉」

◇國吉 東叡山　〔安永—武藏〕　新々刀 中上作

山城守國重門。

刻銘「於東叡山麓藤原國吉」

◇國義 新藤　〔天和—陸中〕　新刀 中上作

本國筑前福岡、九代信國次男、治郎兵衛と號す、延寶中東武へ下り、南部家の刀匠となる、天和元年盛岡へ移り元祿十一年歿す。

刻銘「新藤源國義」「奥州盛岡住新藤源國義」「國義」

◇國義 駿河守　〔寛文—日向〕　新刀 中上作

和田姓、日向延岡に住す。

刻銘「駿河守平國義」

◇國義 攝州住　〔寛文—攝津〕　新刀 中作

初代和泉守國貞弟子、後日向に移る、下總守國吉とも云ふと。

刻銘「攝州住藤原國義」

◇國 武 平安城 〔承應―山城〕 新刀 **上作**

堀川國廣門にして、出雲大掾吉武の父、國廣の俤なく、子の吉武の方に近い作風である。（業物）

刻銘「平安城住藤原國武」「國武」

◇國 武 菅原 〔貞享―大和〕 新刀 **中作**

大和郡山住、二代國助門、初銘上野守助包と云ふ。（業物）

刻銘「大和守菅原國武」

◇國 綱 相模守 〔寛文―越前〕 新刀 **中作**

越前下坂一派、多兵衛尉と稱す、東武にても造る。

刻銘「相模守藤原國綱」「越前住相模守藤原國綱」

◇國 次 山城大掾 〔寛永―越前〕 新刀 **中上作**

大和大掾正則長男、山田七郎兵衛と云ひ、寛永六年六十五歳にて沒す。（業物）

刻銘「山城大掾藤原國次」

◇國 次 山城守 〔萬治―武藏〕 新刀 **中作**

越前より江戸に移りたるものと思はる。

刻銘「山城大掾藤原國次」「山城守藤原國次」菊紋を添へる

◇**國次** 壽徹 〔寛文—武藏〕 新刀 **中上作**

越前大掾國次の子ならんか、初め熊本住後江戸に移つた樣である。

刻銘「平安城藤原來國次」「肥州產法橋來國次入道壽徹」

◇**國次** 武藏守 〔寛文—攝津〕 新刀 **中作**

初代河内守國助子、國光とも銘す。(業物)

刻銘「武藏守國次」「攝州住國光」

◇**國次** 越前大掾 〔慶安—山城〕 新刀 **中上作**

出羽大掾國路との合作を見る、國路子なるやも知れず、後越前、更に肥後熊本に移る、作柄堀川物と見ゆる出來。

刻銘「越前守藤原國次」「越前大掾藤原國次」

◇**國次** 鬼塚 〔貞享—筑後〕 新刀 **中作**

刻銘「鬼塚國次」

◇**國良** 豫大州 〔天保—伊豫〕 新々刀 **中上作**

伊豫近江守久道末と云ふ、銘を國良と切る。

刻銘「豫大州臣國良」

◇**國宗** 岡山 〔寛文—備前〕 新刀 **中作**

多門兵衛正成門、茂右衛門と號す、作風横山祐定に似る。(良業物)

刻銘「備前岡山住藤原國宗作」

◇國 宗　宇多　〔延寶―越中〕　新刀 **中作**

後東武淨瑠璃坂住、元祖より十七代目と稱するも刀工には誇張のあることを思出す。

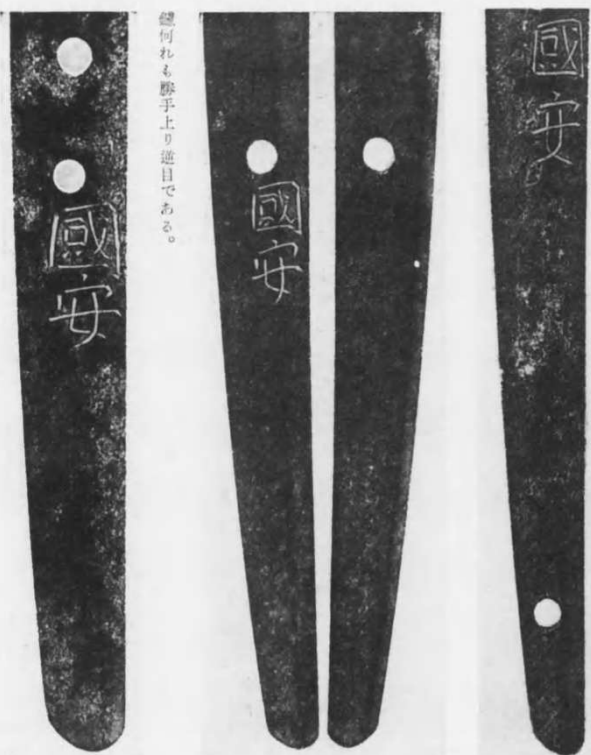
刻銘「宇多國宗作」

◇國 安　堀川　〔元和―山城〕　新刀 **上々作**

國廣弟、正宗の刀を僞作なし兄國廣の訴ふる所となり罪せられて領主鳥居家に預けらる、慶長七年同家が磐城に封ぜらるゝ時從つて移り、この子孫より和泉守國虎が出たと云ふ事である、その作品鑢が勝手上り(逆目鑢)であるのは國安が左利であつた爲めと鑑てよからう、國廣の銘字に似てゐるのでその代作をなせる如く云ふ書もあるが、銘字の似寄りは同時代であり、同系である故と考へられる、作風國廣同様。(大業物)

刻銘「國安」

鑢何れも勝手上り逆目である。

初期銘

國安には往々鎬筋が棟へ寄つたものがある、これは中心の反が強かつたため後世外裝の都合で棟へ鑢をかけたためである。

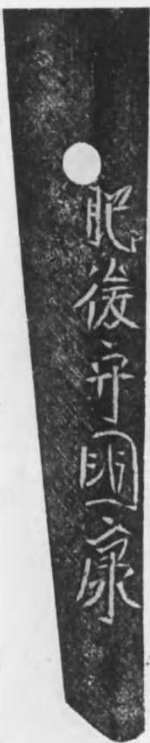
◇**國泰** 延壽 〔天保―肥後〕 新々刀 **中作**

延壽國秀子、田中莊司と稱す。

刻銘「肥後劍工延壽國泰」

◇**國康** 肥後守初代 〔寛文―攝津〕 新刀 **上作**

小林源左衞門と云ひ初代河内守國助三男、作風中河内に似る。（大業物）

刻銘「肥後守國康」

◇**國康** 肥後守貳代 〔元祿―攝津〕 新刀 **中上作**

小林安之亟と稱す、作品見えない。

刻銘「肥後守國康」

◇**國康** 肥後大掾 〔寛文―越前〕 新刀 **中作**

刻銘「肥後大掾國康」「越前住伊勢大掾藤原國康」

◇**國正** 法城寺 〔元祿―武藏〕 新刀 **上作**

法城寺正弘、貞國等と共にこの一派の代表をなす、作柄貞國同樣。（業物）

刻銘「法城寺但馬守橘國正」

◇國正 駿河守 〔寛文—伊豫〕 新刀 中作

市兵衛と云ひ宇和島住、江戸安定門。

刻銘「駿河守藤原國正」

◇國正 江戸 〔萬治—武藏〕 新刀 中上作

大和守安定の俤ありて或は駿河守國正同人やも知れずと考へらる、左圖二字銘國正が中心から見ても安定門なること確かと思はれる。（業物）

刻銘「武州江戸藤原國正」「國正」

◇國正 奥州 〔寛文—陸奥〕 新刀 中作

刻銘「奥州宇多郡中村住人國正」

◇國政 堀川 〔元和—山城〕 新刀 上々作

堀川一門中何人かの一時的變銘に非ざるやと思はれる。

刻銘「國政」

◇國昌 延壽 〔天明—肥後〕 新々刀 中作

刻銘「延壽國昌作」

◇國益 土州 〔延寶—土佐〕 新刀 中作

土佐吉國養子、大阪貳代丹波守吉道門。

刻銘「土州住國益」「上野大掾國益」

◇國維 相模守 〔寛文—伊豫〕 新刀 中作

初銘吉重、大阪貳代丹波守吉道門。

刻銘「相模守藤原國維」

◇國輝 小林 〔貞享—攝津〕 新刀 上作

小林隼之進と稱し、初代國助四男、寛文十一年伊勢大掾受領、同十二年春伊勢守に轉す、津田助廣、井上眞改共に天和年間に沒したる後は大阪鍛工界の第一人者として國煇有名を馳す、作風濤亂刄に五ノ目足入り、彫刻も稀に見る、元祿年間より中心の形幣を模す。（業物）

刻銘「伊勢守國煇」「小林隼之進國煇」「小林伊勢守國煇」

國輝四代説がある、そのためにこの伊勢守國輝が二人にも三人にも區別されてゐるが、伊勢守につぎ和泉大掾國輝が三代續いてゐることを忘れてはならない。

◇國輝 和泉大掾初代 〔寛文―伊豫〕 新刀 中上作

三好太郎兵衛と稱し、三好長國門と云ふが實際は子であらうか、初銘長淸後和泉大掾國輝と改名せしと云ふ、旣に當代から伊勢守國輝に關係ありしものと思はれる。

刻銘「和泉大掾藤原國輝」

◇國輝 和泉大掾三代 〔享保―伊豫〕 新刀 中上作

國輝三代目、三好藤四郎と稱し、松山住、幼年の折父(輝政參照)に去られその舊師伊勢守國輝の家に長ずと云ふ、和泉大掾を受領、國輝を襲名す、代下り同銘あり松山に住す。

刻銘「和泉大掾藤原國輝」

◇**國　定** 河内大掾　〔寛文―岩代〕　新刀 **中作**

會津の刀匠にして初銘國貞、寛文の末年沒す。（業物）

刻銘「河内大掾國定」

◇**國　定** 河内守　〔貞享―岩代〕　新刀 **中作**

古川孫太夫と稱し、元祿二年沒す。（業物）

刻銘「河内守藤原國定」

◇**國　貞** 和泉守初代　〔寛永―攝津〕　新刀 **上作**

日向飫肥に生る、洛陽に出で堀川國廣弟子となり、元和五年九月和泉守を受領、後入道して道和と云ふ、慶安五年五月五日沒す、行年六十三、晩年作は貳代目代作が多い、作品反淺く、地小杢潤ひあり、刄文亂刄、小亂刄、小五ノ目がかる、額内劍卷龍を稀れに見る。（大業物）

刻銘「攝州住藤原國貞」「和泉守藤原國貞」「於大阪和泉守國貞」「和泉守國貞」

若打銘

右國貞のタガネは弱い、これは老年なるためである、左圖眞改代銘國貞のシツカリした銘に比較るとす一見して明瞭になる。

晩年銘

眞改代銘

子眞改の代作代銘が多い、勿論これは何等曲事も不純もないものであつて、子が親に代つて打つ、世に多くある事柄である、例へば親が老衰したため、或は子が早くから業にたづさはつた時又は親より子が才能のあつた場合等を考へ得る。

眞改代銘

五ノ目揃ひたる刄、燒の谷が丸い、匂紲深く、鋩子小丸、地鐵小杢細美、初代國貞の特徴とする作風。（類似工　初代助廣、貳代助廣の若打、初代國助、初代越後守包貞）

小五ノ目

◇國　清　山城守初代　〔寛永―越前〕　新刀　上作

本國信州松代、三代島田助宗子、京に出で堀川國廣門に入る、通稱吉右衛門と云ひ後越前福井に移住、寛永五年二月山城守並びに菊紋を拜領す、作品これより初まる如く身巾頃合姿よく、地杢目肌粒立つ、刄文中直、亂刄もある。（業物）

刻銘「山城守藤原國清」菊を切る

◇國　清　山城守貳代　〔寛文―越前〕　新刀　上作

國清貳代、吉左衛門と稱す、洛陽にても造る、中心に菊紋を切らざる場合刀身に精巧な枝菊の彫刻をなす樣である、作柄初代同樣にして肥前刀の如き中直刄が多く亂刄も少しく有る。

刻銘「山城守藤原國清」菊のみ又は一を添へたるものもある

〔代別に就て〕古來同名の代別に就ては極めて簡單に判斷を下してゐたものらしい、これは一刀工毎に當然あるべき銘の變遷に全然留意してゐないためである。國清の代別は以上の理由から見て非常に難しい、初代國清作品は寛永年間に初まつたらしいが裏銘のない國清の大部分はこの貳代と鑑たい、又「一」の添へてあるものは初代にはなく、貳代晩年以降三代四代と見る。

◇**國　清**　山城守參代　〔寛文―越前〕　新刀　**中上作**

寛文中早世すと云ふ、即ち二代國清存命中に沒せる如く思はれる、かく鑑れば獨立せる參代國清銘の刀は出現しないであらう。

刻銘「山城守藤原國清」菊一を切る

◇**國　清**　山城守四代　〔寶永―越前〕　新刀　**中上作**

父早世と云ふ、故に事實上三代目國清ならんか、新兵衛と稱す、刄文直刄尋常にして、地小杢立ち、菊枝の彫物がある。

刻銘「山城守藤原國清」「山城守藤原國清入道新兵衛作」菊一を切る

◇**國　行**　大和大掾　〔寛文―豊後〕　新刀　**中作**

新刀高田一派、大和守をも受領す、作柄同派輝行等に似る。（業物）

刻銘「豊後住大和大掾藤原國行」「豊後住大和守藤原國行」

◇**國　幸**　堀川　〔寛永―攝津〕　新刀　**上作**

堀川國廣門となり後攝津尼ヶ崎に住す、作柄同門越後守國儔に似る。（業物）

刻銘「尼崎住藤原國幸」「攝州尼崎住藤原國幸」

◇國　路　出羽大掾　〔寛永—山城〕　新刀　上々作

堀川國廣門にして作風師の影響が顯著である、初め國道と銘じ鏨が太い、出羽大掾を受領、中に出羽大掾十一辻と切つたものがあるが十一は九二で國、辻は路の意であるらしい、即國路をもぢつて十一辻などとしたものであらう、貳代説があるのは非常に長命なりし爲めで、慶安五年の作に七十七歳の添銘あるものを見る、作品地杢板目、刄文國廣に比して五ノ目亂華やかなるものが多い稀に不動尊等の彫物がある。（業物）

刻銘「平安城住國道」「平安城住國路」「出羽大掾藤原國路」「出羽大掾藤原來國路」「出羽大掾十一辻」「國路」

元和頃

五十九歳作

晩年銘

晩年銘

國路 國次の合作（全部國次代銘）

◇國 光 長運齋 〔高知―昭和〕

現高知市秦泉寺町に住す、昭和十一年第二回日本刀展覽會に於て無鑑査に推薦せらる。

刻銘「土佐長運齋國光」

◇國 光 法城寺 〔延寶―武藏〕 新刀 **中上作**

越前にも住す、作柄法城寺國正、貞國に似たる風。

刻銘「但州住法城寺橘國光」「武藏江戸住法城寺橘國光作」

但州住法城寺橘國光とし裏に武州於江戸作之と有る、今の言葉をかりるならば但州住は本籍であり、武州江戸は現住所である。なほ「武州於江戸作之」と添記ない場合でも但馬にて打つたとは云へない、結局但州住はその生國を現はしたものである。

◇國 重 三郎兵衛尉 〔慶長―備中〕 新刀 **上作**

國重貳代目、大月三郎兵衛尉と稱す、初代に比して刄文銚つき大亂華やかになる、初代は左兵衛尉國重と稱し古刀期である、作風備前傳に近いものではあるが子の三郎兵衛尉に至つてはむしろ相州傳に似たものになつてゐる。

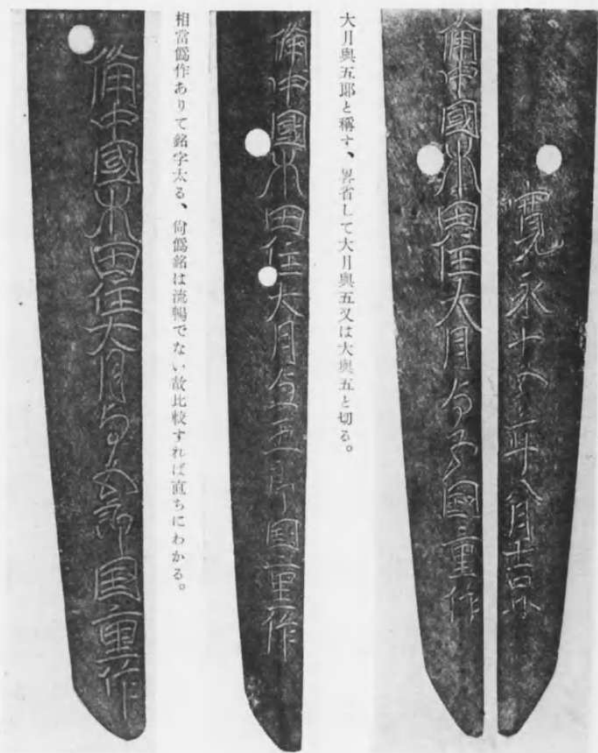
刻銘「備中水田住大月三郎兵衛尉國重」

裏銘「主地屋長兵衛尉」は「所持の主地屋長兵衛尉」にして國重の切りし銘、所持者名の添記は註文主の希望に因るものであらうが總じてこれあるものに劣れるものはない様である。

◇國重 大與五 〔寛永―備中〕 新刀 上作

大月與五郎と稱し、又大月與五、大與五と畧稱す、三郎兵衛嫡子にして國重三代目を繼ぐ、青江爲次の末流と云ふ、水田派中第一位の刀匠である、作柄大與五に至つて大亂荒錵付、棟燒の多くある所謂水田派相傳の作品が生れた。(良業物)

刻銘「備中國水田住大與五國重作」「備中國水田住大月與五郎國重作」「備中國水田住國重作」「大月與五郎國重作」

大月與五郎と稱す、畧省して大月與五又は大與五と切る。

相當僞作ありて銘字太る、尙僞銘は流暢でない故比較すれば直ちにわかる。

大與五國重にも「備中國水田住國重作」と俗名のないものがある。

五ノ目大亂荒沸つき華やかにして薩摩新刀の如く特徴としては棟燒があることであらう、この棟燒は刀が曲らない樣意をそゝぎたるものならんか。（類似工 勝兵衛國重、市藏國重、その他水田國重、砦部爲家）

亂刃

◇國 重 勝兵衛　〔寛文―備中〕　新刀 **中上作**

國重四代目、大與五國重子、市藏國重の聟と云ふ、作風他の國重同樣、併し勝兵衛の俗名入りの作品を見ない。（業物）

刻銘「備中國水田住國重」

◇國 重 市藏　〔正保―備中〕　新刀 **上作**

大與五國重の弟にて初め市藏後八郎右衛門と稱す、併し市藏俗名入りの作品は有れども、八郎右衛門は見ない、江戸にても作り後山城大掾を受領すと云ふ、市藏銘字に比して大いに異る、貳代山城大掾と共に江戸水田と稱せらる、作柄殆んど大與五國重同樣である。（業物）

刻銘「備中國水田住大月市藏國重」「山城大掾源國重」

初期銘

砦部爲家とこの國重との合作がある、爲家參照。

單に備中國水田國重と切るものは銘字に依つてその作者が判別される、たとへば次頁に揭げた國重は市藏國重であるなど ゝ。

◇國　重　山城大掾　〔貞享―武藏〕　新刀　**中上作**

山城大掾武代目、大月傳七郎と號す、世にこれを江戸水田と云ふ、作州津山にても造る、作品直刄尋常なるものが多い。

刻銘「山城大掾源國重」

◇國　重　市兵衛尉　〔寛永―備中〕　新刀　**中上作**

三郎兵衛國重門、市兵衛と號す、大與五その他に似たる作風、銘にある「水田住同名市兵衛尉」は面白い、これに因つて見るに水田を姓に用ひしか。

刻銘「備中國英賀郡水田住同名市兵衛尉國重作」

◇國　重　江戸左兵衛　〔明暦―武藏〕　新刀　**中上作**

三郎兵衛國重弟子、元備中住後江戸に往き國光と改むと云ふ。

刻銘「備中國水田國重」「武蔵住水田國光」

◇國　重　茂右衛門　〔延寶―備中〕　新刀　**中上作**

茂右衛門の俗名入りによいものがある。

刻銘「備中國水田茂右衛門尉國重」「備前國山住國重」

◇國　重　與五右衛門　〔延寶―備中〕　新刀　**中上作**

備後福山、阿州等にても作ると云ふ、俗名入りに優れたるものが有る、晩年の作品と思はれるものに仕入れ作を見るが勿論それには俗名がない、ちなみに水田一派の隆盛は寛永から寛文までゝあらう。

刻銘「備中國水田住大月與五右衛門國重」

國重は同名多きために俗名(個人名)入りが多い、恰かも古刀期の末備前を思しむるものがある。同時代に同族にして同名が何人も出来たと云ふことは特殊な事柄で色々の意味に解せられる、例へば集團生活のものが仕事激増の波に乘つて個々に獨立し、各地に進出した場合などを考へ得る。

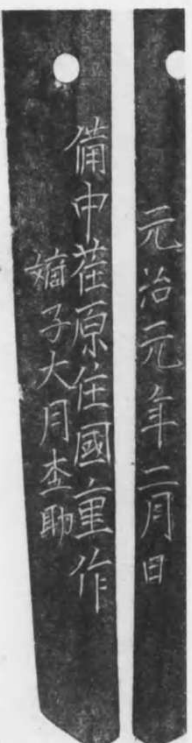
◇國重 鬼神丸 〔天和―攝津〕 新刀 **中上作**

備中水田派、長兵衛と云ふ、後中河内國助の弟子に入り池田に住す、江戸、奥州其の他各地にて造る。(業物)

刻銘「池田鬼神丸國重」「攝州住國重」

◇國重 荏原住 〔元治―備中〕 新々刀 **中作**

古水田國重の續きであらう、嫡子姓大月とあるから確かと思はれる。

刻銘「備中荏原住國重作」

◇國重 宮崎 〔文久―出羽〕 新々刀 中上作

刻銘「羽州矢嶋臣宮崎國重」

◇國廣 信濃守 〔慶長―山城〕 新刀 最上作

日向飫肥の刀匠國昌の子、國廣は伊東家の武士と云はれるが、父同様刀工として仕へ純然たる武士ではない様である、天正五年伊東家沒落後京都へ上つたらしい、埋忠明壽師事もその頃ならんか、信濃守受領は天正十八年頃と思はれる、(この年に野州足利學校打の刀がある)そして京都定住は慶長四年の頃であらう、慶長十九年八十四歳にて沒す、作品日州打は五ノ目亂相州廣正の如く、晩年打は濤亂刄砂流銚崩れを交へた作風、彫物あり圖柄は達磨、不動、伊駄天劍卷龍等雄壯なるものが多い、勿論この彫物は信仰から來たものである、國廣長命にして銘振多様なる爲め貳代、四代說を生じた様である。(大業物)

刻銘「日州古屋住國廣作」「國廣」「信濃守國廣」「洛陽一條住國廣」「信濃守藤原國廣」「洛陽一條堀川住藤原國廣造」

作品平造り脇差にして、地杢、刄五ノ目亂、末相州を見るの感がある、これは勿論天正頃の國廣古刀期に於ける作風である。

この日州古屋打に比較的豪放な彫物を認める。

五十六歳 初期作

慶長七八年頃

慶長七八年頃

慶長十二年頃か

慶長十四年頃か

七十九歳作

八十一歳作

五ノ目亂砂流交りは古作相州傳を寫したことは確かであるが、多分の相違を見せてゐることも爭はれない、國廣獨自の相州傳と云ふべきものである、古作はかくの如く砂流、沸崩れ等の現はれ尠いものである。（類似工　堀川國安、堀川國路、その他一門）

五ノ目亂

◇國廣 大阪 〔貞享―攝津〕 新刀 中上作

新刀辨疑押形に自信濃守四代目とあるも眞に國廣の系統なりや疑問である、想像ではあるが大阪仕入もの師の作であらう。

刻銘「自信濃守四代目國廣」

◇國廣 佐賀 〔正保―肥前〕 新刀 中上作

橋本六郎左衞門と號す、廣貞子、作品父の如くである。（業物）

刻銘「肥前住藤原國廣」「肥前佐賀住藤原國廣」

この肥前國廣は堀川國廣とは何等關係なきことは勿論であるが「肥前佐賀住」を摺落したるものを堀川國廣と稱してゐる場合がある、誠に笑止の限りである。

◇國平 攝州 〔延寶―攝津〕 新刀 中上作

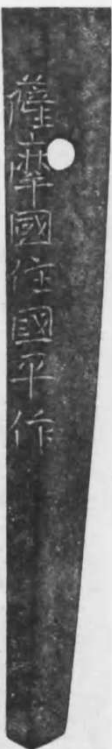
河崎作兵衞と云ひ、國義父、井上眞改門にして後日向飫肥に移る。（業物）

刻銘「藤原國平」「攝津住藤原國平」

◇國平 薩摩 〔正德―薩摩〕 新刀 上作

奥次郎左衞門と云ひ初銘忠金、叔父忠清弟子となる、後惣左衞門正房の門に入り惣兵衞國平と改銘、作刀身巾廣く、五ノ目亂荒錵つき華やか、地錵またつく。

刻銘「薩摩國住國平作」「薩摩國住人國平」「奥太郎藤原國平」

「薩摩國住國平」の「薩」はウソ字の樣に思はれる、古來刀工は鑢使ひの關係上その他で勝手な字を切ることが多い。

◇**國平** 加州 〔正德—加賀〕 新刀 **中上作**

松戸吉兵衞と稱し、陀羅尼一派、越中則重の作風を模す、併し單に肌物を造つたに過ぎない、同銘續くと云ふも作品を見ない。

刻銘「藤原國平」「以則重傳加州住國平造之」

◇**國英** 河内守 〔延寶—出雲〕 新刀 **中上作**

松江の刀工、攝津大阪より出でたるならんか、古今鍛冶備考に「銘八分の如く切なり」と、八分は篆隷の中間を往く書体にして異風の銘字である。

刻銘「河内守源國英」

◇**國秀** 肥後 〔寛政—肥後〕 新々刀 **中上作**

延壽國村末孫、水心子正秀門、後國延又は國日出と打つ、作風水心子の傳を繼承。

刻銘「東肥國日出」「謹延壽國秀造之」「延壽源國秀」「肥藩刀治延壽國秀」

◇**國秀** 米澤　新々刀 **中作**

加藤助四郎と云ひ、長運齋綱俊の父、水心子正秀門である。〔文化—羽前〕

刻銘「米澤臣藤原國秀」

◇**國盛** 堀川　新刀 **中上作**

堀川一派ならんと考へられる。〔寛永—山城〕

刻銘「堀川住國盛」

◇**國助** 河内守初代　新刀 **上作**

生國伊勢、小林姓、亀山城主關長門守の臣下、主家滅亡の後刀工を志し、京に出で堀川國廣門に入る、法名叟眼と云ふ、作品地小杢目、刃文銚付の五ノ目足入り、初代國貞に似る。（物業）〔寛永—攝津〕

刻銘「河内守藤原國助」「河内守國助」

「勢州神戸住國助」と云ふ刀がある、この國助の初期銘である。

合作（各自銘）

初代河内守國助と初代石見守國助との合作である、銘は兩者各自に切つてゐる、これより後に至つて石見守が河内守に接近した銘を切つてゐることは非常に面白い。（石見守初代國助の部參照）これを思ふとき周圍の環境に同化されると云ふが、銘字の場合に於ては此の環境が最著しい影響を及ぼす事を知る。

◇國　助　河内守貳代　〔萬治―攝津〕　新刀　上作

初代參代の間に介在するを以て世に中河内と稱せらる、法名源佐、又此工丁子刄を得意とする故新刀一文字とも云ふ、拳形丁子とて拳の如き丁子刄、但し元直燒出、鋩子小丸下り、是等はすべて大阪新刀の特徴を具備す、世上河内守作品の多くはこの貳代國助である。（業物）

刻銘「河内守藤原國助」「河内守國助」「小林國助」

德川幕府の帶刀禁止令により（寛文八年三月十五日町人帶刀禁止の令、同年五月四日猿樂等帶刀禁止の令、天和三年十二月猿樂、市人帶刀禁止の令、貞享四年六月、市人帶刀の禁令等）澤山の刀工が一度に失業したであらうことを想像する、又刀工名をその儘受繼いで居て、刄物、農具等の一般鍛冶に轉向したものも尠くなかつたと思ふ。
これ等は播隨院長兵衞等一件以來遊俠の徒橫行殺傷の弊害を取締る爲め發したものであらう。

拳形丁子と云へるは刄の谷が拳骨の如き型をなせるためであり、河内守國助一派獨特の刄文である。（類似工　肥後守國康、大和守吉道、一竿子忠綱）

拳形丁子

◇**國　助** 河内守參代　〔天和―攝津〕　新刀　**中上作**

小林六之亟と稱す、泰平と町人等の帶刀禁止令ありたるためか作品尠い。（業物）

刻銘「河内守國助」

◇**國　助** 石見守初代　〔萬治―攝津〕　新刀　**中上作**

小林源之亟と云ひ、初代河内守國助弟、國廣門、後伊勢神戸へ移る、作風初代河内守に似る。（業物）

刻銘「石見大掾藤原國助作」「石見守藤原國助」

銘字初代河内守國助に似る。

◇**國　助** 石見守貳代　〔貞享―攝津〕　新刀　**中作**

小林市之亟、豊後又は江戸にても造る、但し作品は尠い。

刻銘「石見守藤原國助」

＊**國　輝**＝陸奥守輝政參照

＊**國　貞**＝井上眞改參照

＊**國　道**＝出羽大掾國路參照

＊**國　光**＝武藏守國次參照

＊**國　光**＝江戸左兵衛國重參照

＊**國日出**＝肥後國秀參照

◇**果** 柴田　〔昭和―秋田〕

柴田政太郎、現在秋田馬音内町に居住、幼時より刀劍は趣味を以てこれを鍛ふ、日本刀展覽會に於て審査員を務め總理大臣賞を得、更に國工の稱號を授けらる、作品大亂大板目、繁慶に彷彿たるものを多く造る。

刻銘「果作」

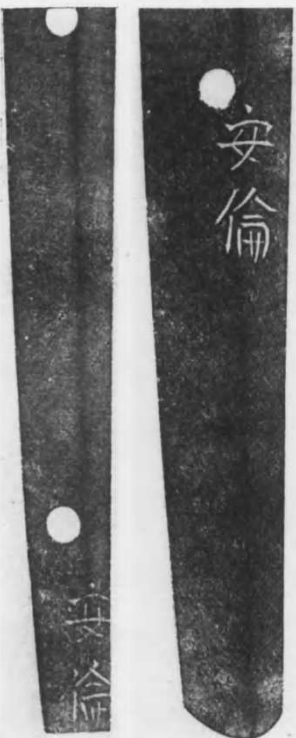
◇邦　彦　竹中　〔天保―備後〕　新々刀　中作

竹中一介と云ふ、始め國光とも打、壽幸弟子、後阿部侯に仕へ邦彦と改む。

刻銘「竹中邦彥」

◇安　倫　仙臺初代　〔明暦―陸前〕　新刀　上作

廿目五左衛門と稱す、父倫祐承應三年上京して大和守安定門に入る、翌年急死、依而明暦二年父の如く安定弟子となり、歸國後安倫と改む、父も安倫と稱すと云へど作品見えない、故に本工を以て初代となす、伊達綱宗公鍛錬の御相手をなせるも此工ならん、作風大和安定傳繼承。（業物）

刻銘「安倫」「藤原安倫」

◇安　倫　仙臺住貳代　〔正德―陸前〕　新刀　中上作

、廿目仲兵衛と云ひ、安倫貳代目である。（業物）

刻銘「仙臺住安倫」

◇安　倚　播州　〔文化―播磨〕　新々刀　中作

壽格門、大阪にも住す。

刻銘「播州住安倚」

◇安　利　武州住　〔寛文―武藏〕　新刀　中上作

安俊とも云ふ、大和守安定門。

刻銘「武州住安利」

◇安　周　波平　〔寶永―薩摩〕　新刀　中上作

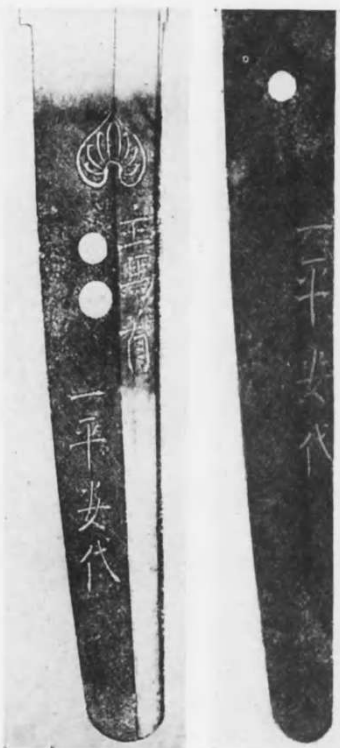
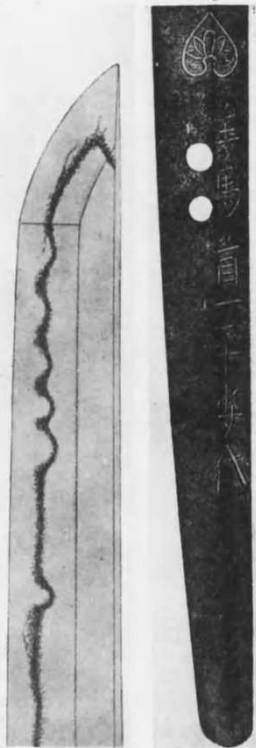
橋口四郎左衛門と稱す、作品身巾有り直刄銚深く荒いものが多い。

刻銘「波平安周」

◇安代 一平 〔享保—薩摩〕 新刀 上々作

一平安貞子、玉置小市と云ふ、大和守安行門に入りて修業す、享保六年正月主水正正清と共に江戸へ出、將軍吉宗公の佩刀を鍛へ其功に依り一葉葵を切る事を許さる、歸途京に上りて主馬首受領、享保十三年永眠、年四十九、作品一見肥前刀の如き刄文なるも之に荒錵、地沸つき華やか、地板目肌澄む。この時代鍛刀界は疲弊してゐた、享保五年幕府から全國刀匠調査と云ふ様なものがあつたが享保六年の正清、安代等召致の前提であつたらう。(大業物)

刻銘「主馬首一平安代」葵紋を一葉切る 「一平安代」

初期銘

直小五ノ目

直小亂莵錵付深い、主水正正清に比して小模様である。(類似工 波平安明、波平一門、主水正正清、伯耆守正幸、大和守元平、信國重包、長曾禰興正)

◇安吉 藤太 〔延寶—武藏〕 新刀 中上作

江戸住、大村加卜門、作風は華かでないが切味はよい。

刻銘「藤太安吉」

◇安常 波平 〔寶暦—薩摩〕 新刀 中作

刻銘「波平安常」

◇安永 武州住 〔寛文—武藏〕 新刀 中上作

大和守安定門、作風銘振り共に安定に似る。

刻銘「武州住安永」

◇安直 大和守　〔寛文―武藏〕　新刀 中上作

大和守安定との合作がある、貳代目安定同人ならんか。

刻銘「大和守安直」

◇安村 一平　〔天明―薩摩〕　新々刀 中上作

刻銘「波平安村」

◇安國 武藏太郎初代　〔享保―武藏〕　新刀 上作

下原一派の流れ、大村加卜門、江戸麻布に住すと云ふ、武藏太郎の名がよい爲めか一部に珍重せられる、作品身巾相當、大亂錵崩れ烈しきものが多い、貳十五枚甲伏作とあるのは鍛錬の組織を記したものである。

刻銘「武藏太郎安國」「以南蠻鐵武藏太郎安國鍛」

◇安國 武藏太郎　〔元文―武藏〕　新刀 中上作

初め安英、初代と混合、單に武藏太郎にて名に知られる、初代安國に似たる出來、又丁子刃も造る。

刻銘「武藏太郎安國」「武藏太郎安國作之」「武州住安英」

◇安輝 大道 〔寛永—丹波〕 新刀 中上作

本美濃國峯山住、室屋關の末と云ふ。

刻銘「丹州住大道藤原安輝」「大道三河守藤原安輝」

◇安明 波平 〔天明—薩摩〕 新々刀 中上作

新刀波平一派、安元子、橋口伊兵衛と稱し、平覺と號す、作品身巾廣く直莚鋩が多い。

刻銘「波平安明」

◇安在 一平 〔延享—薩摩〕 新刀 中上作

・薩州清房子、義清とも銘すと云ふ。

刻銘「一平藤原安在」

◇安定 大和守初代 〔慶安—武藏〕 新刀 上作

本國越前、後江戸神田白銀町に住むと云ふ、飛田姓、通稱宗兵衛、初代康繼門と云ふ、大業物を以て名高い、その一刀に「天下開闢以來五ツ胴落永久六十四歳云々」の試銘金象眼がある、山田淺右衛門選では良業物なるも、おそらく切味に於ては隨一の作者であらう、作刀反淺く、地小杢、刄文湾直、湾亂。（良業物）

刻銘「大和守安定」「武藏國住大和守安定」「飛田大和守安定」

「兩車落」とは腰骨邊を截斷せるを云ふのであつて、これは多くの場合仕置になつた罪人を刄味の試しに用ふる、今考へると異樣な感をあたへるかも知れないが當時に在りては普通のことであつたらう。

「大和守安定、二代目大和守安定銘之」の脇差を見るに及び安定貳代目の存することが判明した、銘字もよく初代に似てその判別が容易ではない、こゝに分ちたる初貳代は前述の脇差を基礎として定めたものでこれに依つて安定を鑑るならば大部分は初代の作品なることを知るのである。此の事は又一般時代の影響と見ることが出來る、例へば初代貳代の國助の作品が在つて三代の作が殆んどない、又康繼初二三四代が在つて五代が尠い、この尠いといふ時代が何れも貞享以降に限られてゐる事を知るべきである。

◇安 定 大和守貳代　〔延寶—武藏〕　新刀 **中上作**

「大和守安定、二代目大和守安定銘之」の一刀出現により安定貳代説確保せらる、猶安定男に大和守安次ありと云ふ、安定沒後この安次が安定を襲名せりと見るも一説と思ふ。(業物)

刻銘「大和守安定」

◇安 貞 一平　〔天和—薩摩〕　新刀 **中上作**

清貞子、中村一平と稱し、伊豆守正房門、山城守を受領す。(業物)

刻銘「一平藤原安貞」「薩州給黎郡住中村一平藤原安貞作」

◇安 行 波平　〔寛文—薩摩〕　新刀 **中上作**

初代正房門、橋口三郎兵衛と稱す。(業物)

刻銘「大和守波平安行」

◇安 行 波平　〔享和—薩摩〕　新々刀 **中作**

波平安常子、橋口拗之丞と稱す。

刻銘「波平安行」

＊安　英＝貳代武藏太郎安國參照

◇康　綱　紀伊　〔寛文―紀伊〕　新刀　中作

備中守康廣門、阪陽にても造る。

刻銘「紀伊國康綱」「紀伊國橘康綱」

◇康　繼　初代　〔慶長―武藏〕　新刀　上々作

越前下坂住、廣長子にて、下坂市左衞門と稱す、肥後大掾受領、初め越前國下坂と銘す、結城秀康に抱へらる、慶長八年頃大御所より葵紋と康の字を贈られ康繼と改銘す、爾來越前又は江戸にあり隔年勤務せりと云ふ、古作模造に長ず、作刀淺き湾刃、地杢目立つ稀に皆燒をも見る、彫物は喜内の手に成るものであらう、併し初めは康繼自身も彫つたかも知れない、德川家にて大阪の陣後その功勞者の賞として刀劍を頒ち與ふ、現在舊大名の所藏品中、正宗、貞宗、建武信國等の無銘刀に康繼の作と思はれるものを多く見る、德川家政策の一端を窺ふ事が出來る。（良業物）

刻銘「以南蠻鐵於武州江戸越前康繼」「越前國住康繼」「於武州江戸越前康繼」「越前國下坂」「肥後大掾藤原下坂」　葵紋はあるものもなきものもある

「坪川平左衞門」これは所持主の名ならん、刀身に見る額内不動尊は喜内の彫刻である。

康繼の襲名は各代整然と銘字に依つて判別出來得る、その最も顯著なるものは康繼の「繼」の字であつて、各代この銘字体が相違してゐることに注目して戴きたい。

樋の内に浮彫は初代康繼得意のものでこの程度のものは康繼自身も彫りしならんと思はれるが是も喜内の彫か。

濤刄、足入り、砂流も交りたる有り、地鐵は杢目肌現れ、古作松皮肌を偲ばしむ。（類似工　康繼各代、越前重高その他越前刀工、堀川國廣）平造脇差にて身巾廣く反あり。この造込みは慶長頃から寛永頃まで即ち新刀初期に見る時代的特徴である。

◇康繼　武代　〔寛永―武藏〕　新刀　上作

通稱市之亟、初代康繼嫡子、晩年入道して康悦と云ふ、壯年の頃は遊俠の徒に交りたるものと見え一話一言に「俠者下坂市之亟は刀鍛冶大六方者なれども何事もなく死す」とある、作品淺き濤刄地杢目立つもの多い。（良業物）

刻銘「越前康繼」「康繼入道作」「以南蠻鐵於武州江戸越前康繼」葵紋が多い

◇康繼 參代 〔寛文―武藏〕 新刀 上作

二代嫡子にして右馬助、後市之亟となる、此三代目迄越前、江戸隔年に移り公用を務たと云ふが作品の殆んどが「於武州江戸作之」である、作風初弐代に似たるも地鐵細かき杢目、刄文華やかになる。（業物）

刻銘「康繼以南蠻鐵於武州江戸作之」葵紋有るもの多い

喜内彫

◇**康 繼** 四代 〔寛文―越前〕 新刀 **中上作**

貳代康繼弟、江戸定住と云ふが作品は十本の内九本迄「於越前作之」とあることを考へねばならぬ，又自ら三代康繼と稱するが越前三代の意にて肯定し得る事柄である、蓋し本工は三代康繼の叔父なるゆへ，在來の如くこれを四代とするならば三代康繼早逝の後を受繼いだと鑑ねばならない。

刻銘「康繼於越前作之」 葵紋を彫る

◇**康 繼** 五代 〔享保―武藏〕 新刀 **中作**

下坂市之亟、江戸に定住であらう，造刀技術の点から見ても鍛刀専門ではなかつた様である。

刻銘「康繼」 葵紋を彫る

◇**康 繼** 六代 〔寶暦―武藏〕 新刀 **中作**

市之亟，初め逸八元繼と云ふ，作品尠く，五代康繼同様の出來である。

刻銘「康繼」 葵紋を切る

◇**康 繼** 七代 〔寛政―武藏〕 新々刀 **中作**

江戸住，初め逸八元繼，後市之亟と改む，作品五六代康繼同様。

刻銘「康繼七代目造」 葵紋を切る

◇**康繼** 八代　〔文化—武藏〕　新々刀 **中上作**

江戸住、市之亟初め進八元繼、この代に至つて作品を比較的多く殘す、康繼の家に於ては各代「繼」の一字を區別して切つた事は廣く知られて居る所である。

刻銘「康繼」「於東都宮戸川邊八世孫康繼鍛」

◇**康永** 河内守　〔延寶—攝津〕　新刀 **中上作**

本國紀州、紀伊石堂一派、多々良長幸の師、作風備中守康廣の如く、五ノ目亂が多い又出羽にても造る。（業物）

刻銘「攝州住康永」「河内守源康永」「河内大掾源康永」

◇**康道** 大和守　〔寛文—美濃〕　新刀 **中上作**

本國美濃、尾州にも住む、賞道の一族、丁子刄もある。

刻銘「大和守源康道」

◇**康重** 下原　〔寛文—武藏〕　新刀 **中上作**

反淺きもの多く地小杢、刄中直刄は小亂、古刀康重より續くもその俤はない。（業物）

刻銘「武州下原住内記康重」

◇**康　廣** 備中守初代　〔寛文―攝津〕　新刀　**中上作**

爲康次男、富田五郎左衛門と稱す、本國紀州、又京大阪にも住む、大阪石堂の名がある、作品濤亂刄又は丁子刄。（業物）

刻銘「備中守橘康廣」「紀伊國康廣」裏中心に菊を切る

◇**康　廣** 備中守貳代　〔貞享―攝津〕　新刀　**中上作**

富田惣右衛門、初代同様の作風。

刻銘「備中守橘康廣」菊を切る

◇**泰　幸** 相模守　〔延寶―尾張〕　新刀　**中作**

本國濃州、後尾州名古屋に住す、能登守と切るものは貳代目で作品は劣い。

刻銘「相模守藤原泰幸」

◇**泰　平** 加州　〔寛延―加賀〕　新刀　**中作**

松戸七郎と云ふ、二代目勝國次男、寶暦十二年沒す。

刻銘「加州住泰平」

◇**泰　平** 加州　〔寛政―加賀〕　新々刀　**中作**

松戸七郎と稱す、文化五年六十五歳にて沒す。

刻銘「加州住泰平」

◇**保　光** 文珠　〔寛文―大和〕　新刀　**中作**

左陸奥一派ならんと思はる、錵付の丁子刄がある。

刻銘「文珠源保光」左文字に切る

左向文字に鑢目褶勝手上り（逆目）である以上左陸奥程徹底せざるも、左手利らしい。

◇靖　德　梶山　〔昭和―京京〕

廣島出身、梶山德太郎と稱し、九段日本刀鍛錬會刀工となり主事倉田百三氏監修の下に、陸海軍の軍刀に適した實用を兼ねたる作品を打つ、秀れたるは古作來國行を偲ばしむ。

刻銘「靖德」

◇靖　廣　宮口　〔昭和―東東〕

宮口正房嫡子、壽廣と稱し、笠間繁繼門、數年間九段日本刀鍛錬會刀工となりて靖廣と打つ、但し改銘に非ず以後壽廣、靖廣兩樣を使用す、又洋鐵軍刀中身の要望に應じては護國の名にて造る、龍 不動 梵字等の彫刻もなす、現巣鴨向原に鍛治場を持つ。

刻銘「宮口一貫齋壽廣」「宮口靖廣」「靖廣」

銘字に在る如くかしこくも殿下が御手づから槌入れされたもので裏の兩氏は軍人である。

全部壽廣切銘

◇正　晴　片倉　〔元治―羽前〕　新々刀　中作

刻銘「羽州米澤住片倉正晴作之」

◇正　利　肥前國　〔萬治―肥前〕　新刀　中上作

刀工總覽にも洩れてゐる程であるから作品稀である、系統は勿論不明。

刻銘「肥前國住藤原正利」

◇正利 多田

〔元治―美作〕 新々刀 **中上作**

津山藩士にて多田四郎左衛門と云ひ、細川正義弟子、重花丁子が得意である。

刻銘「作陽士多田正利」

◇正俊 越中守初代

〔元和―山城〕 新刀 **上々作**

關の兼道四男にして金道、吉道、來金道の三兄と共に文祿中上洛し西の洞院夷川に住す、越中守受領と云ふ、寛永頃まで造る、作品身巾廣く、地杢板目、刄直亂、又は濤亂、砂流、尖り刄を交へる、新刀辨疑に「正俊は平安城住藤原正俊と切りしを初代とす、後に越中守と切りし也」と說けるも世上に有る平安城正俊は別人である。（業物）

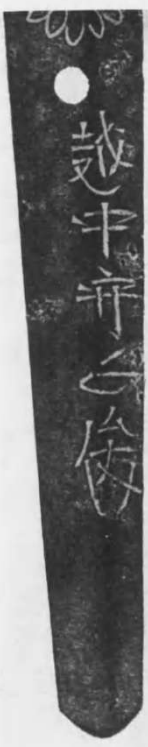
刻銘「越中守正俊」「越中守藤原正俊」

正俊は兄金道、吉道等と共に京五鍛冶に數へられ、又伊賀守金道は日本鍛冶惣匠を許されて居り當時の三品一家の隆盛を想像するに充分である。

初期銘

◇正　俊 越中守弐代　　〔寛文―山城〕　　新刀 中上作

父同様越中守を受領、菊紋を中心に必ず切る、作風砂流交りの亂刄、大体初代に似たる作風、又直刄尋常なるものもある。（業物）

刻銘「越中守正俊」菊紋を切る

◇正　俊 越中守參代　　〔天和―山城〕　　新刀 中上作

藤三郎と云ひ、父の如く菊紋を切る、四代も有れど、これは當時の伊賀守金道と同居すと云ふ、下職に轉向せし爲めならんか。

刻銘「越中守正俊」菊紋を切る

◇正　俊 平安城　　〔寛文―山城〕　　新刀 中上作

紀州石堂流にして京へ上る、古書には越中守正俊と混同されてゐるが同銘異人で何等關係はない、作品丁子刄、備中守康廣の如きもの。

刻銘「平安城武蔵住正俊」「平安城石堂右近正俊」「平安城藤原正俊」

◇正　俊 鬼晉麿　　〔文久―武藏〕　　新々刀 中上作

清麿門ならんと思はる、作風清麿、正雄に似る。

刻銘「江府住岩井鬼晉麿源正俊作之」「源正俊」

◇正　全　豊後守　〔寛文―尾張〕　新刀　中上作

本國美濃、坂倉關の流れにして、尾州名古屋に住す、又洛陽にても造る、古今鍛冶備考に「寛文元祿の間の手利也」と見え作風は伯耆守信高の如くである。

刻銘「豊後守源正全」

◇正　近　薩州　〔元文―薩摩〕　新刀　中上作

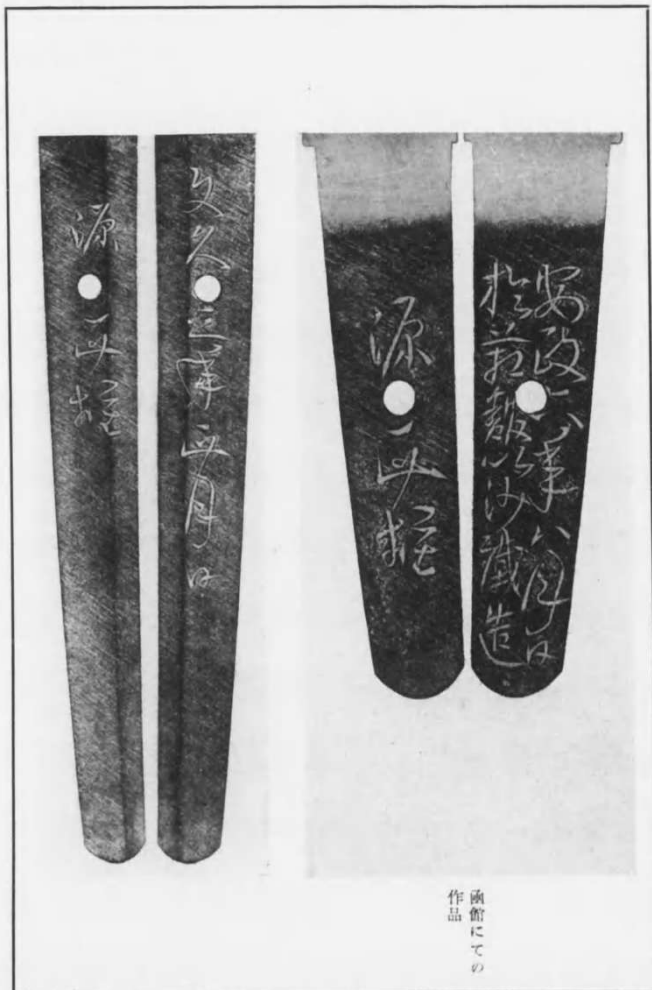
宮原源右衛門と云ひ、主水正正清子、作風正清傳を繼承、但此の代を以て刀工をやむと云ふ、父正清が隆盛を極めしは、享保年間幕府の奨勵ありしためならん、本工の襲業は需要尠かりしゆへであらう。

刻銘「薩州住藤原正近」「薩州住正近」

薩摩新刀の隆盛は享保年間幕府の奬勵と共に起り、正清、安代その中心をなす、しかし一般需要の期に非ざるためか二代とこの隆盛は纔かなかつた樣である、正近などその例と見られる。

◇正　雄　源　〔安政―武藏〕　新々刀　上作

源清麿門、鈴木次郎と云ふ、江戸下谷御徒町住、嘉永六年裏銘付作品が有る、この時既に獨立せるならん、清麿弟子中の古參の樣である、沒年は不明なるもその作品は元治二年まで見られる、作刀身巾廣く、切先延び鎬高、地板目無地風、刄文五ノ目亂足入り、金筋砂流交る、清麿死後、信秀等と共に師（清麿銘）の代作をなしたと云ふがそれらは月山貞一の僞作であつた。

刻銘「源正雄」と草書に切る

函館にての作品

◇正勝 肥後守 〔寛永―越前〕 新刀 中上作

二代正則との合作のみ見る、思ふに二代正則の弟に非ざるや。

刻銘「肥後守藤原正勝」「肥後大掾藤原正勝」

二代正則の銘ならん

◇正勝 勝村 〔慶應―常陸〕 新々刀 中上作

勝村一派の内、地鐵柾目肌の刄文直砂流が多い。

刻銘「勝村正勝」

◇正勝 勝村 〔昭和―茨城〕

正勝の續き、現水戸市袴塚町、昭和十一年第二回日本刀展覧會に總理大臣賞を受く。

刻銘「勝村常陸介源正勝」

◇正 蔭 源　〔文久―越後〕　新々刀 中作

刻銘「源正蔭造之」

◇正 吉 粟田口　〔寛政―攝津〕　新々刀 中作

粟田口忠綱の續きならんか。

刻銘「粟田口正吉」

◇正 吉 森岡　〔明治―東京〕　新々刀 中上作

本國土佐、南海太郎朝尊の孫、宮本包則及月山貞一弟子となる、田中公顯伯の援助を受く、大正九年二月三日沒す、行年四十六歲、姿優しき作品多く刄文直足入り深いもの又は逆丁子、龍の彫物もある。

刻銘「正吉作」

◇正 義 細川良助　〔享和―武藏〕　新々刀 中上作

細川主稅佐正義父、作品極めて稀れ。

刻銘「細川正義作」

◇正 義 細川主稅佐　〔天保―武藏〕　新々刀 上々作

主稅佐正義は作州津山藩士、細川良助子である、正秀門に入り初め正方後正義と改む、安政五年六月六日沒す、行年七十五歲と七十三歲との二說あれど、作品の一に安政五年七十三歲作の添銘ある故行年七十三歲が至當である、その作風二樣ありて一は丁子刄足縱横に入り重花となるもの、他は大出來にして大亂砂流交りのものである、前者を備前傳と云ひ、後者は是を相州傳と稱す。

刻銘「作陽士細川正義」「於東都作陽士細川主稅佐源正義」「作陽幕下士細川正義」「細川正方作」

澤山の目釘穴がある、これらは色々の型になつて居るが、すべて技巧的に初めから造り出されたものである、こうした作品は註文を受けて造つたと見るよりも刀工自身の興味から發した技と考へ度い。

五十五歳作

六十六歳作

正義の作品は鏨目太く鮮やかである、これは正義創始の方法で特殊の鏨を以て一本づゝ刻んだのである、これに倣って細川一門、更に月山貞一、森岡正吉等にも此の手法を見る。

七十一歳作

◇**正良** 薩州初代　〔享保―薩摩〕　新刀 **中上作**

上原十右衛門と云ひ、惣右衛門正房弟子、作品尠い。

刻銘「薩州出水住正良」

◇**正良** 薩州貳代　〔延享―薩摩〕　新刀 **中上作**

作品殆んどなく、世上見る正良は殆んど三代又は四代の作である。

刻銘「薩州住藤原正良」

◇**正良** 四代　〔享和―薩摩〕　新々刀 **中上作**

三代正良、卽ち伯耆守正幸の子、寛政元年十七歳にて正良の名を繼ぐ、作品旣にこの時初まる、作風大亂荒錵付き華やか。

刻銘「薩摩國平正良」「薩州住平正良」

◇正慶　〔元和―武藏〕　新刀　上作

作風銘振り共繁慶の如くである。

刻銘「正慶」と彫刻

◇正幸　伯耆守　〔寛政―薩摩〕　新々刀　上々作

正近門、姓伊地知、初銘正良(三代目)寶暦頃から作品あり、寛政元年伯耆守受領と共に正幸と改む、作品文化十四年に及び、文政二年八十七歳を以て沒す、刀劍鍛錬の著書あり刀工教育家として名がある、作品巾廣、大切先にて、地板目、刄文五ノ目尖り揃ひて荒錵深く入りたるもの多く地錵又つく、自作と思はれる龍、旗鉾等の大振りの彫がある。

刻銘「薩州住正良」「薩摩官工平正良」「伯耆守平朝臣正幸」

鑢目勝手上りである、この工も左が利いたと見て差支へない。

作柄正良時代は直荒錵が多く、正幸時代には五ノ目尖りたる荒錵となる。

三十八歳作

四十三歳作

六十歳作

棟からこの中心を鑑ると非常に薄肉であることが目立つ、これは後世銘を磨取られて僞造されることを防止した爲であらう。

◇正　武　結城　〔寛政―出羽〕　新々刀 中作

刻銘「於東武結城正武作之」

◇正　隆　天龍子　〔文政―攝津〕　新々刀 中作

尾崎助隆嫡子と云ふも事實は孫である、新刀銘集錄に友三郎隆繁子とある、後世の刀劍書にあやまり傳へられしと思はる、天保頃攝津に在り後京都に移る、作品冠落し多く、刄文直匂締りたるもの、優れた作は尠い。

刻銘「尾崎源吾正隆」「天龍子正隆」「尾崎長門介藤原正隆」「藤原正隆」

押形の尾崎長門守は助隆のこと、孫とも子とも二樣の說があるが事實こゝに「孫」とあるから議論の余地がない、添銘の年齢から算するに此の工は享和二年の生れである、祖父助隆五十歳の時である。

◇正　次　多門兵衛　〔萬治―備前〕　新刀 中作

多門兵衛正成子、作風横山祐定の如くである。

刻銘「東多門兵衛正次」

◇正　次　大和介　〔天保―攝津〕　新々刀 中作

刻銘「畠山大和介正次」

◇正　次　水心子　〔安政―武藏〕　新々刀　**上作**

直胤一門にして川部家を襲ひたるものか、万延元年三月十一日沒すと云ふ、作風直胤傳を繼ぎ相州備前の兩傳に通ず、義胤の彫刻も有る。

刻銘「川部北司水心子藤原正次」「水心子正次」

◇正　次　櫻井　〔昭和―東京〕

岡山宗次一派廣次門、畏くも有栖川宮の御知遇を忝うす、昭和十一年日本刀展覽會に於て推薦せらる、現代刀劍界の功勞者、作品直五ノ目足入り、匂出來にして宗次の俤を見る。

刻銘「卍正次」「相州鎌倉正次作之」

◇正　綱　弓削　〔元和―伯耆〕　新刀　**中上作**

弓削新三郎と稱す、初銘正廣、後播磨大掾を受領す。

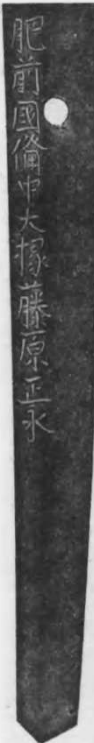
刻銘「伯耆國倉吉住藤原正綱」

◇正　直　石見守　〔寛永―備前〕　新刀　**中上作**

刻銘「石見守藤原正直」

◇正 永 備中大掾 〔貞享―肥前〕 新刀 中上作

肥前貳代正廣子、傳兵衛と云ひ初め廣永後正永と銘す、而して此の工は生涯正廣と切らない、寛文五年備中大掾を受領す、寶永元年十二月六十歳にて沒す、作風初貳代正廣の如き亂刃。（業物）

刻銘「肥前國備中大掾藤原正永」「肥前國住廣永」

◇正 宗 土佐守 〔慶長―武藏〕 新刀 中上作

刻銘「土佐守藤原正宗」

◇正 法 大和大掾 〔寛永―越前〕 新刀 中上作

貳代大和大掾正則同人ならんか。

刻銘「大和大掾正法」

◇正 則 大和大掾 〔元和―越前〕 新刀 上作

三條吉則末と云ひ本國丹後宮津、越前福井に移住す、作品平造脇差多く刃文強き濤小亂刃あり、晩年五ノ目揃ひたるもの、又は直に淺き濤交り地杢目立つ、不動、又は劍卷龍の彫物あるものを見る。（良業物）

刻銘「大和大掾藤原正則」

◇正 則 大和大掾貳代 〔寛文―越前〕 新刀 中上作

初代正則子嫡子ならん、初め正法とも銘ぜしか、肥後守正勝と合作もある。

刻銘「大和大掾藤原正則」

初期銘

◇正則 法城寺　〔寛文―武藏〕　新刀 中上作

江戸住、本國但馬、作品反淺く刄文小五ノ目足入り。

刻銘「法城寺橘正則」

◇正徳 細川　〔文久―下野〕　新々刀 中上作

細川正義三男、刄文は重花丁子、なれど作品稀れ。

刻銘「正徳」

◇正規 細川　〔慶應―下野〕　新々刀 中作

細川義規子、父と合作を多く造る。

刻銘「野州住細川正規作」

◇正房 伊豆守　〔寛永―薩摩〕　新刀 上作

備後守氏房次男にして初銘氏房、兵右衞門と云ふ、鹿兒島住、慶安二年水眠、作刀身巾あり、その小亂大亂は飛彈守氏房に似る。(業物)

刻銘「薩州住藤原正房」「薩摩國鹿兒島住伊豆守藤原正房」

◇正房 貳代　〔萬治―薩摩〕　新刀 中上作

伊豆守正房子、孝兵衞と云ふ。(業物)

刻銘「薩州住正房」「藤原正房」

◇正房 惣左衛門　〔寶永―薩摩〕　新刀 上作

俵右衛門氏房子、正冬又は正商とも銘す、正房の名を繼ぎ三代目となる、前後正房代々あれど作品稀れにして、世上多くはこの正房である、弟子正清と共にこの享保年間に榮ゆ、其の作品地鐵無地風に鍊れ、刄文大亂荒錵交り烈しい出來。

刻銘「薩州住藤原正房」「薩陽城府滑川住丸田惣左衛門藤原正房」

享保四年作

◇正房 後代 〔文化—薩摩〕 新々刀 **中作**

正房の作こゝに又再び現はる。

刻銘「薩州住藤原正房」

◇正照 法城寺初代 〔天和—武藏〕 新刀 **中上作**

法城寺正弘門、後出羽に住む、作風師正弘、貞國等に似る。（業物）

刻銘「法城寺越前守橘正照」「越前守法城寺橘正照」

◇正照 法城寺弐代 〔元祿—羽後〕 新刀 **中上作**

本國羽後秋田、上京して伊賀守金道の門となり菊を切る、初代は大銘に弐代は小銘。

刻銘「越前守橘正照」

◇正明 城慶子 〔慶應—武藏〕 新々刀 **上作**

竹村恒次郎、作州津山藩士にして細川正義高弟である、江戸深川住、作風師の如く重花丁子を最も得意とする、正明を正日明とも切る。

刻銘「城慶子正明精鍛之」「城慶子正明鍛之試鹿角及甲札與棒」「城慶子正日月」

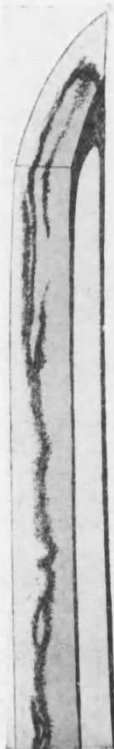
◇正　清　主水正　〔享保―薩摩〕　新刀　上々作

惣左衛門正房弟子、宮川清右衛門後覺太夫と云ふ、初銘清盈、享保年間諸國の刀工褒ふるも薩摩鍛冶に於てはこの頃幾分の榮へを見せた、卽ち享保六年正月正清及同國の一平安代が拔擢せられ、江戸出府將軍吉宗公の佩刀を鍛ふ、其の功により一葉葵を切る事を許さる、享保十五年六月六日永眠年六十六、作品身巾廣く、地鐵無地風に板目、刄文五ノ目亂肥前刀に似たる所あるも雑荒く出來烈しき處を特徴とする。（大業物）

刻銘「清盈」「薩州住藤原正淸」「主水正藤原正淸」「主水正正淸」「宮原主水正藤原正淸」享保六年以後は葵一葉を切る

享保六年以前　享保七八年頃

享保十二年頃　享保十三年頃　晩年銘　晩年銘

亂刃

大亂砂流交り二重刃の如くなりて芋のつるの如き形狀をなす、これは正清に限らず薩摩新刀の特徴である。（類似工　薩摩新刀及新々刀）

◇正　行　笠間　〔慶應―常陸〕　新々刀　**中上作**

細川源正行（忠義）と關係あらんか、源正行（清麿）とは關係ない。

刻銘「常陽笠間士高木源正行」

◇正　行　田村　〔安政―備後〕　新々刀　**中作**

刻銘「備後住田村正行」

◇正　行　高田　〔貞享―豊後〕　新刀　**中作**

刻銘「豊州高田住藤原正行」

◇正　道　三品　〔嘉永―伊豫〕　新々刀　**中作**

刻銘「三品源正道作」

◇正　光　藝州　〔弘化―安藝〕　新々刀　**中作**

尾張元長門ならんと思はる、弘化元年は四十三歳に相當す。

刻銘「藝州石橋出雲大掾正光」「藝州山縣移原住正光」

◇正　滿　土州　〔元治―土佐〕　新々刀　**中作**

刻銘「土州住正滿」

◇正　重　千子　〔寛永―伊勢〕　新刀　**中上作**

古刀千子村正、正重の系統を引く、作風初期に於て其の俤あるも晩年には漸次それが失はれ、時代的要求の作風に變る。

刻銘「勢州住千子正重」

◇正成 多門兵衛　〔寛永―備前〕　新刀 **中上作**

備前岡山に住し、横山祐定と對立す。

刻銘「東多門兵衛藤原正成作之」「備前岡山住東多門兵衛藤原正成」

◇正繁 手柄山　〔寛政―磐城〕　新々刀 **上々作**

通稱朝七、號丹霞齋、前銘氏繁（四代目に當る）後正繁と成る、白河樂翁公の抱鍛冶にして江戸に來り住む、享和三年四月五日甲斐守受領、晩年樂翁公より神妙の二字を賜り快心の作には是を切ると云ふ、作刀身巾廣く濤亂刄は助廣、正秀、綱俊の如く、而も其等に比して烈しき尖刄を交へたるもの、或は中直刄優しき出來のものもある、刀身にまゝ龍の自作彫を見る。

刻銘「奥州白河臣手柄山正繁」「手柄山氏繁」「手柄山甲斐守正繁」

寛政年間

寛政年間

龍の彫物あり中心に曰く「ほりさくおなじ」

神妙の二字を添へたるは傑作品多しと云へどこれは晩年の場合に於てゞある、併し此頃は總じて寛政頃の壯年期より幾分劣るを免れ得ない。

◇正廣 肥前初代　〔寛永―肥前〕　新刀 上作

吉信子にして通稱左傳次郎、後彌七兵衛、初銘正永、寛永二年十一月正廣と改銘、同五年河内大掾を受領すと云ふ、寛文五年二月五日行年五十九にて沒す、橋本々家の近江大掾忠廣の助手となつて盡くせりと、作風亂刄華やかなるもの、直刄尋常なるもの、彫物劍卷龍有り多くは宗長の作である。（業物）

刻銘「肥前國正永」「肥前國河内大掾藤原正廣」「肥前國佐賀住正廣」「河内大掾藤原正廣」

父吉信寛永十年沒すと云ふ、この作正廣としては初期作であらう。

二十六歳作

寛永五年に河内大掾受領と云へど、これより後寛永十二年、十三年、十五年の年號入りは何れも「佐賀住正廣」にて河内大掾の添銘がない、寛永十九年に初めて河内大掾銘を見る、この間に受領したるを知る、記錄には往々事實と一致しないことあるを思はしめる。

寛永十四年頃

◇正 廣 河内守　〔寛文—肥前〕　新刀 **上作**

初代正廣子、初銘正永、武藏大掾、武藏守受領更に寛文五年河内守に轉じ正廣と改む、元祿十三年八月六日行年七十三にて逝く、作柄初代正廣同様。

刻銘「肥前住武藏守藤原正永」「肥前國河内守藤原正廣」「肥前國河内守藤氏正廣」

初期銘

寛文五年以降

◇正 廣 肥前四代　〔寶永—肥前〕　新刀 **中上作**

本作は四代目に相當する、三代目は終始正永にて正廣とは切らない、享保十八年五月六十一歳にて沒す。

刻銘「肥前國河内大掾藤原正廣」

◇正 廣 肥前五代　〔寶暦—肥前〕　新刀 **中作**

佐傳次郎と云ひ初銘正永、寛延三年正月受領して正廣と改む、明和五年五月廿五日沒す。

刻銘「肥前國河内守正廣」

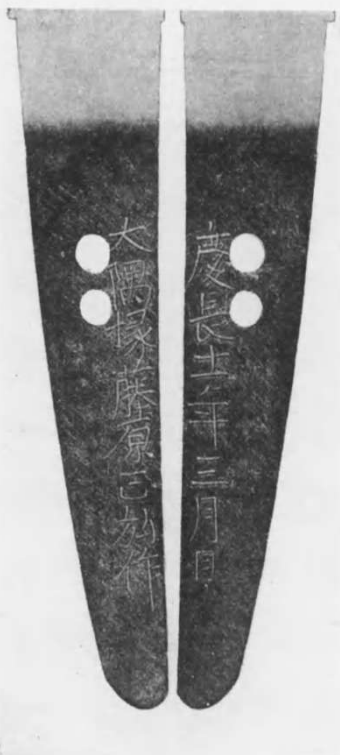
◇正 廣 肥前六代　〔享和—肥前〕　新々刀 **中上作**

友之進と云ふ、幼にして父を失ひ、六代忠吉門に入る、享和二年四十五歳に相當、作品八代忠吉の如き直刃、地小杢強い。

刻銘「肥前國正廣」

◇正　弘 大隅掾　〔慶長―山城〕　新刀 上々作

生國日向古屋、國廣甥又門人とも云ふ、大隅掾に任ぜられ後大隅守受領、作品地鐵粒立ち潤ありて所謂堀川地鐵をなす、刄文五ノ目濤亂、尖り刄を交へたるもあり、又刄沈むものもある。

刻銘「大隅掾藤原正弘作」「藤原正弘」「大隅守藤原正弘」「正弘」

一説堀川國廣の代作代銘をしたと云ふ、これは本工が非常に國廣に似た銘振なるために想像せられた説である、銘字のみならず中心、地鐵、刄文悉く國廣と似てゐる、一般に同時代の作品は國を異にするも互に共通点あるを常とする、其が特に「同國」であり「師弟關係」である場合總ての刀工が尚一層このおきてに支配される事は云ふまでもない。

埋忠明壽の手になつたと思はれる彫物を見受ける。

◇正　弘 太田　〔昭和―靜岡〕

笠間繁繼、宮口靖廣等の指導を受く、日本刀展覽會に作刀を出品優等賞を受く、現靜岡縣引佐郡奥山村在住。

刻銘「遠州住太田正弘作」

◇正　弘　法城寺　〔寛文—武藏〕　新刀　上作

本國但馬、後江戸住、通稱瀧川三郎太夫、作品江戸法城寺一門の首位にあり、長曾禰虎徹と變る處なきを以て近年殊に鑑賞厚い。（業物）

刻銘「近江守法城寺橘正弘」

寛文の作　寛文の作　延寶以降作

直小五ノ目

刄文五ノ目足入り、地鐵小杢目、反淺し、この作風は寛文頃の新刀に多い。（類似工　津田助直、越後守包貞、長曾禰興里、法城寺貞國、法城寺國正、上總介兼重）

鋩子の小丸下りは大阪新刀の特徴の如く思はれるが、むしろこれは寛文頃の新刀の鋩子であつて大阪新刀には限らない、なぜ鋩子を深く燒いたか、これはこの頃の劔法が切る以外に突と云ふ方法をとつたためであつて、反の淺いと云ふのもこの突技に重点が置かれた爲めに他ならない。

◇正　弘　法城寺　〔貞享—武藏〕　新刀　中上作

二代目の但馬守正弘なる作を一刀も見ない、或は但馬守國正の誤認ではあるまいか。

刻銘「但馬守法城寺正弘」

◇正　弘　井上　〔昭和—石川〕

現金澤市東馬場町、第二回日本刀展覽會に總裁名譽賞を受く。

刻銘「北都住井上正弘謹作」

◇正　弘　闘本　〔昭和—福島〕

現福島縣河沼郡笈川村、第二回日本刀展覽會に總裁名譽賞を受く。

刻銘「會津住闘本正弘作」

◇正 秀 水心子

〔文化―武藏〕　新々刀 最上作

羽前山形の藩士、川部儀八郎藤原正秀と云ふ、寛延三年生る、初銘鈴木宅英又は英國、師は下原吉英、安永三年正秀に改む、後江戸にて秋元家に仕ふ、浜町に住せるにより浜町老人などゝ自稱す、正日出、正日天等ともぢりたるも改名に非ず、文政元年天秀と改め同八年九月廿七日沒す、行年七十六歳、作品五十余年に渉る、壯年の頃は大阪新刀の如く濤亂刄又は直亂の大出來なるもの多かりしも、晩年に至りて小丁子匂締り、地鐵無地風のものを造る、刀身に自作彫もあれど、多くは本莊義胤の手になる額內劍卷龍を見る。

刻銘「水心子正秀」「秋元家臣川部儀八郎藤原正秀」「川部儀八郎藤原正秀作之」「水心子正日出」「正秀作」「天秀」

三十六歳作

當時の鑑定家鎌田魚妙が津田助廣を新刀第一の作者と賞揚したことは時代の風潮よりして尤もと思ふ、ゆへに正秀の初期作品はこの濤亂刄に懸命であつた、その他を上げれば尾崎助隆、市毛德鄰、大慶直胤、加藤綱英、綱俊、手柄山正繁等がある、此の傾向は何れも一つの時代的流行に基因すると見られる。

刀に刻印を打つは正秀が創始にてこれは改作豫防が動機であらう。

目釘穴は一ツを原則とする、なれど正秀には古刀の後天的に目釘穴の多くなりたるを模したるものがある。

四十八歳作

五十三歳作

正日出とあるも正秀にて改銘には非ず。

五十八歳作

六十三歳作

「水神子正日天」と切っても水心子正秀たるに變りはない、隨分洒落たものである。

七十五歳作

正秀の刀をかく並べると刻印も色々ある、これは破損して修理したり、新作したりするためである、これに關して拙著江戸三作之研究に次の如く述べた。「刻印は日天の二字を獨鈷の如く圖案化し中心先に打たり、正秀最初の刻印としては寛政十、十一年に二本見るが續けて打ち初めたるは文化初年なり、この刻印も長い間と多數の刀に對して必然虧みを生ずるため順次新らしき刻印に換へられて行き、正秀の一代を通じて著者の見るところ五ッ以上の刻印あること確實なり」と。

正秀初期には自身彫あるも晩年は本莊義胤が彫る、額の内に劍卷龍あるが最も得意のもの、その他何れも額内に小締り彫る、上に樋と添樋が多い。

◇正 秀 貳代 〔文政―武藏〕 新々刀 上作

初代正秀子、貞秀と云ひ後父の名を繼ぎて水心子正秀と改む、作品父晩年の作小丁子の風を受け繼ぐ、又義胤彫をも見る、不幸にして父沒すると同じき年十月廿日世を去る。

刻銘「水心子正秀作之」「水心子白熊入道正秀作之」「水寒子貞秀」「川部藤原貞秀作之」

◇正 秀 參代 〔慶應―武藏〕 新々刀 中作

水心子正次子に川部儀八郎秀勝がある、或は此の秀勝が三代目正秀になりたるに非ざるか。

刻銘「水心子正秀」

◇正 平 天然子 〔天明―薩摩〕 新々刀 中上作

伯耆守正幸門、江戸にも住す。

刻銘「天然子正平」

◇正 守 細川 〔文久―武藏〕 新々刀 中上作

主税佐正義嫡子、父と同じく作州津山藩刀工と成る、作風父同様。

刻銘「作陽幕下士細川正守造之」

＊**正 雄**＝山浦眞雄參照

＊**正 次**＝伊豫掾宗次參照

☆**正 方**＝細川主稅佐正義參照

☆**正 永**＝肥前初貳代正廣參照

＊**正 長**＝三善政長參照

☆**正 冬・正 商**＝惣左衛門正房參照

☆**正 行**＝源清麿・細川忠義參照

★**正日出**＝水心子正秀參照

＊**正 寛**＝羽山圓眞參照

◇政 次 紀　〔昭和—福岡〕

現小倉市到津神社境内、第二回日本刀展覽會に總理大臣賞を受く。

刻銘「於到津道場紀政次」「小倉住紀政次」

◇政 常 相模守初代　〔慶長—尾張〕　新刀 上々作

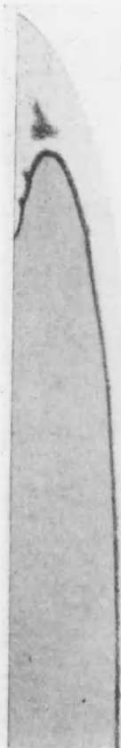
濃州納土の產、納土左助後に太郞助、關兼常門、初銘兼常、後福島政則公に抱へられ一字を賜はりて政常と改むと云ふ、天正十九年五月相模守受領、慶長十二年隱居して其子に業を讓りしも二代政常間もなく急死の爲再び鍛刀に努む、此の時の作品は主に入道の添銘あるもの多いと云ふ、元和五年二月十八日八十四歲の高齡を以て沒す、短刀を多く造り刀最も尠い、地板目刄文直、堀川派の如きものがあり、又稀に彫物も見る。

刻銘「相模守藤原政常」「相模守藤原政常入道」「相模守政常入道」「兼常」

晩年銘

この入道添銘のものは貳代政常沒後、再び鍛刀した時の銘であると云ふ。

直刃

平造り寸延び脇差が多く、地鐵は小杢強い、刄文直刃細直刄になりて締る、師關兼常の遺風がある。（類似工　堀川國廣、肥後大掾貞國）

◇政　常　相模守貳代　〔寛永—尾張〕　新刀　**上作**

政常貳代目にして納土太郎助と云ふ、初代慶長十二年隱居の後相模守政常と打つ、同十四年早逝せりと云ふ、此の間僅かに貳年なるを以て作品殆ど見えない、たま〳〵異風な相模守政常銘のものに接するが何れも僞物であつてとるに足らない。

刻銘「相模守藤原政常」

◇政　常　美濃守　〔寛永—尾張〕　新刀　**上作**

納土太郎助と云ふ、岐阜大道子にして初代政常養子となる、作風初代の如く、他に又亂刄もあり關傳を帶ぶ、寛文二年沒、政常三代目なれども作品から見て二代政常と唱ふ。（業物）

刻銘「美濃守藤原政常」「政常」

◇政　常　納土左助　〔寛文—尾張〕　新刀　**中上作**

納土左助と稱し、政常四代目、寛文二年美濃守受領と云ふ、元祿二年春沒す。

刻銘「政常」「尾張國住人納土左助政常」「美濃守藤原政常」

◇政常 五代 〔享保―尾張〕 新刀 **中作**

納土秀之助後に左助と稱す、政常五代目、これより以後數代あるも受領銘なく、作刀も稀れである、刀以外の鍛冶業に從事せしものならんか、寛保二年夏沒すと云ふ。

刻銘「尾張國政常作之」

◇政長 三善初代 〔寛永―岩代〕 新刀 **上作**

三善長國子、通稱利右衛門、後ち藤四郎と云ふ、埋忠明壽門、初銘正長、伊豫松山に住し後奥州會津に移る、慶安元年春沒す。（良業物）

刻銘「奥州會津住政長」

◇政長 三善貳代 〔延寶―岩代〕 新刀 **中上作**

初代政長子、藤四郎長道弟、初め長富と云ひ兄長道と同居、後政長と改め萬治頃より造る、元祿十年別家、同十二年沒、作風長道に似る、彫物もある。（業物）

刻銘「奥州會津住藤原政長」「陸奥國會津住政長」

◇政長 三善參代 〔正德―岩代〕 新刀 **中作**

三善藤四郎と云ひ、三代目を繼ぐ、享保十一年沒す。

刻銘「奥州會津住政長」

◇政國 平安城 〔寛文―山城〕 新刀 **中上作**

刻銘「平安城住政國」

◇政盛 雲林院 〔寛永―安藝〕 新刀 **中上作**

本國勢州、後藝州廣島に移る、今村姓、武藏守を受領せりと云ふ。

刻銘「雲林院政盛」

◇方淸 二王 〔元祿―長門〕 新刀 **中上作**

玉井刑部左衞門、周防二王淸綱嫡流と云ふ、作品直刄尋常なるもの、亂刄匂締りたるものなどである。

刻銘「長州住二王方淸」

◇昌久 大石 〔元祿―肥前〕 新刀 **中作**

刻銘「大石軍平昌久」

◇將應 陸奥守 〔寛政―武藏〕 新々刀 **中上作**

野州にも住す、稲垣源左衞門と云ふ、陸奥守受領、將應貳代續く。

刻銘「稲垣陸奥守藤原將應」「東武源將應」

◇孫次郎 下坂 〔寛永―越前〕 新刀 **中上作**

刻銘「下坂孫次郎」

◇冬廣 若州 〔寛永―若狹〕 新刀 **中上作**

五郎左衞門と云ふ、古刀期冬廣の續き。

刻銘「若州住冬廣」「若州藤原冬廣」

◇冬　廣　因州　〔享保―因幡〕　新刀　中作

刻銘「因州鳥取住冬廣造」「因幡國住冬廣造」

◇冬　廣　藝州初代　〔慶長―安藝〕　新刀　中上作

若州冬廣二男、高橋源次兵衛と稱し、慶長十一年福島家の招きにより廣嶋へ移住、寛永六年秋沒す。（業物）

刻銘「藝州住藤原冬廣」

◇冬　廣　藝州貳代　〔寛永―安藝〕　新刀　中上作

高橋源治兵衛と稱し、寛永十五年春沒す。

刻銘「藝州藤原冬廣」「冬廣作」

貳代か

＊冬　廣＝高橋長信參照

◇是　一　武藏大掾初代　〔慶長―武藏〕　新刀　上作

川上左近、近江石堂一派にして江戸に移る、一文字風の丁子刄を得意とし是を造る、併し作刀反淺く、地鐵、刄中及鎬などに柾目肌を見る点が古作一文字と異る處である。（良業物）

刻銘「武藏大掾左近是一」「武藏大掾藤原是一」「武藏大掾石堂左近是一」

◇是　一　武藏大掾貳代　〔元祿―武藏〕　新刀　中上作

川上甚平と云ひ初銘是長、後貳代目是一となる、初代の作風を繼承す。

刻銘「武藏大掾是一」「川上武藏大掾是一」

◇是 一 石堂 〔享保—武蔵〕 新刀 **中作**

甚平と云ひ三代目是一、以下四五代あれども刀剣不要の時代に遭遇せるためか、作品余り現はれない、或は一般刄物鍛冶に轉落したる爲めでもあらうか。

刻銘「石堂左近是一」

◇是 一 運壽 〔元治—武藏〕 新々刀 **上々作**

長運齋綱俊甥、通稱政太郎、七代目を繼ぎて是一となる、廢刀令後作品を見ない、明治廿四年十一月廿四日七十五歳にて逝く、作品身巾廣きもの、又は長刀あり、地小杢無地風或は板目肌綺麗なるもの、直刄銚深、足太く入る、亂刄華やかなるものもある。

刻銘「石堂運壽是一精鍛作」「石堂藤原是一精鍛」「藤原是一精鍛」

安政四年
（四十歳作）

◇是 次 福岡　〔寛文―筑前〕　新刀 上作

明暦元年江戸に出で、石堂是一門に入る、天和元年三月三日沒、行年五十三、福岡一文字の稱ある如く丁子刄を得意とす、地鐵柾目にして師是一に似たる風、是次の名も師から贈られたものであらう。

刻銘「筑前國福岡住是次」

丁子刄師是一と同様である、僅にその相違点を記せば是一より丁子が小模様になる事と逆心になると云ふ氣持であらう。（類似工　是一其他江戸石堂一派、備中守康廣、多々良長幸、初代助廣）

◇是 平 加州　〔寛文―加賀〕　新刀 中上作

出羽守高平弟である。

刻銘「加州金澤住藤原是平」

◇是 平 攝津守　〔寛文―長門〕　新刀 中上作

作柄筑前吉包に銘字は福岡是次に似る、この一派から長州へ移りたるならん。

刻銘「長州攝津守橘是平造」

＊是 俊＝武代綱俊參照

＊虎 徹＝長曾禰興里、興正參照

◇圓 眞 羽山　〔明治―武藏〕　新々刀 中上作

鈴木正寛と云ふ、鈴木正雄門、大正九年二月十四日七十五歳にて沒す、法名を淨雲院殿忠尙正寛圓心大居士と云ひ、彼の生前の命名になる、洋鐵を使用して造る、ゆへに地粟田口の梨子地肌の如く刄文細直にして古刀の俤あるも、地鐵の光り強い。

刻銘「淨雲齋羽山圓眞造之」「一圓眞造之」「正寛」

◇**照門** 丹波守 〔寛文ー美濃〕 新刀 **中上作**

濃州關善定家、勢州桑名又は江戸にても造る、作風は豊後守正全の如くである。

刻銘「丹波守藤原照門」「丹波大掾藤原照門」

◇**照包** 坂倉言之進 〔延寶ー攝津〕 新刀 **上々作**

初代包貞弟子後養子となり包貞を襲名、越後守をも踏襲し越後守包貞と銘す、然るに許可なく官位繼續はまかり成らぬとの達しに依り延寶八年二月坂倉言之進照包と改む、此所に一刀あり裏銘なきも延寶八年頃の作と思はれ表に「坂倉言之進照包」裏「改越後守包貞」と見え、此の事實を物語ると思はる、其の作品地小杢、刄文濤亂刄、直刄、直五ノ目足入りたるもの等がある、包貞銘のものには初代の如き五ノ目丁子を見る。

（大業物）

刻銘「越後守包貞」「坂倉言之進照包」「坂倉言之進照包、改越後守包貞」「坂倉言之進照包、越後守包貞同作之」

他にも包貞ありとし包貞を三人となせるは「坂倉言之進照包、ウラ銘、越後守包貞同作之」を合作の意味と解せしためである、私はこれを照包がその前身を但し書にしたに過ぎないと鑑る。

寛文年間作

延寶年間作

こゝに四ッの押形を以て銘の變遷を指摘して見よう、越の字、包の字、坂の字、何れも少しづゝ、變つてゐる、かゝる銘の變遷は照包のみではないことは論を俟ない。

◇照重 下原 〔寛文—武藏〕 新刀 **中作**

古刀照重の流れ、反淺き造込みが多い。

刻銘「武州下原住照重」

◇照廣 越前守 〔元祿—攝津〕 新刀 **中上作**

刻銘「津田越前守照廣」

◇輝政 陸奥守 〔貞享—攝津〕 新刀 **中上作**

大阪伊勢守國輝門、後伊豫の武代目國輝となる、作風師國輝同様。

刻銘「攝州住藤原輝政」「陸奥守輝政」「和泉守國輝」

◇輝 行 高田 〔延寶—豊後〕 新刀 **中作**

石見守受領と云ふ、作品地小杢堅い、刃文五ノ目亂縮る、鋩子小丸正し、又は直刃尋常なるもの。

刻銘「豊州高田住藤原輝行」

揃つた刃匂締る、鋩子直締りてハツキリとした刃文、地鐵小杢にして强い、これ悉く新刀高田もの丶特徴。（類似工 高田新刀一派、横山祐定）

五ノ目刃

◇輝 廣 肥後守 〔慶長—安藝〕 新刀 **上々作**

本國美濃、關兼常末孫、通稱藤四郎、初め兼友又は兼伴、明壽門に入る、後福島正則に仕へて輝廣と改む、肥後守受領、尾州清洲に移り、慶長五年藝州廣島へ轉居子、孫この地に榮へる、作品平造脇差あり堀川國廣などの如くであるが尖刃を交へる。（業物）

刻銘「肥後守藤原輝廣」「肥後守輝廣」

刀劍を識るものはこの銘を見た瞬間輝廣は刀工であり、中野重成は註文主であることを直感する、併し豫備知識なくしては文字のみを以つてかく解譯は出來ない、併しこの作品の出來た當時を想起するならば賴んだ人賴まれた人その間柄も但し書は必要としなくてもよいわけであつたらう。

◇**輝 廣** 播磨守　〔寛永—安藝〕　新刀 **上作**

通稱甚八、輝廣貳代目にして播磨守受領、初銘兼久、旣に慶長より作品を殘す、作風初代の如くなるも、他に互文五ノ目揃ひたるもの、直小亂風のものもあり又刀をも造る。（業物）

刻銘「播磨守藤原輝廣作」「播磨守輝廣」

貳代輝廣は早くから父業を襲ひ長き歲月に渉つて鍛刀した事と、この時代需要著かりしためとにより世に作品多く現はる、これに反して初代は殆んど稀れである、三代以降に作品尠いと云ふことは官位受領がないと云ふこと丶共に斯業衰徵の現はれと見られる。

◇**輝 廣** 藝州　〔寛文—安藝〕　新刀 **中上作**

輝廣三代目以下數代續くも作品は見當らない。

刻銘「藝州住藤原輝廣」

*＊***輝 邦**＝筒井紀充參照

◇**英 一** 玉鱗子　〔嘉永—武藏〕　新々刀 **中作**

上毛にも住、初輝廣と打つ。

刻銘「玉鱗子英一」

◇**英 義** 藤枝太郎　〔元治—武藏〕　新々刀 **中上作**

川越藩士、細川正義門、初期作は嘉永頃。

刻銘「武藏國英義」「藤枝太郎英義作」

右圖の如く櫻の花を刻したるものあり、又巴の紋を切る事も有る。

◇**有　功** 正三位　〔嘉永―山城〕

公卿乍ら趣味として刀劍を鍛ふと云ふ、南海太郎朝尊に學ぶ、御劍製作に當り朝尊、壽秀等を相手となしたりと云ふ、安政元年薨ず、世上「正三位有功造」と銘じ、和歌を刻んだ小刀を見るも大方僞物である。

刻銘「正三位有功造」

◇**有　平** 加州　〔寛文―加賀〕　新刀 **中上作**

越中守高平次男、作兄景平に似る、銘の切り方も同樣である、作品が尠ないのはこの作者が表面に立たなかつた爲めであらう。

刻銘「加州住藤原有平」「越後守藤原有平」

◇**在　吉** 阿波守　〔寛永―山城〕　新刀 **上作**

堀川國廣門、師に似たる作風なるも燒刄沈みたるもの多い、武用の爲めにかくするならんか、作品は尠い(業物)

刻銘「阿波守藤原在吉」「阿波守在吉」

◇**紹　芳** 彦坂　〔寛政―武藏〕　新々刀 **中上作**

幕臣彦坂三太夫と云ふ、水心子正秀門。

刻銘「彦坂紹芳」

◇**昭　友** 秋元　〔昭和―栃木〕

現栃木縣黑磯町、日本刀傳習所に學ぶ、日本刀展覽會第二回に海軍大臣賞を受く。

刻銘「於東都赤坂昭友謹作」

◇**昭　廣** 吉原　〔昭和―東京〕

現東京市澁谷區八幡町、第二回日本刀展覽會に文部大臣賞を受く。

刻銘「於常盤松吉原昭廣作之」

◇**昭　秀** 水生子　〔文化—羽前〕

水心子正秀門、作風師に似る。

刻銘「水生子昭秀」

新々刀 **中上作**

裏の「三十一歳時造之」は昭秀自身の歳を記したもの銘字は正秀の弟子であるために同様の筆法である。

◇**昭　秀** 彦三郎　〔昭和—東京〕

栃木縣出身、嘗て衆議院議員も務む、刀劍を好み、特に鍛錬に趣味を有し二代將應に學ぶ、日本刀傳習所を赤坂區氷川町の自宅庭内にもうけ笠間繁繼等を聘して師となし門下生指導の道を開く、昭和十年日本刀傳習所主催文部省後援にて日本刀展覽會を開く、後毎年これを開催する事を務むる傍機關誌として日本刀及日本趣味を發刊、刀工、研工、鞘工等の隆盛をはかりたる斯界の功勞者である。

刻銘「下野住人栗原彦三郎昭秀作之」「勳四等昭秀作」「栗原昭秀謹作之」

繁繼代銘

◇**驍　邦** 龍泉子　〔元治—備後〕

刻銘「備後國龍泉子驍邦作」

新々刀 **中作**

＊**天　秀**＝水心子正秀參照

◇**定保** 坪内　〔弘化―武藏〕　新々刀 **中作**

武士、余暇に細川正義を師として鍛錬の法を學ぶ。

刻銘「從五位下坪内伊豆守藤原朝臣定保」

◇**定行** 鬼神丸　〔天保―豐後〕　新々刀 **中上作**

刻銘「豐後日向住鬼神丸定行」

◇**定道** 越前守　〔寛文―尾張〕　新刀 **中上作**

名古屋住、本國美濃、京伊賀守金道門に入る。

刻銘「越前守源定道」

◇**貞晴** 劍龍子　〔慶應―攝津〕　新々刀 **中作**

月山貞吉門、師との合作もある。

刻銘「劍龍子貞晴」

◇**貞俊** 佐々木　〔安政―岩代〕　新々刀 **中上作**

定俊とも切る、水戸烈公御抱鍛治になる。

刻銘「仙臺白石貞俊」「佐々木一流齋源貞俊貳十五枚太平伏造」

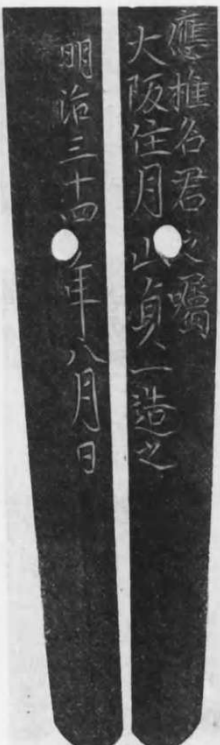
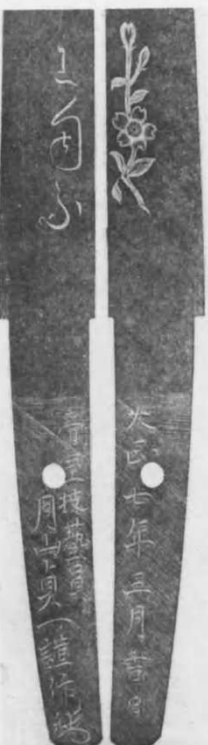
◇**貞一** 月山　〔明治―攝津〕　新々刀 **上々作**

貞吉の養子にして彌五郎と云ふ、號雲龍子、明治卅九年四月四日帝室技藝員に任命せらる、大正七年七月八十四歳の高齢を以て沒す、貞吉晩年その代作をもなす、作品十四歳の時より打初め、沒年近く迄あり、實に七十年の永きに渉る、初期作は豪刀反淺く、刄文直刄又は大亂華やかなるもの、晩年は丁子刄主に軍刀身に應じたものを多く鍛ふ、其の他地鐵刄文等多種多様にして備前相州、山城、大和の各傳に通ず、彫物又巧にして遣龍、旗鉾、不動等を見る、木莊義胤栗原信秀につぐ名手である、明治四年廢刀令後全國の刀匠の失業を見たるも貞一はよく刀工として止まる、しかし世上需要皆無にして、求むる者高作僞銘ものゝみ歡迎す、貞一も生活のため余儀なくこの必要に應じて僞物を造つたと思はれる。

刻銘「月山貞一造」「月山雲龍子貞一鍛之」「帝室技藝員月山貞一精錬之」「大阪住月山貞一精鍛」

鑢目は細川正義の如く一本づゝ切つて行つたものである、弟子の森岡正吉にもこれがある。

合作（全部貞一切銘）

三十二歳作

明治廿七八年、明治卅七八年日清日露の兩戰役ありてこの間、軍刀の需要活潑となる。

父老境に入つて子貞勝が代銘をしてゐることは確かである、次の貞勝自銘と比較すれば一見して判明出來得る、代銘である以上代作にも勿論及んでゐると思ふが同時代の父子師弟關係の間に於て上みの作柄の區別は極めて困難である、困難と云ふより寧ろ不可能に近い、ゆへに私は代銘の場合、代作をも竊かに感ずるに止まる。

六十七歳作

八十四歳作（貞勝代銘）

◇貞 勝 月山　〔昭和—大阪〕

貞一嫡子、父晩年高齢なるを以てその代作をなす（刀工老年の場合子がこれに代ることは當然である）最近奈良縣吉野に鍛錬所を設く、作品丁子刄を造り、龍又は劍卷龍の彫物あるものを見る、現代屈指の刀工。

刻銘「月山貞勝謹作」「大阪住月山貞一謹鍛」

自作彫

◇貞 吉 月山　〔安政—攝津〕　新々刀 上作

出羽月山の流れ、水心子正秀門、彌八郎と稱し大阪に住す、天保六年の作ありこの頃から旣に初まる、明治三年二月沒、行年七十歳、作品地小杢强く、末備前の如き五ノ目丁子を好みて造る、刄とがる。

刻銘「月山貞吉」「攝津浪華住月山貞吉造之」「攝陽住月山貞吉作」

應永備前、末備前の健全なもので往々に貞吉作と思はれるものがある、これを桑名打（國山宗次）と誤り稱せられてゐるが、そのよく出來たものは鑑別極めて困難である。

◇貞 吉 天田　〔昭和—越後〕

越後新發田に住、南人社川口陟氏に認められ刀工として立つ、昭和十年日本刀展覽會に總理大臣賞を受く、過日鍛刀に精進中急逝、即ち昭和十二年四月廿一日三十八歳にて沒す、作柄直刄古作を偲ぶもの又は亂刄匂深きもの。

刻銘「越後國住天田貞吉」

◇貞　次　伊賀守　〔延寶―攝津〕　新刀　中作

刻銘「伊賀守貞次」「攝州住藤原貞次」

◇貞　次　下坂　〔寛永―越前〕　新刀　上作

作風肥後大掾貞國に似る、日向大掾貞次とは別系か、作品に彫物も有る。

刻銘「越前國下坂貞次」

◇貞　次　日向大掾　〔寛文―越前〕　新刀　中上作

作風播磨大掾重高に似る、作品寛永から寛文に及ぶ。

刻銘「越前住日向大掾藤原貞次」「越前住日向守藤原貞次」

◇貞　次　尾州　〔元祿―尾張〕　新刀　中作

河内守貞次同人とも云ふ。

刻銘「尾州住貞次」

◇貞　次　高橋　〔昭和―愛知〕

現松山市千舟町に住す、高橋義宗弟、彫物上手、昭和十一年第二回日本刀展覧會に海軍大臣賞を受く。

刻銘「於豫州松山源貞次」「於豫州松山龍王子源貞次」

◇貞　宗　隅州　〔安永―大隅〕　新々刀　中作

良包とも云ひ、薩摩にも住す、作風伯耆守正幸に似る。

刻銘「隅州住貞宗」

◇貞　則 加賀守　〔延寶―攝津〕　新刀　上作

本國肥後菊池、通稱佐右衛門と云ひ井上眞改門、後内藤家に抱へられて磐城へ移住、作風師に似る、作品延寶より寶永正德に至る、又享保二年のものありこの頃に迄及ぶわけである。（業物）

刻銘「鈴木加賀守貞則」「攝州住藤原貞則」「奥州磐城住加賀守藤原貞則」

◇貞　信 法城寺　〔延寶―武藏〕　新刀　中上作

武州法城寺一派、攝州にも住す。（業物）

刻銘「法城寺橘貞信」「城山橘貞信」

◇貞　國 攝州　〔寛文―攝津〕　新刀　中上作

田口次郎兵衛と云ひ、井上眞改門、作風初代和泉守國貞に似る。

刻銘「攝州住藤原貞國」「攝州大阪住藤原貞國」

◇貞　國 法城寺　〔萬治―武藏〕　新刀　上作

法城寺一派、近江守正弘につぐ良工、作刀反淺き方、地小杢、刄文直五ノ目足入り又は五ノ目小亂、長曾禰興里の風がある。

刻銘「但馬守法城寺橘貞國」

山野加右衛門の金象眼試銘が有る、これらは寛文頃の江戸新刀に多い。

◇**貞　國**　肥後大掾　〔慶長―越前〕　新刀　**上作**

貞國の傳記不明のため種々の說起る、たとへば初代康繼同人又は弟と、同人に非ず弟と見る說尤もなりと思はれる、康繼同樣肥後大掾を受領す、作品平造脇差多く初代康繼の如き作風、額内に劍卷龍、梅木などの彫物を見る　長曾禰興里は貞國の弟子と云ふがこれは鍛刀よりむしろ彫刻に師弟關係があつたと云へよう。

刻銘「肥後大掾貞國」「肥後大掾藤原貞國」

新刀初期には概して平造脇差が多い、特にこの貞國と初代政常とが最も多い、この時代は寸延平造りを必要としたものであらう。

貞國は彫物を以て名高い、額内に劍卷龍、梅の彫物、なかには刀身一杯に梅の木を彫つたものがある、康繼の喜内彫にもそれが見受けられ、越前彫の特徴顯著なるものがある。

◇**貞　國**　下坂　〔寛永―越前〕　新刀　**中上作**

肥後大掾貞國貳代目と思はれる。

刻銘「越前住下坂貞國」

◇**貞　行**　大和大掾　〔承應―豊後〕　新刀　**中作**

刻銘「大和大掾藤原貞行」

◇貞 幸 越中守　〔元祿―尾張〕　新刀 **中作**

名古屋住、作風伯耆守信高の如くである。

刻銘「越中守源來貞幸」

◇貞 之 沖　〔文政―加賀〕　新々刀 **中作**

沖長右衛門と稱す、加州兼若の僞物を造りしと云ふ。

刻銘「加州住貞之」

◇貞 光 月山　〔昭和―奈良〕

現奈良縣吉野山鍛錬所にて鍛刀す、月山貞勝氏息である。

刻銘「月山貞光」

◇貞 重 對馬守　〔萬治―尾張〕　新刀 **中作**

大阪にも住す。（良業物）

刻銘「對馬守藤原貞重」

この時代は既に各工が競つて「守」を受領したらしい。

◇貞 重 下坂　〔元和―越前〕　新刀 **中上作**

奥州にても造る。

刻銘「出雲守藤原貞重」

◇貞 重 今井　〔昭和―愛媛〕

現愛媛縣西條町、第二回日本刀展覽會に文部大臣賞を受く。

刻銘「豫州西條住貞重入道作」

◇貞 廣 高柳　〔延寶―越前〕　新刀 **中作**

京大阪にも住す。（業物）

刻銘「加賀守藤原貞廣」

官位を受領するには京に上つて伊賀守金道に手續の勞をとつてもらつたと云ふ、受領の最隆盛なのはこの寛文時代であつたらう。

◇貞秀 雲仙子 〔嘉永―攝津〕 新々刀 中上作

杉木廣之進、本國出羽、月山貞吉門である。

刻銘「雲仙子貞秀」「攝州尼ヶ崎住杉木廣之進貞秀」

◇貞英 松井 〔天保―羽後〕 新々刀 中作

水心子正秀門、松井平吉と稱す、秋田住。

刻銘「松井貞英」。

◇貞助 島田 〔寛永―駿河〕 新刀 中上作

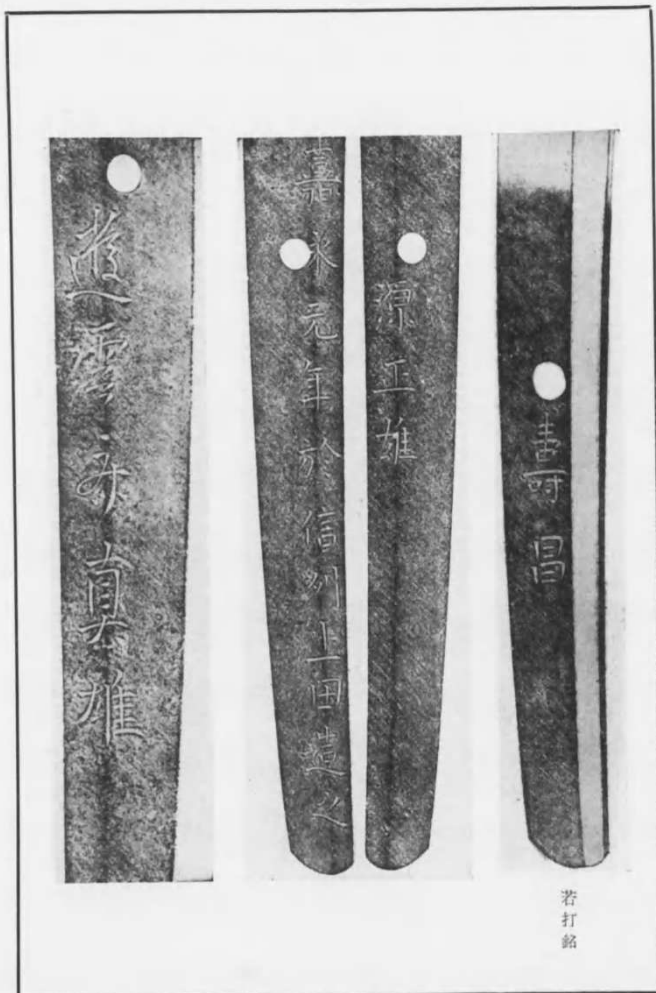
島田一派、本工は貳代目なりと云ふ。

刻銘「駿州島田住參河大掾源來貞助」

＊**貞秀**＝**貳代目水心子正秀參照**

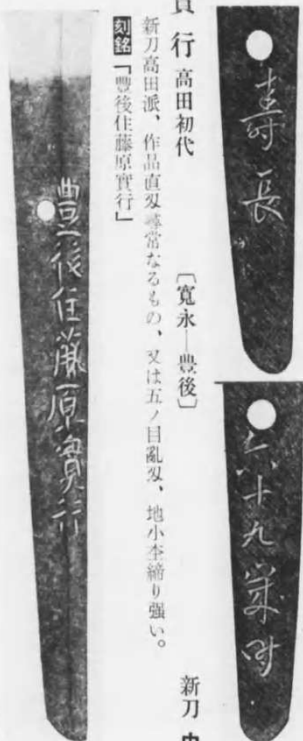
◇眞雄 山浦 〔嘉永―信濃〕 新々刀 上々作

生國信濃小諸赤岩村、郷士山浦信風の嫡子、駒次又は善太夫と云ひ、弟清麿と共に上田の刀工河村壽隆の門に入る、刀銘完利、壽昌、正雄の順に改銘し、眞雄銘に至る、晩年更に壽長と銘す、明治七年五月十八日七十一歳にて逝く、作品清麿の如くなるも、濤刄が交る。

刻銘「山浦眞雄」「遊射軒眞雄」「遊雲齋眞雄」「山浦昇源正雄」「天然子壽昌」

若打銘

◇實 行 高田初代 〔寛永―豊後〕 新刀 中上作

新刀高田派、作品直刃尋常なるもの、又は五ノ目乱刃、地小杢締り強い。

刻銘「豊後住藤原實行」

◇實 行 高田貳代 〔延寶―豊後〕 新刀 中作

刻銘「豊後高田住藤原實行」

◇金 重 宇多 〔天保―大和〕 新々刀 中上作

刻銘「日本鍛冶元祖近江介宇多金重」

◇金 重 播州 〔延寶―播磨〕 新刀 中作

本國濃州岐阜にして播州國府に移住す、多田與三左衛門と云ふ、京又は東武にても造る、金重丸とも打つ。（業物）

刻銘「播陽國衙壯金重」

◇金 道 伊賀守初代

〔寛永—山城〕　新刀 **上作**

本國美濃、關兼道長男、永祿年間父及三弟（來金道、丹波守吉道、越中守正俊）と共に上京、西洞院夷川に住し、協力鍛刀に從事す、後京都五鍛冶の頭となる、晩年菊紋を賜ふと云ふ、作刀身巾廣く、地板目刄文亂刄砂流入り鋩子はたるみて所謂三品鋩子となる。（業物）

刻銘「伊賀守金道」「伊賀守藤原金道」

伊賀守金道一門は京都に居住し、多くの肉親を擁し繁榮を見せた、貳代目金道からは日本鍛冶惣匠の特權を得、代々これを踏襲してゐる、其の地位は當時羨望のまとであつたと思はれる、しかしそうした特權のためか作品は比較的世に多く現はれない樣である、而も初代には優れたものを見るが二代以下は平凡な作が多い。

亂刄

大亂砂流交り顯著にて簾刄を偲ばしむる、鋩子は中たるみにて所謂三品鋩子、この一派（金道、吉道、久道等）の特徴を現はす。（類似工　京丹波守初代吉道、越中守初代正俊）

◇金 道 伊賀守貳代

〔寛文—山城〕　新刀 **中上作**

三品勘兵衛と云ふ、日本鍛冶の頭となり刀工受領の事を司る、依而銘に日本鍛冶惣匠と切る、作品直五ノ目足入りにて鋩子たるむ。（業物）

刻銘「伊賀守藤原金道」「伊賀守金道」

間を置いた五ノ目、云替へれば直に五ノ目交り、鋩子は直たるみ（三品鋩子）これだけで特徴は充分であるが、いざ實際に當ると見損ふことが多い。（類似工　和泉守來金道、近江守久道）

直五ノ目

◇金　道　伊賀守參代　〔享保—山城〕　新刀　**中作**

三品勘兵衛、晩年の享保七年幕府の命に依り江戸にて御刀を造る、同九年歸洛、この代より惣匠を宗匠と切る。（業物）

刻銘「伊賀守藤原金道」「三品伊賀守」裏に「日本鍛冶宗匠藤原金道」

◇金　道　伊賀守四代　〔享保—山城〕　新刀　**中上作**

三品勘兵衛と稱す、享保十六年伊賀守を受領す。

刻銘「伊賀守金道」菊紋を切る

◇金　道　五代雷除　〔寶暦—山城〕　新刀　**中作**

刻銘「雷除伊賀守金道」

◇金　道　和泉守初代　〔寛永—山城〕　新刀　**上作**

初代伊賀守金道弟、寛永中和泉守受領、萬治の頃まで作品ありと云ふ、越後守をも受領せしと見ゆ、作風初代金道に似る。（業物）

刻銘「和泉守來金道」「藤原來金道」「越後守藤原來金道」

◇金　道　榮泉　〔貞享—山城〕　新刀　**上作**

和泉守金道貳代目、寛文元年和泉守受領、大法師法橋來榮泉と打つもの多く、作品二代金道の如き直五ノ目である。（業物）

刻銘「和泉守來金道」「大法師法橋來金道」「大法師法橋來榮泉」

◇**金　道** 和泉守參代　〔延寶―山城〕　新刀　**中上作**

延寶年中和泉守受領、金四郎久道兄と云ふ、父榮泉との合作が多い。（業物）

刻銘「和泉守來金道」菊紋を切る

◇**金　道** 伊豆守　〔延寶―山城〕　新刀　**中作**

貳代伊賀守金道弟にして京西ノ洞院に住す。

刻銘「伊豆守藤原金道」

◇**金　道** 伊賀守六代　〔安永―山城〕　新々刀　**中作**

三品勘兵衛と稱す、作品短刀が多い。（五代目以前…三九三頁參照）

刻銘「雷除伊賀守金道」

◇**清　次** 肥前　〔天和―肥前〕　新刀　**中上作**

肥前刀工ではあるが系統不明の作者である。

刻銘「肥前國住藤原清次」

◇清　人　齋藤　〔安政―武藏〕　新々刀　上作

野鍛冶齋藤小一郎養子にて小十郎と云ふ、齋藤昌麿の紹介により清麿門に入る、修業成りて江戸神田に鍛刀場を設く、慶應三年八月上洛して豐前守を受領す、出羽庄内に歸りて藩士の爲めに鍛刀す、一時清仁とも切る、明治三十四年十月三日永眠、享年七十五、作刀身巾廣く、切先延び、鎬やゝ高め、地板目、刄文五ノ目亂又は五ノ目丁子に砂流、金筋も交る。

刻銘「羽州莊内住清人」「藤原清人」「豐前守清人」「羽州庄内住藤原清人於江戸作」「清仁」

三十一歳作

清麿自刄後、清人談に「師造刀の註文を受け代價半額受領して刀の出來ざるもの三十本許りなりしが諸士（註文主）師に代りて造刀せん事を求むるにより追々その約を果す」とある「師に代つて造刀」は「自作清人銘の刀」と見るべきであらう。
世上「清麿銘」の清人模作を見受けるもこれは勿論「師に代つて造刀」の内には含まれない。

三十五歳作

四十三歳作

◇清　宣 備中守

〔延寶―美濃〕

新刀 **中上作**

所謂新刀嗣にして作刀重ね丈夫、地小杢縮る、中直又は乱刃にて一見直ちに寛文、延寶頃の中新刀に見ゆ。

刻銘「備中守藤原清宣」

南蠻鐵は南蠻からの渡來鐵で當時は珍らしいものであつた樣に思はれる、特に中心に「南蠻鐵鍛」と刻することなど舶來品崇拜の心理であらう、尤も南蠻鐵鍛とあつても全部是のみではなかつたと云ふ話である。

◇清　信 疋田

〔寛文―攝津〕

新刀 **中作**

疋田太兵衛尉と稱し又清光とも打つ。（業物）

刻銘「疋田太郎兵衛尉清信作」

◇清　麿 源

〔弘化―武藏〕

新々刀 **最上作**

信州小諸赤岩村の郷士信風の二男に生る、内藏助環と云ふ、號一貫齋、兄眞雄と共に上田の冶工、河村壽隆門となる、初銘正行、次いで秀壽、天保五年武家を志し江戸に出で旗本の逸材窪田清音の門に入る、後再び刀工となり、清音の支持を得て天保十年武器講成る、弘化三年清麿と改む、四谷伊賀町に開業せるも酒に隠れて多く造らず、安政元年十一月十四日自刃す、享年四十二、作品長刀多く、身巾廣い、地板目刃文五ノ目乱又は五ノ目丁子にて、砂流金筋多く現はる。

刻銘「正行」「源正行」「山浦環正行」「山浦環源清麿」「源清麿」「清麿」「環」「一貫齋秀壽」「源秀壽」

天保七年頃作

年少から刀工を志し相州傳を追慕したる如く初銘「正行」は相州傳の泰斗正宗、行光から出たものと思はれる。

三十歳作

見所の一ツ「源」のサンズイと原の第二劃とがぶつかり合つてゐる点、僞物にはそれがない。

三十四歳作

弘化三年正行が清麿に改まる、これは恩人窪田清音親友齋藤昌麿の一字づゝを取つたものに違ひない。

弘化四年作

三十七歳作

四十二歳作（安政元年に相當）

五ノ目亂

五ノ目亂砂流交り、金筋多く現る、金筋の多い点は清麿が一番であらう、彼は殆んどこの相州傳にて終始してゐる。（類似工　大慶直胤、月山貞一）

◇**清　光**　播磨大掾　〔寛文―越中〕　新刀　**上作**

越中富山に住すと云ふ、播磨大掾を受領す、當時より榮へ世に作品多い、刄文直丈は五ノ目亂匂締る、地小杢目立つ。（業物）

刻銘「播磨大掾藤原清光」「清光」

古刀期より連綿と續くと云ふも、その間の作品見えない、世上見られる清光は多くこの播磨大掾の作である。

十二月清光の異名あり、これは清の旁青の字十二月と見られるために生ず。

加州刀劍會の研究に因りて非人清光と播磨大掾とは別人なるもの、様である、實際の非人清光は作品を通じては余り見られない、從來誤られたる播磨大掾がよき作を殘して居る。

◇清光　非人　〔元祿―加賀〕　新刀　中上作

俗名長兵衛、鍛刀界すたれ、寛文末前田家救済笠舞の非人小屋に入る、貞享四年沒す、作品は余りない。

刻銘「加州住藤原清光」「長兵衛尉清光」

非人清光か

◇清光　長右衛門　〔正德―加賀〕　新刀　中作

俗名長右衛門、この工も笠舞の非人小屋入りを續けたらしい、享保五年の諸國鍛冶取調書に子の長兵衛と共に名を連ねてゐる。

刻銘「加州住藤原清光」

◇清盈　二王　〔元祿―長門〕　新刀　中作

刻銘「長州住二王清盈作」

◇清繁　石州　〔寛政―石見〕　新々刀　中上作

手柄山正繁門、作品師の如く濤亂刃が多い。

刻銘「石州濱田龍臧山清繁」「石州益田住清繁作」

◇清重　長州　〔寶曆―長門〕　新刀　中上作

作品直刃は五ノ目亂匂縮りたる出來、彫物にて有名である。

刻銘「長州住藤原清重」

◇清秀　久留米　〔天保―筑後〕　新々刀　中上作

加賀介清廣子、久留米の冶工。

刻銘「筑後青木近江介源清秀」

◇清平 八幡山初代 〔萬治—加賀〕 新刀 中上作

辻村五郎左衛門と云ひ、甚六兼若四男、萬治二年東武に移る、又相州小田原にても造る、元祿六年七十五歳の添銘ある作品を見る、作風兄景平、兼若に似る、柾目肌現れたるものあるもこの派の特徴の一つである。(業物)

刻銘「加州藤原清平」「清平」「小田原八幡山住清平」

◇清平 八幡山弐代 〔寶永—武藏〕 新刀 中作

初代長命にして世上清平作品の多くは初代である。

刻銘「八幡山清平」「藤原清平」

* 清堯＝野田繁慶參照

* 清盈＝主水正正清參照

☆ 清仁＝齋藤清人參照

◇紀充 筒井 〔寶永—大和〕 新刀 中上作

越中守包國子、元祿六年頃より紀充と打、享保十六年頃の作が多い、初銘輝邦、作品濤亂風の大亂又は簾刄。(業物)

刻銘「筒井越中守入道紀充」「筒井越中守輝邦入道紀充」

◇**菊平** 伊賀守　〔寛文―肥前〕　新刀 **中作**

菊紋あり、京より肥前に移りたるならんか。

刻銘「肥前國源菊平」「伊賀守菊平」「法橋伊賀守入道源菊平」

◇**鬼洞庵** 長曾禰　〔貞享―近江〕　新刀 **中上作**

虎徹の如く江州長曾禰村より出たるための名称ならんか。

刻銘「長曾禰鬼洞庵」

◇**行周** 波平　〔文化―薩摩〕　新々刀 **中上作**

橋口四郎右衛門と云ひ谷山一派、享和二年行安と改む、作品身巾廣く直刄荒錵つき。

刻銘「波平行周」

◇**行長** 高田　〔萬治―豊後〕　新刀 **中上作**

高田一派、作品尋常なる直刄が多い。（良業物）

刻銘「豊州高田住藤原行長」「藤原行長」

◇**行安** 大和介　〔嘉永―薩摩〕　新々刀 **中上作**

波平安利子、勘之亟と稱し初め安邑、後行安となる、波平行周（後行安）の跡を繼ぎたるものか、作刀身巾廣く鎬高目、刄文直荒錵交り。

刻銘「波平行安」「正國六十三代孫波平住大和介平行安」

◇**行清** 佐賀　〔享保―肥前〕　新刀 **中上作**

二代行廣次男。

刻銘「肥前國一文字藤原行清」「肥前國佐賀住行清」

◇**行光** 加州　〔寛文―加賀〕　新刀 **中上作**

金澤住、左兵衛と云ふ。（業物）

刻銘「近江大掾藤原行光」

◇行光 高田 〔延寶―豊後〕 新刀 中上作

仲間勘左衛門尉と云ふ、肥後熊本にても造る、高田輝行等に似たる作風又尋常なる直刄もある。

刻銘「豊後高田住藤原行光」

◇行廣 出羽大掾初代 〔寛文―肥前〕 新刀 上作

初代正廣弟、九郎兵衛と云ひ慶安三年阿蘭陀鐵鍛を學ぶ、この時三十二歳、正保五年出羽大掾を受領、寛文三年出羽守、天和三年五月歿、行年六十六、作品正廣に似る、身巾有り地小杢、刄五ノ目亂、直刄等。

刻銘「肥前國出羽大掾藤原行廣」「一肥前國出羽守行廣」「一肥前國佐賀住出羽守行廣」「一出羽守行廣」

◇行廣 出羽守貳代　〔貞享―肥前〕　新刀 中上作

初代行廣子、貳代目行廣、藤馬亟、初銘行永、貞享元年(天和三年)出羽大掾後出羽守受領、元祿十四年八月沒す、年六十九、作風初代行廣又は二代忠國に似る。

刻銘「一肥州出羽守行廣」「肥前出羽守藤原行廣」

◇行廣 出羽守參代　〔寳永―肥前〕　新刀 中作

行廣三代目にして治部亟と云ふ、出羽守は受領なくして父より踏襲す、故に後には是を切らない、寛延三年六十三歳にて沒す。

刻銘「肥前出羽守行廣」「一出羽守行廣」

◇行秀 武藏　〔天保―武藏〕　新々刀 中上作

岩井喜三郎と稱す、細川正義及び大慶直胤に學ぶ。

刻銘「武藏國住人行秀」「武藏國住水翁子源行秀」「行秀」

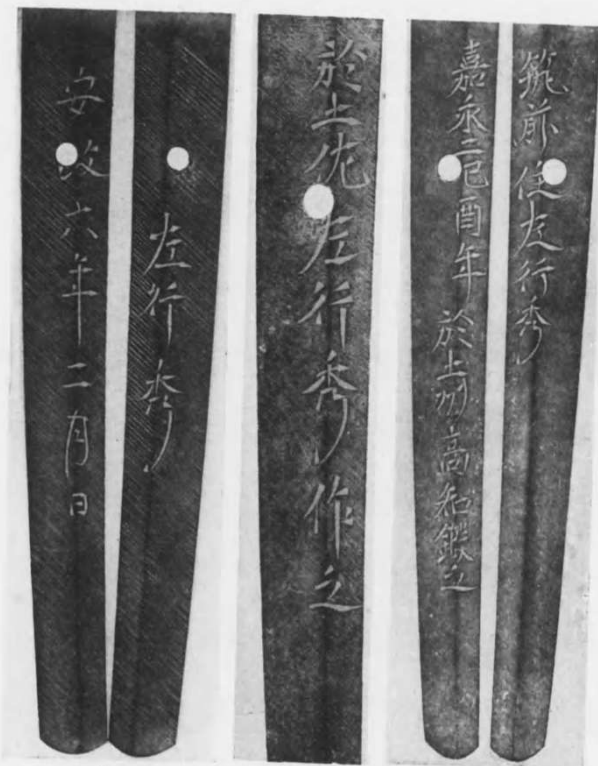
◇行秀 野州　〔天保―下野〕　新々刀 中上作

水心子正秀の流派、鹿沼住貞吉子。

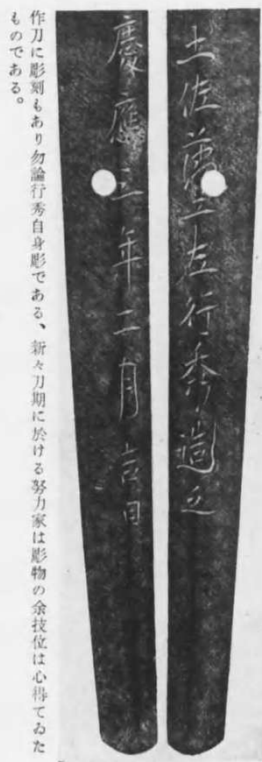
刻銘「行秀」「野州住荒川雲龍子男行秀造」

◇行秀 左　〔嘉永―筑前〕　新々刀 上々作

豊永久兵衛、筑前左文字末と云ふ、號東虎、江戸に出で清水久義門に入り弘化三年土佐に移り藩工となる、文久二年秋江戸砂村の藩邸へ移る、明治初年再び土佐に歸る、同十八年逝く、年七十四、作刀身巾廣く豪壯、地板目又は柾目、刄文匂鈍深き太直刄足入りたるもの。

刻銘「筑州住左行秀」「左行秀」「土佐藩士左行秀造之」「於土佐左行秀作之」

三十八歳作

嘉永四年八月日裏銘

四十八歳作

五十六歳作

作刀に彫刻もあり勿論行秀自身彫である、新々刀期に於ける努力家は彫物の余技位は心得てゐたものである。

匂深直刃

豪壯なる造込み、寸長き刀多く、匂錵最も深く獨特の作風。（類似工　運壽是一）

☆**行永**＝出羽守行廣參照

☆**行安**＝波平行周參照

☆**行平**＝松葉本行參照

◇明壽 埋忠 〔慶長―山城〕 新刀 最上作

三條宗近廿四世の孫重隆の次子であると云ふ、長子重政早世のため嫡流を繼ぐ、通稱彥次郎、入道して鶴峯明壽と云ふ、初銘重吉と云ふが實物に接しない、足利義昭に仕へ京都西陣に住す、後豐太閤に從ひ四條室町に住む、寬永八年五月十八日年七十四歳にて逝く、作品刀尠く平造脇差切刄などあり造込手際よい、短刀稀れに有り、地小杢刄文直又は小湾刄、初代忠吉の初期作と同樣な作柄である、額内に不動、這龍、など又劍卷龍、梵字、素劍等見事なる彫物を多く見る、本工は彫金家であつて純粹の刀工ではない樣である。

刻銘「城州埋忠作」「城州埋忠明壽作」「山城國西陣住人埋忠明壽」「埋忠明壽作」

押形に見る通り彫銘である、これは金工なるがため當然と思はれる。

二十四歳作

四十一歳

「他に不可渡之」との添銘がある、これは子々孫々に傳ふべき家寶として造られたものである、勿論この文のない他の刀劍であつてもその意味で造られたものが澤山ある事は云ふまでもない。

明壽自彫

額の内にかゝる優れた彫刻を見るは明壽を以て嚆矢とする。

匂締り濤亂、地小杢目、初代忠吉初期作に一番近い出来である。（類似工　初代忠吉、堀川國廣）

濤亂刄

◇光代　秦　〔延寶―尾張〕　新刀中　上作

本國濃州關、後尾張名古屋に移る、江戸石堂常光弟子と云ふ、勢州にても造る、肥後守受領、作品直刄又は小亂がある。

刻銘「肥後守秦光代」「秦光代」「尾州住秦光代」

◇光圀　加州　〔延寶―加賀〕　新刀　中上作

加州炭宮兼則一派、刄文小丁子がある。

刻銘「加州住光圀」

◇光昌　信國　〔安永―筑前〕　新々刀　中上作

又左衛門と稱す、作品直刄は亂出来優れたるを見ず、刀身に這龍等の緻密な彫物を施せるもの多く、小ガタナなどにも小締りした彫物を見る。

刻銘「信國光昌造」

自作彫

光昌の彫物は緻密精巧である、これは金工家なるためである、金工家畑の手法と云ふものは細かい線、細かい部分を易々と表現しこの点刀工彫の大まかな調子とは違つた感じを與へる、この相違は一竿子忠綱と比較すれば明瞭である。

◇光 平 日置 〔承應―武藏〕 新刀 上作

江州蒲生の石堂一派江戸へ移る、石堂常光弟、日置姓、出羽守受領、後出羽入道と稱す、此工是一と共に丁子刄を以て名高い、凡そ慶長以降は相州傳全盛を極めたりしが、こゝに是一、光平等によりて備前一文字傳の復活を見るに至つた。(良業物)

刻銘「日置光平造」「出羽入道泰信法橋光平」「武州出羽守源光平」菊紋がある

初期作

丁子亂

丁子刄、どう見ても古作一文字と思はれる作風である、相違点を記せばまづ鋩子が小丸であること、地鐵に柾目の多いこと等である、新々刀にはこれ程一文字に接近した燒刄は更になく、獨り光平及び石堂一派がこれを得意としたものである。(類似工 多々良長幸、備中守康廣、佐々木一峯、福岡是次、信國吉政)

◇道 俊 岩野 〔安政―武藏〕 新々刀 中作

刻銘「於東叡山麓岩野道俊炭素鐵作」

◇道 辰 若狹守 〔正德―岩代〕 新刀 中作

會津長重子、初銘長廣と云ひ初代長道門、後京三代伊賀守金道門に入る。(業物)

刻銘「若狹守藤原道辰」菊を切る

◇道 長 三善 〔嘉永―岩代〕 新々刀 中上作

後代三善家、棟梁長道の弟ならんか。

刻銘「奥州會津住三善道長」

◇道 安 會津　〔文化―岩代〕　新々刀 中作

三代目の道辰子、作品初代道辰も尠いが貮代三代に至ると更に尠い、これは共等時代泰平にして刀劍の需要なき故に外ならない、後道辰と改銘せるを以て本工が四代目道辰になるわけである。

刻銘「若狹守四代藤原道安」「奥州會津住藤原道安」

*道 長＝三善長道參照

◇三 秀 一帶子　〔文化―遠江〕　新々刀 中上作

中塚初藏、水心子正秀門、文化元年國安と改む。

刻銘「一帶子三秀」「三秀」「遠州橫須賀住國安」

◇盈 永 讃州　〔寛政―讃岐〕　新々刀 中作

高松住、眞部久左衛門と云ひ大阪尾崎助隆門である。

刻銘「讃州住盈永」

◇重 包 信國　〔享保―筑前〕　新刀 上作

信國吉包子、通稱助六又は助左衛門、後正包と改銘す、享保五年薩摩の安代、正清と共に拔擢されて江戸に出で將軍吉宗の佩刀を鍛ふ、その功に依つて葵一葉を許さる、享保十二年五十六歳にて逝く、作品大亂華やかなるもの、又は肥前刀に似たるものなどがある。（業物）

刻銘「筑州住源信國重包」「筑州住信國正包」

葵一葉を許されし後の作品余り世に多く現はれない。

濤五ノ目

間隔の開いた五ノ目刃は享保頃の新刀に多く見受けられる。（類似工　肥前正廣、主水正正清、豊後高田一派）

◇**重　包** 筑前　〔文化―筑前〕　新々刀 **中上作**

葵一葉切りたるものを見る、水心子正秀門。

刻銘「信國源重包」

◇**重　勝** 野州　〔慶長―下野〕　新刀 **中上作**

刻銘「野州住重勝」

◇**重　義** 埋忠　〔寛永―山城〕　新刀 **上々作**

明壽男、彥次郎後七左衛門、法橋明眞となる、鐔を多く造り刀劍の作は尠い。（業物）

刻銘「埋忠重義作」「埋忠法橋明眞」

◇**重　義** 七左衛門　〔元祿―山城〕　新刀 **上作**

明眞重義の流れ、小道具を主とし、刀劍も稀に作る、一說東山美平師とも云ふ。

刻銘「城州住梅忠橋重義」

◇**重　高** 播磨大掾初代　〔寛永―越前〕　新刀 **中上作**

東武にても造る、作風初代康繼、肥後大掾貞國等に似る、平造り脇差が多い、劍卷龍などの彫物を見るも是等は記內の作ならんか。（業物）

刻銘 表「播磨大掾藤原重高」裏「越前住」

◇**重 高** 播磨大掾貳代　〔寛文—越前〕　新刀 **中上作**

作品地李目立ち、刄文直又は五ノ目、湾刄、此作は初代重高の作風よりむしろ同時代の三代四代の康継に近い。

刻銘「越前住播磨大掾藤原重高」

◇**重 高** 越前　〔天和—越前〕　新刀 **中作**

重高三代目、是より以下數代受領なしと云ふ、作品も一向見當らず、業不振の爲作らざる爲めならんと思はれる。

刻銘「越前住重高」

◇**重 忠** 播磨守　〔寛永—尾張〕　新刀 **中上作**

刻銘「播磨守藤原重忠」

◇**重 胤** 澤原　〔天保—武藏〕　新々刀 **中上作**

大慶直胤門中第一の作者、作風師同様である。

刻銘「白川士澤原亘源重胤」「奥州白河藩源重胤」

◇**重 次** 村松　〔弘化—越後〕　新々刀 **中作**

越後村松の臣、板垣貳之助と云ふ。

刻銘「村松臣重次」

◇**重 宗** 信國　〔元祿—筑前〕　新刀 **中作**

筑前信國一派、刄文逆心の小丁子が多い。

刻銘「筑前住信國平四郎重宗」「筑前住源信國重宗」

◇重國 南紀初代 〔寛永―紀伊〕 新刀 上々作

本國大和、通稱九郎三郎、父包國と共に駿河にて造る、慶長の初め徳川家康に召抱へらる、元和五年徳川頼宣に從ひ紀州に移り、和歌山丸の内東方鍛冶橋東に住した、一說には包國同人と云ふ、作品鎬高く地板目柾交り、刄文直喰違刄或は五ノ目亂れ揃ふもの、鋩子燒詰又は燒詰がゝる、彫物をも往々に見る。（良業物）

刻銘 「駿州住重國造之」「於紀州和歌山重國造之」「於南紀重國造之」「文珠九郎三郎重國造之」

新刀鍛冶綱領下卷七十三頁に「和州手掻住重國於駿府造之、元和五己未歲」の脇差が揭げてある、銘が角張つて書風が包國に近い、この頃包國が重國と改銘せしに非ざるや。

重國の中心尻は丸み少なく獨特である、但し右に揭げし重國は摺上のものにて中心尻は後世切りたるもの。

非常に枯れた鐵の弱い銘字である、作者の老境が想像せられる。

直砂流、鋩子掃掛燒詰になる、作風はどこまでも大和傳である。（類似工　手掻包國、山城大掾國包その一門）

◇重國 南紀貳代　〔明暦―紀伊〕　新刀 上作

初め金助と稱し、後四郎兵衛と云ふ、世に文珠重國と云ふ、貳代目なるを以て自から二文珠と洒落て切つたものがある、徳川賴宣の鍛刀御相手もなす、作風大体初代重國に似るも晩年には湾刄あり、丁子あり、又彫物も見る。（業物）

刻銘「紀州住文珠金助重國造之」「於南紀文珠重國造之」「文珠重國造之」「於紀州文珠重國造之」

初銘初代重國の如き雅味を存す。

「於南紀重國造之」の初代僞物が澤山ある、それ等の内で錆色尤もなるは、貳代目以下の重國の正眞として取扱れてゐる事がある、併し僞物には僞物同志共通点がある、云替へれば僞銘は技巧的で不自然、眞作のつくろはざる放膽さがない。

◇重國 南紀參代 〔元祿―紀伊〕 新刀 中上作

文珠九郎三郎と稱す、濃州岐阜にても造る、初代の如き大和傳濃厚なる作風がなくなり尋常なる直刄などがある。

刻銘「於南紀文珠重國」「紀州住文珠重國」

◇重國 南紀四代 〔元祿―紀伊〕 新刀 中上作

金助と云ふ、作品尠い、五代目は重國を名乘らず重勝と云ふ。

刻銘「於南紀文珠重國」

◇重康 上總大掾 〔寛文―攝津〕 新刀 中作

初め上總大掾、後上總守を受領す。

刻銘「上總大掾重康」

◇重貞 信國 〔元祿―筑前〕 新刀 中作

刻銘「筑前國信國源重貞」

◇**重秀** 白川 〔弘化—武藏〕 新々刀 **中上作**

水心子正秀門、本國羽州庄内、白川察右衛門と云ふ。

刻銘「重秀」

☆**重清**＝奥州永俊參照

☆**重勝**＝紀州國勝參照

☆**重吉**＝埋忠明壽參照

◇**繁壽** 宮口 〔慶應—駿河〕 新々刀 **中上作**

宮口八郎と云ふ、刀身に自作龍彫物を見る、現代刀工宮口靖廣氏の祖父である。

刻銘「一貫齋繁壽」「於駿府宮口一貫齋繁壽」

◇**繁繼** 笠間 〔昭和—東京〕

一貫齋繁壽門、笠間義一と云ひ刀銘繁繼、後森岡正吉弟子となる、一時日本刀傳習所師範もなす、銚付丁子刄を最得意とする、又自作彫緻密なるものを見る。

刻銘「笠間一貫齋繁繼彫同作」「一貫齋繁繼」

銘字大正と昭和、すでに相違す、昭和頃の銘字は栗原昭秀の繁繼代銘を參照ありたい。

◇**繁昌** 〔元和—武藏〕 新刀 **上作**

駿河にも住す、繁慶弟子にして作風亦相似る、從つて又彫銘である、これに僞物が割合にある、繁慶同様タガネの鋭いものでなければいけない。

刻銘「繁昌」「駿府安西住繁昌」

◇**鎭 忠** 肥前守　〔寛永―伊賀〕　新刀 **中上作**

肥前守鎭政弟、伊賀名張住本國豊後、作品丁子刄にして伊賀石堂の名がある。

刻銘「肥前守藤原鎭忠」

◇**鎭 政** 肥前守　〔寛永―伊賀〕　新刀 **中上作**

鎭正とも云ふ、豊後高田鎭忠の末と云ふ、作品丁子刄にして石堂一派の如く故に伊賀石堂の名がある。（業物）

刻銘「肥前守藤原鎭政」

◇**壽 命** 美濃守　〔寛文―美濃〕　新刀 **中上作**

新刀壽命にて世上作品の多くは本作である。

刻銘「美濃守藤原壽命」

◇**壽 命** 弘安齋　〔天和―美濃〕　新刀 **中上作**

近藤惣左衛門と稱し、天和三年法橋に叙せらる、元祿十六年八十四歳にて沒す。

刻銘「法橋弘安齋壽命」「壽命」

◇**眞 改** 井上　〔延寶―攝津〕　新刀 **最上作**

初代國貞次男、八郎兵衛と稱す、越後守國儔門に入る、父國貞の晩年その代作をなす、これは老齢にある父に代つたものである、萬治四年頃朝廷へ作刀を奉献しその賞に因つて菊の御紋を賜はる、初め和泉守國貞とも切り、寛文十二年八月眞改と改む、天和二年十一月九日急逝、作刀反淺く地小杢錵深き五ノ目刄、晩年薩摩刀の如き直亂荒錵付、鋩子は小丸下りとなる。

刻銘「和泉守國貞」「井上和泉守國貞」「井上眞改」

萬治年間

三代目と稱せられる團右衛門國貞の作と云ふものは稀れである、ゆへに三代目國貞と稱してゐる品に二代の僞物があることは注意すべきである。

菊紋有り

菊紋有り

晩年銘

眞改銘期は角張りて切る、晩年に至ると次第に達筆となり改の字稍大きく左へはみ出る風がある。

直亂

荒錵付亂刃は主水正正清の如くである、併し本工の方が時代から見て先驅者である、大阪正宗の名がある。（類似工　主水正正清、一平安代、惣左衞門正房、伯耆守正幸）

◇眞　了　土肥初代　〔延寶―攝津〕　新刀　中上作

土肥作左衞門正重と稱し、延寶八年阪陽に來りて眞改弟子になる、天和二年歸國、名を眞了と改む、作風眞改に似る。（業物）

刻銘「土肥眞了」

◇眞　了　土肥貳代　〔享保―攝津〕　新刀　中作

貳代以下數人あれど作品稀れ。（業物）

刻銘「土肥眞了」

◇下　坂　遠州　〔元祿―遠江〕　新刀　中作

入念な作は余りない、數打物師とでも云ふべきもの。

刻銘「遠州住下坂」

◇七　左　埋忠　〔寶永―山城〕　新刀　中上作

明壽五世の孫七左衞門宗茂、作刀未見刀身への彫刻のみ。

刻銘「剣物埋忠七左」

◇廣　賀　三郎兵衛　〔元和―伯耆〕　新刀　中上作

刻銘「伯耆國住廣賀作」「伯耆國住道祖尾三郎兵衞廣賀」

◇廣　賀　七郎左衞門尉　〔承應―伯耆〕　新刀　中上作

刻銘「伯州住道祖尾七郎左衞門尉廣賀」

◇廣　義　攝州　〔延寶―攝津〕　新刀　中作

津田助廣門、三代目國助の實父と云ふ。

刻銘「攝州住藤原廣義」

◇廣　隆　安藝　〔寛文―安藝〕　新刀　中作

輝廣門、長右衛門と稱す、代々續くと云へど貳代以下作品稀れである。

刻銘「藤原廣隆」

◇廣　次　肥前　〔寛文―肥前〕　新刀　中上作

平戸左文字末、中山德右衛門と云ふ、後加右衛門、初代正廣弟子、慶安年中相州綱廣門に入る、萬治三年歸邑。(業物)

刻銘「肥前國廣次眞治制之」

元祿五年二月日の「元」の字が二重になつてゐる、これは切損じにより切直してゐるのである、こんな無雜作な点が却つて僞物には出來ない所である。

◇廣　則　肥前　〔寛永―肥前〕　新刀　中上作

刻銘「肥前國住人廣則」

◇廣　信　伊藤　〔貞享―山城〕　新刀　中上作

刻銘「於洛陽伊藤權左衛門尉廣信」「伊藤大和守源廣信」

◇廣　政　若狹守　〔天和―攝津〕　新刀　中上作

津田助廣門、助廣の助手をなせるためか獨立作品が尠い。(業物)

刻銘「若狹守源廣政」

◇廣　房　三品　〔安政―伊勢〕　新々刀　中作

伊勢桑名住人、伊賀にも住む、三品半兵衛と稱す。

刻銘「勢州桑名住義明齋廣房作」「義明齋三品廣房作」

◇**廣 貞** 肥前　〔貞享―肥前〕　新刀 **中上作**

初代兼廣子、貳代目廣貞となる、相右衛門と云ふ、初代は後吉家と稱す、（吉家參照）作品五ノ目丁子、又は直刄ありて地刄共に強い。

刻銘「肥前國藤原廣貞」

◇**廣 光** 平安城　〔慶應―山城〕　新々刀 **中上作**

和州郡山藩士、作品平造刀などあり、肌もの刄文直刄等がある。

刻銘「平安城住大隅守平廣光」

◇**廣 重** 下原　〔寛文―武藏〕　新刀 **中作**

下原一派、相模守廣重同人かも知れない、卽ち晩年受領してかく稱せしものか。

刻銘「武州下原住廣重」

◇**廣 重** 相模守　〔元祿―武藏〕　新刀 **中作**

下原一派である。

刻銘「相模守藤原廣重」

＊**廣 次**＝山城守歳長參照

＊**廣 永**＝備中大掾正永參照

＊**廣 貞**＝肥前吉家參照

◇**寛 次** 秦龍子　〔明治―東京〕　新々刀 **中作**

秦龍齋宗寛子、作品は尠い。

刻銘「秦龍子寛次作之」

◇寛重 一専齋 〔慶應―武藏〕 新々刀 **中作**

泰龍齋宗寛門ならん、宗寛の如く隷書銘に切る。

刻銘 「三河國刈谷藩鍛冶寛重作」

◇弘包 信濃守 〔貞享―攝津〕 新刀 **中上作**

文珠市之亟後市兵衛と云ふ、初代は文珠八郎右衛門と稱すと、江戸にても造る。(業物)

刻銘 「信濃守弘包」「信濃守藤原弘包」

◇弘幸 平安城 〔慶長―山城〕 新刀 **上作**

堀川國廣弟子、切刄造なども好みて造る、又古雅なる彫物梵字等がある。(業物)

刻銘 「平安城堀川住弘幸」「平安城藤原弘幸」「丹後守藤原廣幸」

◇弘元 陸奥介 〔文政―陸奥〕 新々刀 **中上作**

水心子正秀門、初銘國秀、宗次、天保十四年五月廿七日六十六歳にて沒す。

刻銘 「二本松住古山宗次」「陸奥介弘元」「古川陸奥介弘元」「於江府芝弘元作」

晩年銘

◇汎 隆 伯耆守 〔明暦―越前〕 新刀 **中上作**

越前下坂一派、伯耆大掾後伯耆守、作風播磨大掾重高等に近い。（業物）

刻銘「越前住伯耆守藤原汎隆」「伯耆大掾汎隆」

以上の汎隆二作を見るに後者の銘の方が早き作と思はれるも撮面の都合上前後す。

◇秀 任 松尾 〔慶應―安藝〕 新々刀 **中上作**

刻銘「藝州士松尾秀任」

◇秀 辰 山城守 〔寛永―武藏〕 新刀 **中上作**

江戸住、又阪陽にも住す、本國美濃、權兵衛と云ひ肥後守にも任ぜらると云ふ、寛文頃の秀辰は二代目ならんと思はれる。（業物）

刻銘「山城守秀辰」

◇秀　勝　水心子　〔慶應―武藏〕　新々刀　**中上作**

水心子正次子、川部儀八郎と稱す、三代目正秀同人か。

刻銘「川部儀八郎秀勝」

◇秀　世　水心子　〔嘉永―武藏〕　新々刀　**上作**

田村群平と云ふ、水心子正秀聟、作風正次（水心子）に似る。

刻銘「水心子秀世」「水心子秀世入道」

◇秀　弘　土州　〔文久―土佐〕　新々刀　**中上作**

左行秀門、作品豪刀が多い。

刻銘「土州氏島住秀弘鍛之」

*秀　興＝和泉守忠重參照

*秀　國＝角元興・元興入道松軒參照

*秀　明＝堀井俊秀參照

◇久　一　天龍子　〔天保―越後〕　新々刀　**中上作**

片貝住人、後伊勢に移る、尾崎助隆門。

刻銘「天龍子平久一」

◇久　義　清水　〔天保―武藏〕　新々刀　**中上作**

生國相模小田原、清水宗五郎と稱す、細川正義門である。

刻銘「相州清水宗五郎久義」「相模國人源久義」

相模國人とあるが必ずしも相模で造つたとは云へない、これは作者の生國を示すに止まり、何所で打つても相模國と切る場合が多い。

◇久國 上野守 〔寛永—土佐〕 新刀 中作

國益養子、木村平右衛門、寛永年中上京して金四郎久道弟子と成る。

刻銘「上野守久國」「上野大掾久國」

◇久幸 川井 〔文政—武藏〕 新々刀 上作

作刀身巾廣く地柾目又は柾目綺麗、刄文直、細かき砂流を交へる。

刻銘「川井久幸作」「幕府臣川井久幸作」

添銘に因り本作の出現意義深い。

◇久道 近江守 〔延寶—山城〕 新刀 上作

堀六郎兵衛と稱す、三品姓、京五鍛冶の一人にして初め近江大掾後近江守受領、正徳元年八十五歳にして沒す、作品貳代々作ありて是は枝菊を切ると云ふ、五ノ目揃ひ間開きたる刄、伊賀守金道に似る、砂流交り、三品鋩子。

刻銘「近江守源久道」「近江守久道」に菊紋を切る

◇久　道 金四郎　〔正徳―山城〕　新刀 **中上作**

三品金四郎と稱し、貮代目久道、初銘久次、榮泉金道の子なるも初代久道養子となる、養父との合作多く獨立せる作品は稀れである。

刻銘「近江守嫡子源金四郎」「久道嫡子源來久次」「近江守源久道」枝菊を切る

合作（銘金四郎ならん）

◇久　道 參代　〔享保―山城〕　新刀 **中作**

享保首年受領、元文四年東武に召されて若狭正宗、兒手柏包永の模造をなす、其功により一代限り五人扶持を賜はる。

刻銘「近江守久道」「近江守源久道」菊紋又は枝菊を切る

◇元　興 角大八　〔文政―岩代〕　新々刀 **中上作**

角大八と稱し初め秀國と銘す、水心子正秀門、後大和守元平弟子となり元興と改銘す、文政七年三月廿八日七十一歳にて沒す。

刻銘「刀鍛冶棟梁角元興」「角元興」「角秀國」

刀鍛冶棟梁とあるがこれは會津一帶の地の棟梁であらう、後代三善長道にこの添銘がある、是は元興から讓られたものと思はれる、子角大治は刀を打たざりしと云ふから刀工ではなかつたのであらう。

◇元　興 入道松軒　〔慶應―岩代〕　新々刀 **中上作**

角大八孫に當る、祖父の銘を襲ふ、慶應二年七月大和守受領秀國と改む、明治廿四年三月八十歳にて沒す。

刻銘「元興入道松軒作」「大和守秀國」

◇元 武 奥　〔文化―薩摩〕

元直二男にて元平弟、奥正左衛門と称す、作風元平同様である。

刻銘「薩陽士奥元武」「薩陽臣奥元武」「薩陽臣奥平元武」

新々刀 **中上作**

晩年銘

◇元 直 薩州　〔寛延―薩摩〕

元貞子、奥次郎兵衛と称す、作品稀れ。

刻銘「薩州住元直」

新刀 **中作**

◇元 長 青木　〔文化―尾張〕

初銘信直と云ひ伯耆守信高門、後大和守元平弟子となる。

刻銘「青木照之進平元長」「尾州住元長」

新々刀 **中上作**

裏「八幡大菩薩」の刻銘がある。

◇元 安 奥　〔寛政―薩摩〕

元直三子、奥次右衛門と称す、元武弟、作風元平、元武に似る。

刻銘「薩陽士元安」「薩陽士奥元安」

新々刀 **中上作**

◇元 貞 薩州

〔享保—薩摩〕 新刀 **中上作**

惣左衛門正房門、奥孝左衛門と稱す、初銘忠寄と云ふ。

刻銘「薩州住元貞」

◇元 平 大和守

〔文化—薩摩〕 新々刀 **上々作**

元直子にて孝右衛門と云ふ、寛政元年大和守受領、文政九年七月十五日八十五歳にて沒す、作刀身巾廣く地板目錬れる、刄文直荒錵付、又は五ノ目亂、是も亦荒錵つき華やか、稀に彫物あるものを見受ける。

刻銘「薩陽士元平」「薩藩臣奥元平」「奥大和守平朝臣元平」

三十六歳作

「薩陽士元平」の五字は大和守受領前の若打にして安永天明年間の作品である、若打だけに銘字も太くしつかりしてゐる、左の押形と比較すると一見してそれがわかる、作柄も晩年は一定した五ノ目亂であるが、この若打銘のものは多樣である、中には非常に優れたものを見る。

五十二歳作

五十七歳作

五十七歳作

◇**元平** 弐代 〔慶應―薩摩〕 新々刀 **中上作**

初代元平子、明治七年沒すと云ふ、作風父に似るも淋しい出來である。

刻銘「薩陽士奥平元平」

◇**元寛** 奥 〔天保―薩摩〕 新々刀 **中上作**

奥次郎と稱し、大和守元平子である。

刻銘「薩陽臣奥平元寛」

*元繼―六代七代八代康繼參照

◇**本行** 松葉 〔天和―豊後〕 新刀 **中上作**

豊後行平の後裔と稱し行平後本行と銘す、又豊後太郎と云ふ、後肥前唐津に住す。

刻銘「豊後太郎本行八十三歳作」「紀新太夫末河内守源行平作」「肥前唐津住河内守源本行」

晩年本行の本を松葉の形に切るために松葉本行の異名がある。

晩年銘

◇本 行 河内守 〔元文—肥前〕

本行貳代目に相當、但世上にあるものは多く父本行の作品の様である。

刻銘「河内守本行」

新刀 **中上作**

◇盛 俊 越水 〔昭和—廣島〕

現廣島縣佐伯郡友和村に住す、昭和十一年第二回日本刀展覽會に陸軍大臣賞を受く。

刻銘「藝州住盛俊」

◇盛 俊 岩本 〔元治—周防〕

岩本清右衛門と稱し、長運齋綱俊弟子である。

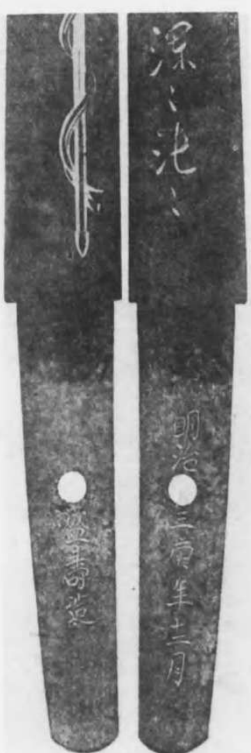
刻銘「防州岩國住岩本清右衛運司盛俊」

新々刀 **中作**

◇盛 壽 栗原 〔慶應—越後〕

栗原信秀弟、久次郎と云ひ、源淸麿門、盛俊とも銘す、後越後に移る、皆燒刄を好みて燒く、刀身には簡單な彫物を多く見る。

刻銘「盛壽造」

新々刀 **中上作**

◇**盛近** 清心齋 〔元治—武藏〕 新々刀 **中上作**

江戸住、信濃にも住む、川井久幸に似たる作風である。

刻銘「江府住小林清心齋盛近作」

◇**盛綱** 將監 〔寛永—阿波〕 新刀 **中上作**

刻銘「阿波國右近將監盛綱作」

◇**盛國** 和泉守 〔寛文—武藏〕 新刀 **上作**

守正とも銘す、虎徹に似たる風、安定、兼重につぐ江戸新刀の良工である。

刻銘「和泉守千手院盛國作」「和泉守源盛國造之」「和泉守千手院源守正作」

◇**盛町** 肥前守 〔天和—攝津〕 新刀 **中作**

肥前守受領、盛門とも云ふ。

刻銘「肥前守藤原盛町」

◇**盛貞** 杵築 〔文化—豊後〕 新々刀 **中上作**

刻銘「豊後杵築住盛貞」

◇**盛道** 駿河守 〔寛文—美濃〕 新刀 **中作**

駿河守受領、尾張名古屋にも住す。

刻銘「駿河守盛道作」

◇盛 道 武藏守 〔寛文―尾張〕 新刀 **中作**

本國攝津、信濃守大道との合作がある。

刻銘「武藏守藤原盛道」

全部盛道の切銘ならん

◇盛 道 加賀守 〔貞享―尾張〕 新刀 **中作**

加賀守受領、武藏守盛道の一族ならんと思はる。

刻銘「加賀守藤原盛道」

◇盛 秀 長州 〔文久―長門〕 新々刀 **中作**

刻銘「長州住潛龍子盛秀作」

◇守 次 福岡 〔延寶―筑前〕 新刀 **上作**

是次弟、利平子、父の沒後石堂是一門に入る、元祿六年五月六日六十九歳にて沒、作風是次に似る、彫物もある。

刻銘「筑之前州住守次」「筑前國福岡住守次」「筑州福岡住守次」

刃文五ノ目丁子匂締りて太く足入る、福岡石堂獨特の作風一見肥前刀の如き刃文なるも地刃強く鮮やか、（類似工 近江大掾忠廣、肥前正廣）

五ノ目丁子

◇守 久 石堂 〔寛文―武藏〕 新刀 **中上作**

八左衛門尉、後入道して東蓮と云ふ、作品丁子刄である。（業物）

刻銘「武州住石堂秦守久」「石堂秦東蓮」

◇護 國 平賀 〔昭和―廣島〕

現呉市今西通六丁目、第二回日本刀展覽會に總理大臣賞を受く。

刻銘「平賀護國」

☆守 正＝和泉守盛國參照

◇助 共 直江 〔安政―常陸〕 新々刀 **中上作**

直江助政子、水心子正秀弟子となる。

刻銘「水府住直江助共」

◇助 鄰 武藏 〔元祿―武藏〕 新刀 **中作**

本國美濃關、助隣同人。（業物）

刻銘「武藏國住藤原助鄰」

◇助 隆 尾崎 〔寛政―攝津〕 新々刀 **上作**

本國播州、黑田鷹謙弟子、寛政十年十二月十九日長門守受領、文化二年五十三歳にて沒す、作品津田助廣の如き濤亂刄、されど地刄共に堅い、梅枝などの彫物を見る。

刻銘「尾崎源五右衛門助隆」「尾崎長門守藤原助隆」

新々刀初期に濤亂刄の流行あり助隆は之に終始した、蓋し當時の鑑定家鎌田魚妙が津田助廣を新刀第一の作者と賞揚したことなどにも基因するものと思はれる。

◇助　高　攝津　〔天和─攝津〕　新刀　**中上作**

助宗弟、津田助廣弟子、後備後福山に移住、寛文十二年三十歳に相當、作品助廣に似たるも幾分淋しい出來である。（業物）

刻銘「助高作」「助高」

師津田助廣の作品が澤山あり弟子の作が尠いのは銘をつぶされて助廣に直されたとか云ふが、その主なる原因は、彼等の業成りし頃は斯業衰へし時代にて、余程の實力なくば刀匠として獨立し生活して行き得なかつた爲めと思はれる。

◇助　直　津田　〔元祿─攝津〕　新刀　**上々作**

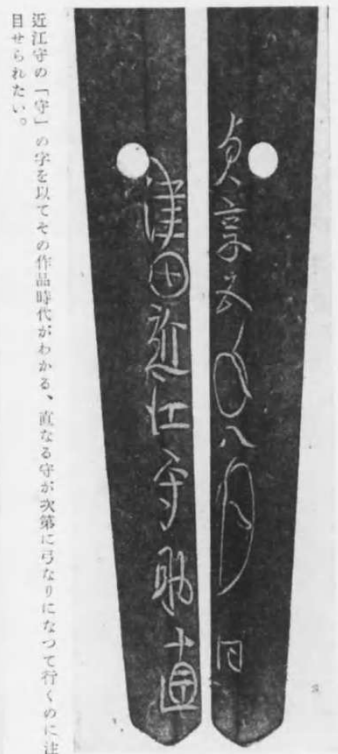
近江高木の產、通稱孫太夫、越前守助廣の門に入り後妹聟となると（延寶三年頃か）云ふ、大阪鎗屋町に住む、元祿六年頃まで作品を見る（五十五歳）、或はこれが沒年ならんか、五ノ目足入り、又は濤亂刄を主とし直の燒出しあり、彫刻も稀に見られる、講談に忠僕直助の後身であると云ふ如きは勿論取るに足らない。（良業物）

刻銘「近江守助直」「近江守高木住助直」「近江國住助直」「津田近江守助直」

三十歳作

寛文十年頃

延寶二年頃

延寶九年頃

四十五歳作

近江守の「守」の字を以てその作品時代がわかる、直なる守が次第に弓なりになつて行くのに注目せられたい。

五十歳作

五十三歳作

◇助　宗 豊後守　〔寛永—駿河〕　新刀 **中上作**

彦兵衛と稱し、豊後守受領、後信濃にも住む、信濃島田小十郎助宗等はこの一族ならんか。

刻銘「豊後守藤原助宗」「豊後守助宗」「島田小十郎助宗」

◇助　宗 攝州住　〔寛文—攝津〕　新刀 **中上作**

豊後守助宗子、助高兄にして九兵衛と稱す、大阪初代助廣弟子、作風師の如くである。

（業物）

刻銘「若狹守助宗」「攝州住助宗」

◇助　政 鈴木　〔貞享—攝津〕　新刀 **中上作**

本國淡路、大和守受領、津田助直門。

刻銘「鈴木大和守助政」

◇助　政 直江　〔文化—常陸〕　新々刀 **中上作**

直江新藏と稱す、尾崎助隆弟子、水戸に住す。

刻銘「水戸住直江助政」「助政」

表に君萬歳と切る、君命による作品ならん。

◇助　重 出羽守　〔寛文—攝津〕　新刀 **中作**

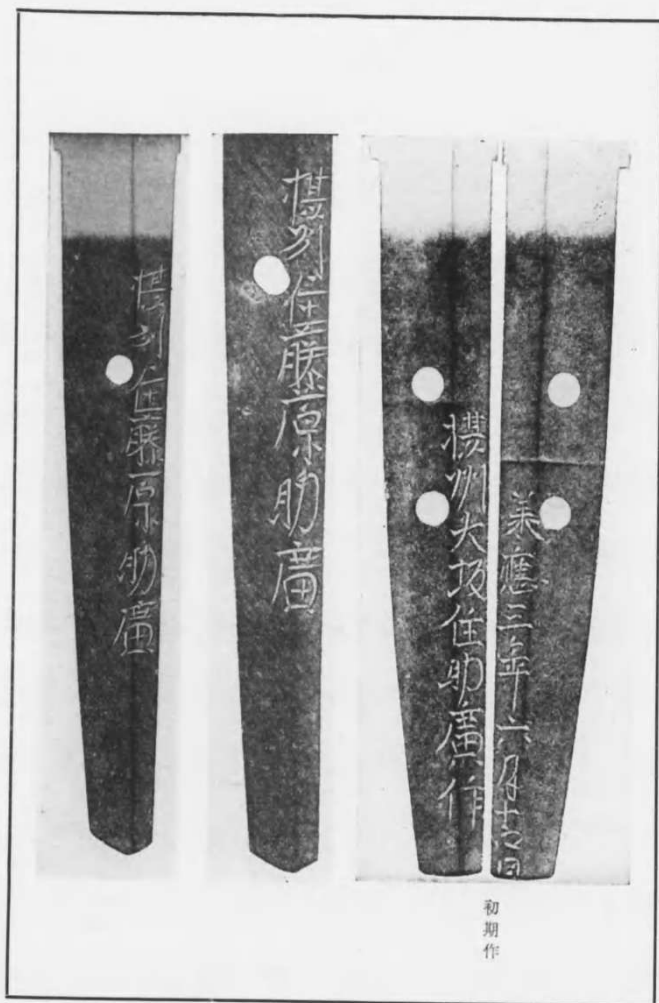
中河内國助門。（業物）

刻銘「攝州住藤原助重」「出羽守助重」

◇助　廣 ソボロ　〔承應—攝津〕　新刀 **上作**

本國播州津田の數打師より出づ、彌兵衛尉と稱し、大阪に出で、初代國助門に入り其業を修む、扮裝をかまはず常に襤褸を纏ふためソボロの異名ありと云ふ、作品初代國助の如く、反淺、地小杢刄文五ノ目揃ひたる亂刄錵深い、鋩子は小丸にして深く返る。

（最上大業物）

刻銘「攝州住藤原助廣」「助廣」「攝州大坂住助廣作」

初期作

◇助廣 越前守 〔延寶—攝津〕 新刀 最上作

生國攝州打出、通稱甚之亟、初代助廣養子となり大阪常盤町一丁目に住す、明暦三年越前守受領、寛文七年四月七日大阪城代青山因幡守に召抱へらる、天和二年三月十四日年四十六歳にて逝く、作風初めは初代助廣に似る、中頃より刄文濤亂刄又は直刄錵深きもの、鋩子は小丸深く元直燒出し短い、正秀、助隆、正繁等が一樣に此の濤亂刄をねらつてゐるが一番目に付くのは是等は燒出しが長い点である。（大業物）

刻銘「越前守助廣」「津田越前守助廣」「越前守藤原助廣」「越前守源助廣」「源平藤橘」と四ツの姓がある、助廣は藤原姓であるが、源とも切つてゐる、初代忠吉にもこれが見受けられる、刀鍛冶は自分の欲する姓を勝手に用ひたと見へる。

萬治三年頃

萬治三年頃（廿三四歳）

寛文元年頃

寛文六年頃

三十三歳作

四十一歳作

四十五歳作

濤亂刃

津田助廣がこの濤亂刃の創始であると云ふ、亂刃を崩さず技巧的に焼いた刃できながら怒濤を思はしむる故にこの名がある、後世鎌田魚妙がこれを以て助廣を新刀第一と賞讃せしものである。
(類似工 坂倉照包、津田助直、尾崎助隆、水心子正秀、手柄山正繁)

◇祐利 久留米 〔慶應—筑後〕 新々刀 中上作

久留米の治工、加賀介祐永門である。

刻銘「筑後久留米住祐利」

◇祐包 横山初代 〔慶應—備前〕 新々刀 中上作

横山祐盛養子にして俊吉とも云ふ、加賀介祐永が友成五十六代の孫と切るに對して此工は五十八代孫と云ふ。

刻銘「備前長船住横山祐包」

友成五十八代の孫とあれど、代々連綿として傳はれるものにてはなからん、五十八代(約九百五十年經過)の永きに亘つて系譜の確實は期し得られるものではない、ただ備前鍛冶の雄友成の遺業を繼いでの自稱に過ぎない。

◇祐包 横山貳代 〔明治—東京〕 新々刀 中作

初代祐包子にて健治と云ふ、後砲兵工廠にて造る。

刻銘「祐包作」

◇祐芳 吉川 〔慶應—阿波〕 新々刀 中上作

加賀守祐永の一派、生國阿波か。

刻銘「阿州吉川源祐芳」

◇祐　高　横山　〔慶應―備前〕　新々刀　**中作**

横山一派、明治卅一年三月十二日沒す。

刻銘「備州住祐高造之」

◇祐　直　横山　〔安政―備前〕　新々刀　**中上作**

横山祐平弟である。

刻銘「備前長船住横山祐直作」

◇祐　永　横山　〔天保―備前〕　新々刀　**上作**

祐平次男、兄祐盛が祐定家に養子になるに及び、父祐平の跡をつぎ自ら友成五十六代孫と云ふ、他にも「友成五十六代孫」と切る者多い、嘉永四年六月二日永眠年五十七、作品地鐵無地風、刄文匂締りたる小五ノ目丁子足入り鮮明なるもの。

刻銘「横山加賀介藤原祐永」「備前長船祐永」「備前長船住横山加賀介藤原祐永」

菊紋に一を切る

丁子

地刄強く匂締りたる小丁子足入りハッキリした刄文。（類似工　横山祐包、濱部壽格一派）

◇祐信　横山

〔天保―備前〕　新々刀　**中上作**

刻銘「備前國住横山將監源祐信作」

◇祐國　備前守

〔寛文―攝津〕　新刀　**中上作**

紀州石堂一派、助國とも云ふ、濤亂刄又は丁子刄を多く造る。（業物）

刻銘「花房備前守源祐國」「備前守源祐國」「紀伊國祐國」

◇祐定　七兵衛

〔萬治―備前〕　新刀　**中上作**

藤四郎祐定嫡子、永正與三左衛門五代孫と云ふ、延寶二年八月九十八歳にて沒、古刀祐定の如く五ノ目丁子を燒く、反淺く重ね幾分厚い。（業物）

刻銘「備前國住長船七兵衛尉祐定作」「備前國住長船祐定作」

七兵衛は新刀初期の刀工であるが、晩年の作のみ多く、時代水應、明曆、萬治の頃を中心とする樣である。

七十八歳作

八十四歳作

備前刀は古刀期藤四郎祐定以來跡を絶ち新刀初期に作品を見ない、時代の好尙相州もの禮讃の風濃厚にして、相州傳の隆盛を見るに至つた爲めであらう、藤四郎子七兵衛作品が寛永十年頃卽ちその晩年(五十七歳)から漸次その作品を見る、これは慶長初期相州傳萬能の風が衰へ寛永以降に至りて順次各傳の勃興を見るに至つた故であらう。

◇祐定 上野大椽 〔寛文―備前〕 新刀 上作

通稱平兵衛、永正與三左衛門六代之孫、寛文四年秋上野大掾受領、作品も襲名もこの時より初まりたるものと思はれる、享保六年冬沒す、行年八十九。

刻銘「備州長船住横山上野大掾藤原祐定」「横山上野大掾藤原祐定」「備前國長船住祐定」「横山上野守藤原祐定」

新刀期備前刀工の隆盛はこの横山上野大掾を中心とするものであらう。

◇祐定 大和大椽 〔正德―備前〕 新刀 中上作

初め七之進祐信、後七兵衞と稱す、正德六年大和大掾受領、養父上野大掾祐定老年の元祿末年より代作をなす、自作銘は余り世に殘らない。

刻銘「大和大掾藤原祐定」「備前國長船住祐定」「備前國長船住鍛冶正統大和大掾藤原祐定」

◇祐定 四代 〔元文―備前〕 新刀 中上作

忠之進と號し、延享二年六十七歳にて沒す。

刻銘「備前國住長船祐定」

◇祐　定五代　〔寶暦―備前〕　新刀　**中上作**

横山七兵衛と稱す、寶暦二年壽光と改め明和八年五十七歳沒す。

刻銘「備前國壽光」「備前國住長船祐定」

◇祐　定河内守　〔元祿―備前〕　新刀　**中上作**

左衞門佐と云ひ、元祿中河内守受領、攝津、作州津山にても造る。

刻銘「河内守祐定」「備前國住長船河内守源祐定」菊一を切るものもある

◇祐　定源左衞門尉　〔慶安―備前〕　新刀　**中上作**

藤四郎祐定三男、七兵衞尉及宗左衞門尉と三人合作がある。

刻銘「備前國長船源左衞門尉祐定作之」

◇祐　定宗左衞門尉　〔慶安―備前〕　新刀　**中上作**

藤四郎祐定四男、七兵衞尉、宗左衞門尉との三人合作がある。（業物）

刻銘「備州長船横山宗左衞門尉祐定作」

三人合作

◇祐　定與三左衞門尉　〔寛文―備前〕　新刀　**中上作**

永正與三左衞門九代末葉にして自らも與三左衞門と名乘る。（良業物）

刻銘「備前長船住祐定永正九代末葉」「備前國住與三左衞門尉祐定」

◇祐 定 五十六代孫　〔安政—備前〕　新々刀 **中上作**

横山祐平子にして祐定嫡流を繼ぎたるか、祐永と同様に「友成五十六代孫」と稱す。

刻銘「備前長船住祐定」裏に友成五十六代孫と切る

友成五十六代孫とあれど友成は時代永延と見て約九百五十年に近い系統である、到底信じられない、只自稱に過ぎないものである。

◇祐 定 潜龍士　〔明治—備前〕　新々刀 **中上作**

明治、大正にその作あり、祐永の如き作風。

刻銘「備前長船潜龍士祐定」

◇祐 光 横山　〔元治—常陸〕　新々刀 **中上作**

横山祐定續きならんと思はる。

刻銘「於水府横山祐光作」

◇祐 平 伊勢守　〔文化—備前〕　新々刀 **中上作**

宗左衛門祐定より五代目に相當、初め祐定とも銘す、後大和守元平の弟子になる。

刻銘「横山伊勢守祐平」「備前國長船住祐平造之」「備陽長船住祐平作」

◇佐 壽 阿波　〔文政—阿波〕　新々刀 **中作**

刻銘「阿波住安喜佐壽」

甚六兼若　上作
一竿子忠綱　上作
初代國貞　上作
大與五國重　上作
肥後大掾貞國　上作
ソボロ助廣　上作
以上の六工を〔**上々作**〕と改めます。

日本刀工辭典　新刀篇　完

年代表

慶長	元年丙申	(10.27)	三四二
	二年丁酉		三四一
	三年戊戌		三四〇
	四年己亥		三三九
	五年庚子		三三八
	六年辛丑		三三七
	七年壬寅		三三六
	八年癸卯		三三五
	九年甲辰		三三四
	十年乙巳		三三三
	十一年丙午		三三二
	十二年丁未		三三一
	十三年戊申		三三〇
	十四年己酉		三二九
	十五年庚戌		三二八
	十六年辛亥		三二七
	十七年壬子		三二六
	十八年癸丑		**三二五**
	十九年甲寅		三二四
元和	元年乙卯	(7.13)	三二三
	二年丙辰		三二二
	三年丁巳		三二一
	四年戊午		三二〇
	五年己未		三一九
	六年庚申		三一八
	七年辛酉		三一七
	八年壬戌		三一六
	九年癸亥		三一五
寛永	元年甲子	(2.30)	三一四
	二年乙丑		三一三
	三年丙寅		三一二
	四年丁卯		三一一
	五年戊辰		三一〇
	六年己巳		三〇九
	七年庚午		三〇八
	八年辛未		三〇七
	九年壬申		三〇六
	十年癸酉		三〇五
	十一年甲戌		三〇四
	十二年乙亥		三〇三
	十三年丙子		三〇二
	十四年丁丑		三〇一
	十五年戊寅		**三〇〇**
	十六年己卯		二九九
	十七年庚辰		二九八
	十八年辛巳		二九七
	十九年壬午		二九六
	二十年癸未		二九五
正保	元年甲申	(12.23)	二九四
	二年乙酉		二九三
	三年丙戌		二九二
	四年丁亥		二九一
慶安	元年戊子	(2.15)	二九〇
	二年己丑		二八九
	三年庚寅		二八八
	四年辛卯		二八七
承應	元年壬辰	(9.28)	二八六
	二年癸巳		二八五
	三年甲午		二八四
明暦	元年乙未	(4.13)	二八三
	二年丙申		二八二
	三年丁酉		二八一
萬治	元年戊戌	(7.23)	二八〇
	二年己亥		二七九
	三年庚子		二七八
寛文	元年辛丑	(4.25)	二七七
	二年壬寅		二七六
	三年癸卯		**二七五**
	四年甲辰		二七四
	五年乙巳		二七三
	六年丙午		二七二
	七年丁未		二七一
	八年戊申		二七〇
	九年己酉		二六九
	十年庚戌		二六八
	十一年辛亥		二六七
	十二年壬子		二六六
延寳	元年癸丑	(9.21)	二六五
	二年甲寅		二六四
	三年乙卯		二六三
	四年丙辰		二六二
	五年丁巳		二六一
	六年戊午		二六〇
	七年己未		二五九
	八年庚申		二五八
天和	元年辛酉	(9.29)	二五七
	二年壬戌		二五六
	三年癸亥		二五五
貞享	元年甲子	(2.21)	二五四
	二年乙丑		二五三
	三年丙寅		二五二
	四年丁卯		二五一
元祿	元年戊辰	(9.30)	**二五〇**
	二年己巳		二四九
	三年庚午		二四八
	四年辛未		二四七
	五年壬申		二四六
	六年癸酉		二四五
	七年甲戌		二四四
	八年乙亥		二四三
	九年丙子		二四二
	十年丁丑		二四一
	十一年戊寅		二四〇
	十二年己卯		二三九
	十三年庚辰		二三八
	十四年辛巳		二三七
	十五年壬午		二三六
	十六年癸未		二三五
寳永	元年甲申	(3.13)	二三四
	二年乙酉		二三三
	三年丙戌		二三二
	四年丁亥		二三一
	五年戊子		二三〇
	六年己丑		二二九
	七年庚寅		二二八
正德	元年辛卯	(4.25)	二二七
	二年壬辰		二二六
	三年癸巳		**二二五**
	四年甲午		二二四
	五五乙未		二二三
享保	元年丙申	(6.22)	二二二
	二年丁酉		二二一
	三年戊戌		二二〇
	四年己亥		二一九
	五年庚子		二一八
	六年辛丑		二一七
	七年壬寅		二一六
	八年癸卯		二一五
	九年甲辰		二一四
	十年乙巳		二一三
	十一年丙午		二一二
	十二年丁未		二一一
	十三年戊申		二一〇
	十四年己酉		二〇九
	十五年庚戌		二〇八
	十六年辛亥		二〇七
	十七年壬子		二〇六
	十八年癸丑		二〇五
	十九年甲寅		二〇四
	二十年乙卯		二〇三
元文	元年丙辰	(4.28)	二〇二
	二年丁巳		二〇一
	三年戊午		**二〇〇**
	四年己未		一九九
	五年庚申		一九八
寛保	元年辛酉	(2.27)	一九七
	二年壬戌		一九六
	三年癸亥		一九五
延享	元年甲子	(2.21)	一九四
	二年乙丑		一九三
	三年丙寅		一九二
	四年丁卯		一九一
寛延	元年戊辰	(7.12)	一九〇
	二年己巳		一八九
	三年庚午		一八八
寳暦	元年辛未	(10.27)	一八七
	二年壬申		一八六
	三年癸酉		一八五
	四年甲戌		一八四
	五年乙亥		一八三
	六年丙子		一八二
	七年丁丑		一八一
	八年戊寅		一八〇
	九年己卯		一七九
	十年庚辰		一七八
	十一年辛巳		一七七
	十二年壬午		一七六
	十三年癸未		**一七五**
明和	元年甲申	(6.2)	一七四
	二年乙酉		一七三
	三年丙戌		一七二
	四年丁亥		一七一
	五年戊子		一七〇
	六年己丑		一六九
	七年庚寅		一六八
	八年辛卯		一六七
安永	元年壬辰	(11.16)	一六六
	二年癸巳		一六五
	三年甲午		一六四
	四年乙未		一六三
	五年丙申		一六二
	六年丁酉		一六一
	七年戊戌		一六〇
	八年己亥		一五九
	九年庚子		一五八
天明	元年辛丑	(4.2)	一五七
	二年壬寅		一五六
	三年癸卯		一五五
	四年甲辰		一五四
	五年乙巳		一五三
	六年丙午		一五二
	七年丁未		一五一
	八年戊申		**一五〇**
寛政	元年己酉	(1.25)	一四九
	二年庚戌		一四八
	三年辛亥		一四七
	四年壬子		一四六
	五年癸丑		一四五
	六年甲寅		一四四
	七年乙卯		一四三
	八年丙辰		一四二
	九年丁巳		一四一
	十年戊午		一四〇
	十一年己未		一三九
	十二年庚申		一三八
享和	元年辛酉	(2.5)	一三七
	二年壬戌		一三六
	三年癸亥		一三五
文化	元年甲子	(2.11)	一三四
	二年乙丑		一三三
	三年丙寅		一三二
	四年丁卯		一三一
	五年戊辰		一三〇
	六年己巳		一二九
	七年庚午		一二八
	八年辛未		一二七
	九年壬申		一二六
	十年癸酉		**一二五**
	十一年甲戌		一二四
	十二年乙亥		一二三
	十三年丙子		一二二
	十四年丁丑		一二一
文政	元年戊寅	(4.22)	一二〇
	二年己卯		一一九
	三年庚辰		一一八
	四年辛巳		一一七
	五年壬午		一一六
	六年癸未		一一五
	七年甲申		一一四
	八年乙酉		一一三
	九年丙戌		一一二
	十年丁亥		一一一
	十一年戊子		一一〇
	十二年己丑		一〇九
天保	元年庚寅	(12.10)	一〇八
	二年辛卯		一〇七
	三年壬辰		一〇六
	四年癸巳		一〇五
	五年甲午		一〇四
	六年乙未		一〇三

年號	年	干支	改元	年數
	七年	丙申		一〇二
	八年	丁寅		一〇一
	九年	戊戌		**一〇〇**
	十年	己亥		九九
	十一年	庚子		九八
	十二年	辛丑		九七
	十三年	壬寅		九六
	十四年	癸卯		九五
弘化	元年	甲辰	(12 2)	九四
	二年	乙巳		九三
	三年	丙午		九二
	四年	丁未		九一
嘉永	元年	戊申	(2.28)	九〇
	二年	己酉		八九
	三年	庚戌		八八
	四年	辛亥		八七
	五年	壬子		八六
	六年	癸丑		八五
安政	元年	甲寅	(11.27)	八四
	二年	乙卯		八三
	三年	丙辰		八二
	四年	丁巳		八一
	五年	戊午		八〇
	六年	己未		七九
萬延	元年	庚申	(3.18)	七八
文久	元年	辛酉	(2.19)	七七
	二年	壬戌		七六
	三年	癸亥		**七五**
元治	元年	甲子	(2.20)	七四
慶應	元年	乙丑	(4.7)	七三
	二年	丙寅		七二
	三年	丁卯		七一
明治	元年	戊辰	(9.8)	七〇
	二年	己巳		六九
	三年	庚午		六八
	四年	辛未		六七
	五年	壬申		六六
	六年	癸酉		六五
	七年	甲戌		六四
	八年	乙亥		六三
	九年	丙子		六二
	十年	丁丑		六一
	十一年	戊寅		六〇
	十二年	己卯		五九
	十三年	庚辰		五八
	十四年	辛巳		五七
	十五年	壬午		五六
	十六年	癸未		五五
	十七年	甲申		五四
	十八年	乙酉		五三
	十九年	丙戌		五二
	二十年	丁亥		五一
	二十一年	戊子		**五〇**
	二十二年	己丑		四九
	二十三年	庚寅		四八
	二十四年	辛卯		四七
	二十五年	壬辰		四六
	二十六年	癸巳		四五
	二十七年	甲午		四四
	二十八年	乙未		四三
	二十九年	丙申		四二
	三十年	丁酉		四一
	三十一年	戊戌		四〇
	三十二年	己亥		三九
	三十三年	庚子		三八
	三十四年	辛丑		三七
	三十五年	壬寅		三六
	三十六年	癸卯		三五
	三十七年	甲辰		三四
	三十八年	乙巳		三三
	三十九年	丙午		三二
	四十年	丁未		三一
	四十一年	戊申		三〇
	四十二年	己酉		二九
	四十三年	庚戌		二八
	四十四年	辛亥		二七
大正	元年	壬子	(7.30)	二六
	二年	癸丑		**二五**
	三年	甲寅		二四
	四年	乙卯		二三
	五年	丙辰		二二
	六年	丁巳		二一
	七年	戊午		二〇
	八年	己未		一九
	九年	庚申		一八
	十年	辛酉		一七
	十一年	壬戌		一六
	十二年	癸亥		一五
	十三年	甲子		一四
	十四年	乙丑		一三
昭和	元年	丙寅	(12.25)	一二
	二年	丁卯		一一
	三年	戊辰		一〇
	四年	己巳		九
	五年	庚午		八
	六年	辛未		七
	七年	壬申		六
	八年	癸酉		五
	九年	甲戌		四
	十年	乙亥		三
	十一年	丙子		二
	十二年	丁丑		一

昭和十二年十月廿二日印刷
昭和十二年十月廿七日發行

日本刀工辭典 新刀篇
定價金八圓五十錢

著作兼發行者 東京市麴町區九段四丁目三番地 藤代義雄

印刷者 東京市芝區西久保巴町一〇五番地 中田正次郎

發賣所 東京市麴町區九段四丁目三番地 藤代商店
電話九段二六一三番
振替（東京七三五〇九番 大阪九七〇七六番）

―發賣中―

名刀全身押形

一　藤源次助眞、長船長光
二　畠田守家、福岡一文字
三　粟田口久國、長船兼光
四　青江次直、延壽國時、三條吉家
五　長船長義、長船景光
六　左文字、來國次、長谷部國信
七　新藤五國光、左吉貞、豊後友行

定價　各一圓づゝ　全部で六圓（送料共）

―藤代義雄著―

―豫告―

名刀全身押形（後輯）

明春發行

日本刀工辭典（古刀篇）

昭和十三年四月發行豫定

―發賣中―

古刀篇（日本刀工辭典）

昭和十三年四月發行豫定

月刊 名刀圖鑑

新古刀を通じ名刀を綜合的に選び、これを著者獨特の定評ある押形手法に因つて表現せるもの併て刀劍の新研究に及ぶ。

四六倍版、上質アート紙綴込式、七枚一組（一輯分）

一輯　金三十五錢送料共
半年（六輯）二圓
一年（十二輯）四圓
送料共

圖鑑 江戸三作之研究

正作と僞作との押形を時代順に掲げ比較對照せしめた斬新なる研究圖鑑。

水心子正秀
大慶直胤
源清麿

定價金二圓八十錢（送料共）

―藤代義雄著―

發行、發賣所
藤代商店
東京市麹町區九段四丁目三番地
電話九段二六一三番
振替 東京七三五〇九番 大阪九七〇七六番